江戸時代の家族道德との比較

庶民の間にては、各一家を構へてより後は、名利の爲には風馬牛の如きもの多かりしなり。蓋し我族姓制度の餘勢未だ盡きずして將に破れんとする平安時代の社會組織は、其後期より勃興して家、氏の思想を中心としたる武士社會の極度の發達をなせる江戸時代の道德に比すれば、遙かに個人本位にして、且低級なるものなりしに相違なく、人情主義の見地より

夫婦の道德

して當時の社會組織と世風とが、索漠として情味をかけるものなりしは明かなり。

次に夫婦の道德に就いて見るに、一夫多妻の風行はれたるものながら、自ら正妻と目すべきものあり。或は門地の正しきより、或は最初の結婚たるよりして、その本の妻を厚うするは、世人の一般に是認したる所なりき。當時の女子の貞操觀念は、後代に比して著るしく微

女子の貞操と時代思潮

弱なるものとなりて、説話の中、極端なる事例に當りても、女子の無節操、無氣慨を戒めたるもの一もなく、却つて、男子の無力の罪に歸せしもの多し。但し或る人妻の乞丐に捕はれて、辱められんとするや、幼兒を質として逃れ行き、數人の武者に救を求めしに、武者共、『子ハ悲トモ乞丐ニハ不近付シト思テ子ヲ棄テ逃ルコトヲ讃メ感シケル』と云へるは、極めて特色ある話なれども、これはた貞操觀念に出づる實際的の例話なりや否やは疑問なりとすべし。

殿上人の家庭

殿上人などの家庭にありても亂雜のもの少からざりしは蔽ふに由なく、國經大納言が醉中、甥なる時平に北の方を奪はれて、女の幸の爲るなりけりと悲歎せし話（卷廿八、第十三）や、殿上にて妻に狩衣を取りおこせしに、妻の不注意より留守に通ひ來りし法師の脱ぎ懸けし椎鈍の衣を疊みよこしたるなどの笑話（卷廿八、第十三）も見えたり。又土佐國の兄妹の漂流して孤島に上り夫婦となりし話（卷廿六、第十）にて、何事もこれ宿世の致す所なりと評したるは、源氏物語に物の紛れ事件を觀ぜしと相近き思想なるべし。三代實錄に貞觀中、近江、伊香郡の人、石作部廣繼の女、年十五にして嫁し、卅七才に及びて夫常陸守死するや、哭して再嫁せざるを時人の稱して節婦となすと見えたるも、説話の上に心許なき當時の女流の貞操觀念を證するものあるに似たり。畢竟佛敎と儒敎とをもて、社會の內外より敎化の盛んに行はれたる時代なりしかども、一は社會組織の性質上より、一は文化の爛熟化其物よりして、當時の國民道德は一般に柔微にして必ずしも健固のものと謂ふを得ざりき。國民的要求の一新したる武家時代に入りては、かゝる道德上の方面にも、亦一段の生氣と革新とを喚起するの要有りしものなり。

時代の柔微なる國民道德性

第三節　文化的生活

第一　土俗と風習

説話中に現はれたる土俗的生活及び風習は、遙かに平安時代以前に渉るものあり。又佛典及び支那の文獻を通じて輸入せられたる異國的 Exotic の記述も少からざれば、之を以て直ちに平安時代中の一時期、例へば、第三乃至第五文化時代の民俗生活を反映したるものなりとは云ふべからざるに似たり。然れども、其大部分は猶、著者の心理を通じて、著者の周圍の生活に同化したるものなれば、之を以て凡そ平安中期の土俗と風習とを推知するの材料に供するも大過なかるべし。

集の説話と平安中期の土俗風習

説話中に於ける土俗と風習とは、素より夫々特別の分科に屬して、細密なる研究にまつべきもの多けれども、茲には先づその大要につき、文獻的、土木考古學的に、なるべく細目を多くして之を考察し、以て當時の生活の全般の把持に便すべし。

住居と時代の生活

土俗の中重要なるは、住居なるが、宮殿及び貴人の邸宅については素より、都會ならぬ地方人の陋屋、田舍の庵居等についても種々の記載を含めり。是等は勿論實用、裝飾、保護等の文化程度に於て、夫々相異なる發達を成せるものなれども、大體斯くの如き都會生活と斯くの如き地方生活とを包含せしものが、當時の文化の內容たる時代生活なりしと、通觀し得ざるにあらず。今是等の細目を、具體的に一個の生活中に形ち作りて記述するは、讀者に取りて頗る便ならんも、暫く其時を有せざるが故に、先づ主なる項目につきて之を列記する事とすべし。

住居の種々の記載

五條堀川邊の古家の樣は、五間の寢殿に、組入天井、寢殿の中の橋隱の間、板敷の放出、持ち歩きたる疊、中の間、文挾、車宿、南の廂、戸ある塗籠（第廿七、第廿一）とあり。塗籠の多かりし事は、前にも言へり。當時の建築は、脆弱なりし爲か風害にあへること多かりしが如く（卷十三、第十九）國史中にも其記事の極めて多きに適へり。

堀川の古家と伊勢の御息所住居の細叙

持佛堂も度々記さる。飛驒の白河村にも、大なる一室の寺の如きもの各家にありと聞けるが、さる制の物なりしにや、兎に角、單なる佛壇ならざりし事は明かなり。（卷十五、第十四）又五條邊の伊勢の御息所の住居は、伊衡勅使にて行ける條に、庭木立、前栽、庭苔、寢殿、南面、帽額の簾の語あり。中間の脇廊にて案內を乞へるに、南面に寄居入らせ給へとて簾をあぐるに母屋の簾下りたり。朽木形の淸き几帳、三間許立つ。東西三間許去りて四尺の屏風立てり。母屋の簾に添ひ、高麗端の疊を延べて、唐錦の茵をしけり。板敷鏡の如く物皆映りて屋の樣古く神さびたり。香薫り、女房の袖口匂ひ、額つきなど透きて見ゆ。簾の許にて仰言宣ふに返事髴に聞ゆ。汗衫の美童銚子持ていざり出で繪扇に盞を据えてさす。女房硯蓋に淸き薄

庶民及び地方人の住居の制

西山の小家の細叙

時人の衣裝風俗

様敷き、交菓子を出す。四五度飲めるに又簾より盞を出したり。次に紫の薄様に歌書き、同じ色の薄様につゝみ、女の裝束を添へて押出す。赤色重唐衣、地摺の裳濃き袴也。女房いたく少將をめでゝ車の音前を追ふ聲聞えぬ迄見送ると叙べたり。(卷廿四、第卅一)築垣、南北面、車借、勾欄、上下の蔀、半蔀、御隔子なども、屢〻見ゆ。讀者の胸裡には、此等の梗概に依りても、猶能く當時の住居と京紳生活の模様の鮮明に浮び來るものあらん。

庶民又は地方人の住居については、地火爐、土御門の馬出、平張、間木、竈、板敷の下、外堀式の館、陷穽、檜垣近き寢所、連子、檜皮葺、長押の枕、木柴垣、大屋形口、遣戸、出居、外居、切懸などの制語あり。壺屋は都鄙共に見ゆ。田居の小家、乞食小屋(卷廿、第卅五)などの記事もあり。卷二十二、第七には、西山の小家の様を、檜垣、小唐門屋、板葺寢殿、東の三間許の小廊に馬を入れ、馬飼男居たり。檜網代の天井、網代屏風、高麗端疊三四帖、庇の遣戸など云へり。京都には大垣(卷廿二、第十五)羅城(卷十九、第五)ありし様、清水の舞臺の高かりし様(卷十九、第四十一)なども見ゆ。

時人の風俗には女の市女笠、武張たる男の胡錄負ひて馬に乘る風、さては、京の水銀商の淺黄の打衣、青黒の狩衣袴、練色の衣、厚綿三枚に菅笠をつけ、草馬に乘れる姿、又頭に物を載せて歩きし様(卷十六、第卅三、卷廿、第六等)日ノ裝束、絹布、紙衣、田笠を被り蓑を腰にかけ、調布の帷の穢きを被たる法師姿、白衣姿、下衆の水旱裝束(卷廿六、第十六等)黒き水干姿、淺黄の上下着(卷廿七、第五)田舍女の白布の襖、中帶姿(卷廿六、第十七)貴人の狩衣、指貫姿、下男の丁子染、青鈍の狩衣、被姿、草色の布衣、直垂姿、盜賊の裾濃袴など見えたり。襖は武官の闕腋の略制にして布狩衣なり。皮子に入れて、文綾十疋、美八丈十疋、疊綿百兩、六丈の白細布十段、紺布十段運ぶもあり。(卷廿六、第十八)後三年繪詞にも見ゆる綾菰笠も屢〻記されたり。調度には御厨子、碁秤、黒柿机、春日器、泥障、指入坏、椋(ハムサウ)提、鋺、銀匙、折櫃、柱松、高足駄、平足駄、引入烏帽子、檜扇、寺冠、社冠、御器、大盤、紙障子、庖丁など見ゆ。武士、强盜などの打出太刀を帶べる事も此集に記されぬ。

調度器具

死人忌穢の習俗

時人の習俗には、又死人を厭ひ、穢れを忌みしこと甚だし。死屍は或は燒き、或は土葬せし様も見ゆれども、多くは道路に遺棄したるが如く、羅城門樓上、死屍堆積せる事など見えたり。史に承和九年東西の悲田に勅して、島田及び加茂河原の髑髏五千五百餘を燒かしめたりなど云へるも、座ろに想はるべし。播磨國、印南野に野宿せる男の話にては、田舍の葬式の様よく見えたり。(卷廿七、第卅六)西の京の下毛野敦行が、隣人の死後、門の方位あしきが爲に、葬りに出づる能はざるを憐み、中垣を破りて已れが家の門より死人の車を出さしめしを、慈悲廣大と評し、天道も哀みけるにや、年九十迄も生き子孫繁昌せり(卷廿、第四十四)と云へるなど、よ

病者と老人の嫌厭

く當時の俗情を示すものなるべし。死人に次いでは、病人もいたく厭み嫌はれしが如く、親族、主人にても病み伏したるものは之を屋外に出したること諸所に見えたり。これ春日權現驗記（一九七頃）等の繪卷物にも、其樣殊に凄慘に描かれたる所以にして、説話に見ゆる趣も當時の實情なりしかし。又老人の嫌厭せられたることは萬葉集歌の述懷の如く、姨捨山の話の行はれたる事にも見えて、斯る方面の道德は一般に頗る幼稚なりしが如し。

物忌、方違、信心風習

物忌の類りに行はれし爲にや京中の空屋も甚多くして、空屋について鬼靈などの物語の附せしも從ていと多かりき。方違をして出で歩き、或は京に入るにも、忽に大津、山崎邊にて、小家に二三日を消するもありき。打蒔米して鬼を追ふことなども見ゆ。信心風習も佛敎の行はれたるに伴れて到る處に記されたるが、伊勢の老婆の毎月上半は佛事を營み、下半は世事を力めて世渡りせし話（卷十五、第五十一）に其趣殊に著はなり。老婆は日比香を買ひて寺に持行きて佛前に供養し、春秋の山野に時々の花を摘み、香と共に捧げ、又米鹽菓子など貯へて諸僧に供するを例としたりと云へり。これ殆んど近世の民間に見る篤信の老人の生活と大差なかるべし。

藥子と心中

藥子の風も意外に多く、男女間の風俗の亂れたりしと生活難との爲に、中流以下には頻々として此惡風行はれたり。流產の藥なども世に行はれし樣、性空話（卷十二、第四世）に見ゆるが如し。後世の心中の例は見えざるも、指を切りて信誠を誓ふ話は、志賀寺緣記にも見え、又男女が戀愛の爲に心中に近き運命に突入して辭せざりし樣は、六宮の姫の話（卷十九、第五）安積沼話（卷廿、第八）等に見つべし。但しそれも、主として運命の厭迫を甘受すると云ふに止まりたれば、死して戀愛の新境を開くと云ふが如き意味は、當時の男女の夢想せざりし所ならん。

乞食と悲田院

乞食者の説話も極めて多く、乞丐の小屋など云ふ語も見えたり。清水の坂本邊りには片輪者、困窮者の收容所ありて、悲田院なども建てりしが如し。（卷廿、第廿五）

三代實錄の崇親院と延命院の記事

三代實錄にも貞觀元年に、良相、藤氏の無居の者の爲に崇親院を建てゝ施藥院に隷屬せしめ、同じ疾患者の爲に、延命院を設けて勸學院に隷せしめしと見えしが如く、斯る社會的救濟の思想の、流石に已に幾分實現せられたるを示せり。

餌取と山窩民

卷二十、第四十に、義紹院の泉川原、夜立の森の邊りにて逢へる乞食の寒げなれば、衣を馬上乍らに打懸けやりしに、人に物を惠むにも無禮なりとて受けざりしなど云へる話は、何となく我國民性に解し易き心理なり。更に又餌取と云へる一種の異俗民の山中に棲めりし話集中に甚だ多し。こは鎭西の方にも、大原山の奥などにもありき。其俗牛馬猿猪の肉を屠り食ひ、皮剝など業としたり。山窩民及び穢多の當時に於け

宴遊と當時の食物

る記錄として見るべし。

宴遊の話も屢〻記さる。貴人の盛なる宴會もあれば、西京なる庶人の物食ふ會もあり。筑前の守章家の館に侍共を集めて物食ひし時、尊者より順次に『下シ』と云ひて、御器のを我の器に入れて食ふ俗ありし事も見ゆ。又船岡の子の日の遊びには、後に乞食など餘り物を食ひに群り入れる樣を記しぬ。食物には、平茸、舞茸、湯飯、水飯、鹽引鮭、鯛の醬、鱈の鹽辛、鯉の座敷料理、鯛の荒卷、越前、陸奥の薯蕷、干瓜、信濃の胡桃、曾丹の食ひし搔栗、果物の菓子、瓜餅、鮨鮎、燒漬、栢の汁物、酢海松、燒蛤、鮑魚、煮物、燒物及び庶民の肉食の風など樣々なれども、當代の料理の方面は、他の文化の精美なる進化の割合に、幼稚なるものなりしが如し。菓子、餅など入るゝ物を餌袋と云へり。上戸の話も少からず。酒の好み用ひられし樣は今も異ならず。餅酒などゝもあるは濁酒の類なるべし。露汁に味煎と云へるもあり。薯蕷粥食ひに利仁の老五位を京より越前迄具し行けるも、食物に關する一笑話なり。

狩獵と狗山

次ぎに著るしき風習は、狩獵の廣く盛に行はれたる事なり。所謂狗山、鷹狩、待山など、その主なるものにして、筑紫より陸奥に渉りて、諸所の說話に多き事先にも言へり。今日尾張を始め諸所に、此地名を存するも、恐らくは當時の土俗の固着したるものならん。狗山とは

飽田の石拾

狗を連れて山に入り、鹿、兎、猪等を狩り出し、弓を以て射取ることにて、肥後守源章家が飽田と云ふ所にて、三千の人を發し大小石を取り去らしめ、山にある鹿共悉く狩り殺したれば、飽田の石拾といみじき罪に云はれしなど有名なる話譚すらありき。當時の犬に、耳垂狗の類ありし事多くの說話に見えたるも注意すべきことなり。つぎに鷹狩の風俗も大に發達して、京師の公卿、公達を初め、中央、地方の武士及び庶民も屢〻行へり。小鷹狩なる行事の名も見ゆ。滿仲の如きは、鷹四十五を夏飼させて、殺生に日を暮したりと云へり（卷十九、第四）。

鷹狩の盛行

ことに西京鷹師の男の話（同、第八）にては、夜は鷹を手に据ゑ、晝は雉を狩り、家には鷹を七八羽木に居ゑ、狗廿許も飼ひ、殊に夏飼の程は多くの生類を殺すこと數知れず。春は鳴鳥を合すとて、曉に野に出でゝ之を捕ふと云へり。是等の條に見ゆる鷹飼、犬飼は甚しく大仕掛に武者事立てるものにして、大狗鈴に附け鳴らし、勢子は杖にて追ひつゝ狩り立つる樣物凄き許りなり。又待と云へるは、高木の胯に横木を結びて上りゐ、下に鹿通るを待ちて射るなり（卷廿七、第廿二）。又燈しと云へることも獵の一法なりしにや、この時は騎馬にて弓を携へ焰串に火をかけて射るなり。（卷廿七、第廿四）こは拾遺集に照射の歌出でしものなり。其他或は築にて、或は釣して、或は網にて、魚を漁りし樣も諸所に見えたり。肉食の盛なりしも宜なりと謂ふべし。

待ちと灯し肉食の風

農耕生活と器具

又農耕の具には馬鬣、辛鋤、鎌、鍬、斧、鑿など記されぬ。

第二　交通と文化

當時の國民的生活と馬

交通には馬と船と其尤も著るしきものなり。馬は當時の國民生活に甚だ親しかりしものにして、武士は勿論、京人、僧俗、女子と雖も出行又は旅行には、必ずこれに騎りしが如し。一般に東國の馬の名聲世に高く、逸物馬に對して、草刈馬など云ふ名稱も見えたり。又旅馬には、旅籠馬、皮籠馬の名も見ゆ。但し車は牛車を主とし、祭の車立のこと、唐車など云ふも見ゆ。從つて牛飼の話に富めるも、馬車（卷十五、第四十五）の記事は集中甚だ稀なり。

舟航と港津、清行封事の航程

船は淀川、瀬戸内海の通路を第一とし、山崎、河尻、武庫、魚住津、波方津、文字關など有名なる津港の話多し。是等の津港に關しては、かの延喜の三善清行の封事（本朝文粹卷二、一二〇頁）に、魚住津（魚住津は播磨英原郡數邑の稱なり。）を改修せんことを乞へる中に、檉生泊、一日程韓泊、一日程魚住泊、一日程大輪田泊、一日程河尻と見えたり。こは貞觀の頃の樣なり。又行基が行程を計りて津港を築くとも云へり。魚住津に關しては、史にも天平九年創設、承知二年清原夏野の修工、貞觀三年東大寺賢如の修工など見えて、前期に重大なる港津たりしこと明かなり。但し右の航路系統が、平安後期即ち集の頃迄繼續せしや否やは明かならず。近江湖もこの系統の終

魚住津と近江湖の話

外海航路と近海の網手引船

點たりしが、未だ琵琶湖の名無かりしが如く、其主なる鯉と大海の鰐と戰へる話にもこの名見えず。其他、北海、南海等の漁獵の話多き事、說話の地方的分布にも知られたれば、我通舟航海の業は意外に普通に發達したるべし。萬葉時代遣唐使交通の外海航路も、唐、宋、渤海の商船猶來往したれば、筑紫の島々の舟航もいと頻繁げに說話の上に表はれたり。京畿の近海河川等の舟路は主に引船なりしが如く、網手の事、到る所に見ゆ。當時の日記、和歌に此樣の記されしもげにと想はるべし。

商業貿易と實物交換の風

商業貿易の事も亦種々の方面に渡れり。錢貨については、國史に顯宗帝の銀錢の記事を始め、天武帝の銅錢を通用せしめ給ひし事、持統帝の鑄錢司を置かれし事等、奈良時代以前より見ゆる所なるが、實際に於ては平安時代の當時にありても、實物交換 Barter の風尙未だ盛に行はれしこと、說話の面に現はなり。美絹三疋直米三十石に交換（卷十七、第十）せしは、後堀河帝の寬喜二年、米價一石、錢一貫文と云ふに考へて、三疋の絹三十貫文なりしにや。斗升法はかの後三條天皇の延久の沽價に由れるものなるべし。大藏太夫、紀助延は、米を人に貸して利をとり四萬石に增せり（卷廿八、第廿三）と云ひ、卷十六、第二十八の男が交易を以て、遂に九條の田居一町を得たる話など、當時の經濟的生活を伺ふに、いと興味ある物語なり。陸奥に

物價と經濟的生活

奥州の金實機織渡世と錢實

群盜と道路の妨害

行きて砂金を得たる話もあり。銀塊を碎きて物を買へる事も見えたれば、金賣など云ふ商賣も有りしならん。但しこの語は見えず。

機織渡世の女ありし樣は、卷十七、第二十六にも見ゆ。卽ち近江の伊賀郡の女、布一反を以て、津に魚を交換しに行く話あり。伊勢國に帛、絲、綿、米など百餘駄を積み行きて、水銀と交換して利を得し男もあり。其他瓜を荷車につみて、京に賣る男、鏡を賣る女、又京の飯婦（ひさめ）と云ふもありき。人買の俗はた行はれぬ。

既に幾度か述べしが如く當時諸道に群盜の出沒したる樣は頗る甚しくして、鈴鹿、大江山、奈良坂など、大なる騎馬團體にて白晝公然と行人、商客を脅したる話、二三に止まらず。或は質を取り、或は財貨を奪ひ、或は命を害へり。延慶元年、七月二十六日、鈴鹿、大江山、惡賊討伐につきて、六波羅の泰時、時房より申達狀來りし趣、新編追加（日本古代法典本、五七八頁）に見えたるが、さる頃の樣は、早く平安時代の中頃より打續きしものと見えたり。觀硯聖人が曾て助けし盜人の後年闘山にて聖人を迎へ取りて、山寨に伴ひ、湯に浴せ馳走したる上、文綾など贈り屆けしと云へる話にても、如何に彼等が大規模の生活を送れるかを見るに足らん。山賊と共に、海賊の、所在の水路に多くして、貿易、交通を脅したることも甚しかりき。そは已に

當時生業者の危險と艱苦

醫術と山寺の湯治

國民的文化生活の新開展

史譚の部に述べたれば茲には略すべし。

斯の如く當時の生業者は、外には風雨、自然の迫害を被りつゝ、內には山賊、海賊などの掠奪を被り乍ら、何等安全なる防備を有せずして、僅かに船と馬背とによりて、其貿易を營みしものなれば、其危險にして艱苦なりしこと、到底今日もて想像するに餘りあるべし。生業には醫術の事も多く見えたるが、孰れも漢方的の手法なり。酸き酒の濁りたるに、牽牛子を濃く摺入れて、空腹に呑めば下痢すと云ひ（卷廿八、第五）、三條朝成が身の太るを痩せんにはと問へるに、夏は水漬、冬は湯漬を食ふべしと云ひ（卷廿八、第廿二）、般若寺の覺緣、病にかゝり、始は風なと云ひて、湯治せし話（卷十九、第廿三）等是例なり。當時入浴の風習は、寺院よりして一般に擴められたるものゝ如く女子の山寺に湯治に行く話など屢〻出でたり。されば醫師、陰陽師、巫女なども所在に多く在りて繁昌し、又生業としては、樵の話もありて、木伐道など設けられたる山の事も見ゆ。杣なども當時、山中に多く住めりし部族なるべし。斯る庶民生活は、開化的人文の標準よりすれば、素より決して高き程度のものにはあらざれども、一般國民の文化的生活が、漸く在來の因襲を離れて、社會の表面に注意せらるゝに至り、遂に中央、京師に產出せる說話文學の主なる要素として、京人の興味をも引くに至りしは、時代の文化の形質、

一度茲に雜糅して、更に新たなる進展の途に上るをトするに足るものあるなり。

第七章　今昔物語集の價値

（綜合的內容）

第一節　集の表現せし史的時代

史的意義の二方面

平安後期と新時代の曙光

以上の叙述にて讀者は、一渉り種々の方面より研究の對象とせし今昔物語集を觀察し得たるべし。吾等は今や卷を掩うて、默思一番、徐ろに斯る作物に描かれたる時代の史的意義を尋ねて趣味深き幻影の國に逍遙すると共に、更に或は集が其時代の背景と交渉したる點に於て、或は集が特に獨自に有する價値を綜較して思念し翫味せざるべからず。これ文學研究に於ける最も主要の意義 Significance にして、又其滋味を追憶 an after-taste する所以なればなり。

平安時代の後期は、實に特色ある中世近世二大時期の過渡的準備時代にして、我が第五文化時代は、既にその新時代の曙光、社會の各方面に渉りて閃々たる烽火を點ずるの時なりき。政治、法制に於て、風俗、行事に於て、社會組織に於て、道德に於て、趣味に於て、宗教に於て、言語、文章に於て、國民的心理に於て、此等二時期の萬象は、實に偉大なる新奇の對照を我

集文學と國民文化革新のシムホニー

宗教音樂・文學の國民的新運動

武士道と國民的精神

時代的表現の意義と眞淵說

文明史上に劃出するものなりき。而して斯る新時代の新要素は、此の作の出づる當時に於ては、刻々世人の耳目を刺戟したりしものなるべく、從つて當代の、前を承けて、將に新たに後に發せんとする世相は、實に驚嘆すべき國民文化革新の潮音となりて、集文學の全幅に一大シンホニーを奏でつゝあるなり。乃ち宗教上には、貴族的なる天台、眞言の教義は、既に偶像的階級の偶像的宗教となり果ゝて、之に代りて興れる新宗教の潛勢力は、その固有の生面を提げて直ちに平等なる民人の生活に接觸しつゝ、漸く擡頭せんとす。之と共に所謂念佛往生教風の弘布は、音樂界に一大刺戟を伸べ來りて、國民的音樂時代を形成し、音樂は更に文學と結合して、其聲調韻律に新生面を與へて、文學音樂時代をも現出せんとす。斯の如くにして藝術と宗教とは或は合し或は離れて、各新しき進路を開拓し、その結果は、武士團の指導の下に、平民的國民的精神の覺醒となり、一切を擧げて新たなる轉回の機頭に向はしめんとす。院政時代の進歩的思想の使命は實に這の點に存するものと云ふべく、其時代思潮の鬱勃たる勢力は、集の說話に歷然具象せられ、一個、舊時代の新時代に移動せんとする文化の轉回的姿勢となりて、上述の各方面に於て尤も淸新活潑に感觸せられたり。眞淵が『今昔は時代の樣を見るにいと用あるものなり』と云ひ、能書事蹟にも、『今昔物語は時代の言葉、風俗器物等を考へて據とするには便あり』と云へる、蓋し斯く解し來つて、益〻その妥當なるを覺ゆるならん。

集の史的表現動ける平安時代、動ける新日本社會

今這の集の文學の展開したる全體の史的表現を冥想したりとせば、之を何とか形容せん。そは讀者に依りて種々の觀方あらんも、吾等は先づ其處に何とも云ひ知れず、動ける平安時代ありとすべし。動ける新日本の社會ありと認むべし。一千三十餘の說話の章段の多かりしが如く、說話に盛られたる時代の相も極めて多般なれども、そは皆靜止したるものに非ずして、悉く時代の波に從つて動搖し蠢きつゝ、合奏し、色獨樂を廻せるを見るなり。新時代の歷史的色彩は、其文學自身の歷史的色彩と共に、此點に最も鮮明なる特色を發揮して集の說話に表現せられたるなり。

文學動相の內的性質

(一)、特殊性

人生智と信仰的色彩

其交雜したる動相を、文學の內的性質の特殊性と普遍性とに於て見んか、(一)特殊性にありては、集の文學は必ずしも人間の情感を新たにするものに非ず、又奔放なる空想を翻し、若くは新奇なる性格を展示するものに非ず。主として普通の人間生活、社會生活に於ける人生智を語談し、怡樂し、奇翫せんとする所に其特別の藝術境地を求めんとするものなり。是れ說話文學たる集にありて、寧ろ當然の傾向と謂ふべきが、著者が努めて語り傳へを喜び、

傳聞を與じて、社會萬般の世態を網羅したるは、其人生智の上に、特に時代的趣味を感じたるに因るとせざるべからず。次には全說話の上に耀奕したる信仰的色彩にあり。或は信を說き敎を諭し佛を尊び經を讃じて、常に人間生活と宗敎歸信とを離るべからざる連鎖を以て結合せんとす。其結果は廣き人生智と、誠實なる信仰と混合したる、極めて親むべき放膽なる一個の俗世界、俗世間が集の表現したる人生として、讀者の眼前に描出せらるゝを見るならん。是れ集にのみ特有にして、他の文學乃至時代に決して見る能はざる現實味を具ふる所以なり。

集の表現したる俗世界の消息

更に、(二)普遍性に於て讀者の認むる所は何ぞ。一は交雜したる文學中の複雜性なり。例へば社會の生活に於ても都會あり、地方あり。趣味に於ても美あり、醜あり。詩語に於ても雅語あり、俗語あるが如く、集なる交響樂の要素は頗る雜重なるまゝに、其各が皆永遠普遍なる歷史的過程の一斷片たるを示せり。二には社會的階級性の多般なる現實相にあり。新時代の機運は、既に舊社會の一角を變形せしめんとしたれども、集文學の全般の世界は、猶種々の階級の保存せられつゝ、互に調和的關係に於て一聯の時代的過渡を示しつゝあるなり。

(二)、普遍性

寖雜性、社會的階級性、進步改變性

(三)には、其進步改變性に於て之を見るべし。交響樂の凡べての要素が、時代の特殊相を示しつゝ、而かも一面には永き時代の史的過程に向つて、進出し變改せんとするを語るものにあらざるはなし。集中付喪神譚にて古き器物に物精憑きて踊る事を語りたれども、此意味に於ては、實に全說話の描寫が時代の進化に迫られて踊り動けるを見るなり。

全說話世界の躍動

要するに、今昔物語集の文學的表現は、獨自にも、史的にも、當時の他の文學と趣を異にする迄に、頗る注意すべき多方面の意義を含めるものなりと謂ふべし。

第二節　結論

尨然たる今昔物語集の文學が、其形體組織に於て、所謂新社會の時代思潮と二重に密接の關係を有する事は、其價値の廣く且つ深きを想はしむべし。集の文學は素より說話の作物にして、純然たる脚色に成れる創作に非ず。故に美文學たる興味の稍乏しとせんも、文學の意義の甚だしく狹義に解せられざる以上、這種の作品の價値は、決して從來信ぜられたるが如き零細粗笨のものには非ず。人或は今昔物語の有する價値は、歷史的にして文學的に非ずと謂はんも、文學的にも幾多の興趣と價値とを含めること、先に想到したるが如し。今試みに、之を總括的に述べんに、

(一)、歴史的表現の意義

(一)　は云ふ迄もなく歴史的に特別なる表現の意味、所謂二重の時代的意義を有して、文學上に多大の内容と趣致とを加ふる點にあり。説話の中には外國譚あり、古代の傳説ありて、必ずしも著者の見聞想像に出でたるものゝみに非ざれども、之を全説話の上より見れば、悉く著者の心理と、時代の背景とに活ける交渉を有するものゝみ。一も無意味の羅列、無機的の堆積に非ず。片々たる話譚に、皆國民的説話たるの特色の十分に存するを認むべし。此意味に於て、集の多數の説話は、著者と時代との直接の産物にして、マッカロック氏の所謂『生命の水』Water of life の潤澤に流れたるを認めざるべからず。生命の水の説話の中に豐かなるは、即ち時代と國民的生活とが、力强く表現せられたる所以にして、集の史的意味が文學として價値ある道理なり。

(二)、豐富なる内容

(二)　は集の文學が、其成立の要素に於て、驚くべき豐富なる内容を含める事にして、既に叙説したれば説明の要なかるべし。

(三)、文學形體の多面性

(三)　は之に因りて其文學形體の極めて多面的性質を有せる點にあり。文學形體の多面的なるは、發達したる文學に於て、必ずしも其價値ある特長とすべからざれども、文學の史的なる性質よりして、多方面の文學形式を有するは、亦一種の價値なるべし。集の文學形體としては、言ふ迄もなく、(イ)傳説文學たるべし。(ロ)宗教文學殊に佛教文學たるべし。此二者に於て我邦文學中屈指の物たるは勿論、殆んど其種世界文學中の白眉たるものならん。次に(ハ)教訓文學、殊に教訓説教の間に、平淡、快活なる叙事文を交へたる一種の教化文學たるべし。更に尤も注意すべきは、斯の如き諸性質を含める集の説話の主なる文學的通性としては、其人生を廣義に教化せんとする(ニ)通俗文學たる點にありとすべし。殊に前述の史的意味に於て、歴史物語としての通俗文學たる生面を最も主要とすべし。通俗文學は或種の美文學の如く、其趣味優雅精妙ならずと雖も、新たに社會の階級を撤し、國民的の趣味を盛り、新語彙、新形體を以て、一般庶民の文學を創始したる所に、甚大の光輝と價値とを賦與せらるべし。當時の文學所謂歌物語、繪物語等の平假名草紙と、大鏡、今昔等の歴史物語との差別點の一は、前者の婦女童幼を主なる讀者の對象とせしに反して、後者の一般の大人を讀者として、其理解と批判とを要求したる點にあり。此點に於て、通俗文學たる今昔物語集は、亦第五文化時代に創始せられたる大人の新文學たりしものなり。

傳説文學
佛教文學

通俗文學
歴史物語

大人文學

(四)、心理的多景發動

(四)　は集の文學的内容を心理的に觀察するに、右の如き文學の性質上、著者自身の思想と文學中の性格的思想とは、多くは相近きものなれども、併し兎に角、集の全説話を一貫して描

寫せられたる心理は、或は宗教的に、或は道德的に、或は情操的に、或は社會的に、量的に大なる發動をなせしと共に、其間に種々の注意すべき意義を示したるもの少からず。比較的技巧に乏しき通俗文學又は教訓小說なりとて、强ちに文學上の心理活動をも空零視すべからず。只說話文學の常性として、作中主人公の性格的思想の一貫したる活動、波瀾の如きは望むべからざれども、之に對しては、民衆多數の心理生活と、又集中無數の小品的描寫中に種々の性格、心理あるを翫味するを得ん。

(五、其表現法と形式)

(五) 更に文學の表現法と、其形式とに於ても、美文學に比して一概に貧弱枯淡なりと謂ふべからず。其中には、却りて特色ある描寫と文藻と語彙とを含めること、先に詳述したる所にて明かならん。殊に力强き鮮明なる表現を有する文學としては、平安時代の物語を通じて寧ろ出色の筆致とすべきもの乏しからず。其文體は佛教文學に出でし後の國文の一大模範たりしと共に、文學史上頗る注意を惹くに足れり。

(六、後世文學上の影響)

(六) 是の如き文學上の諸特長は、單に集以前の歷史的關係に於て見るのみならず、集の大作品たる勢力の後世文學に及せる影響より見るも亦決して少しとせず。是亦集の價値の一とすべきなり。見よ、近世期に入りて發生したる凡百の文學現象は、其十中の八九は皆集の含

雜纂文學
傳說文學
謠曲、怪譚、笑話
小說、讀本
隨筆文學
和漢混淆文

結語と譬喩

める文學的傾向に因由せざるはなきに非ずや。(イ)集の戰爭譚、武人譚の記載は後の軍記物語に入り、(ロ)集の說話雜談は後の宇治拾遺、古今著聞集等の雜纂文學となり、(ハ)集の傳說巷談は後の傳說文學を呼起し、(ニ)集の幽怪奇譚は後の謠曲、怪談、笑話中に攝取され、(ホ)集の小品的脚色は後の小說、讀本の典據となり、(ヘ)集の隨想、批評の筆致は後の徒然草等の隨筆文學に入り、之に加ふるに、(ト)其文體形式は當時の平假名文と相竝んで、後の和漢混淆文の一大淵源となれるなど、其主なるものなり。一の文學作品にして斯の如き多方面の影響を寄與したるものは、文學史上にも其類ひ稀なるべし。これ又集の價値の重要なる一點にして、卽がて次篇の系統的研究を要する所以なり。之を要するに今昔物語集の價値は、文學的にも、歷史的にも相應に著るしきものにして、我が文學史上、意義多く興趣深き作品の一なりと謂ふに憚らざるなり。源氏物語の光彩陸離たるを黃金の裝飾に比すれば、我が今昔物語集の文學は、それ、鋼鐵の如く重く且つ白く輝けるものと言ふべきか。

第三編　系統批評

第一章　國文學中の四大系統

第一節　系統批評の意義

系統批評の意義

系統批評 Die genealogische Kritik は內部批評、外部批評が單に文學作品其物の本質と成立とを究めたるに反して、其文學上の系譜的關係を研究するものにして、外部批評と稍共通の點無きに非れども、之を取扱ふ意味と態度とは全然別箇のものとして峻別せらるべし。

系統批評の方法

外部批評より發し、內部批評に入りて精査せられたる特殊の文學は、系統批評に於て、其國文學中に於ける相關的系線的位置を與へられ、茲に初めて、そが上に施さるべき全般の研究を完成するを得べし。

抑も文學上の作品に對する系統研究の意義は、一個の思想、一個の勢力、一個の主義、もしくは一個の技術、卽ち或は一個特殊の內容に、或は一個特殊の形式に、或は一個特殊の兩者

系統批評の立脚地とヒルンの所説

の關係に、或は一個特殊の兩者の表出法に關して、該作品の關係的位置と價値とを認識し、併せて其等の思想、勢力、主義、技術等が該作品に卽して、如何に變遷し發達したるかを歷史的に考察し、以て其脈絡的發達が他の全般の文學に對して如何なる交互作用をなしたるかを諒知せんするにあり。素より文學は具體的想像を主とする純粹產物にして、常に人生に密着したる眞實性を要すれども、所謂狹義の主張（利害目的を有する）にはあらず。換言すれば、創造の心理を貴ぶこと最も大にして、單なる模倣にあらず。又主義思想の直接の表現を、其主なる內容とするものにも非ず。故に文學の作品の研究は、一見單一なる夫自身の美學的研究を以て滿足すべきが如く、ヒルンの說にも『一切の藝術は自完的なり、其自身に於て自己の目的と歸着點とを有す』(Hirn: The origin of Art. 1900) と謂ひたれども、系統研究の立脚地は自ら別に在るあり。假に文學作品の描出上には、直接作者の意識的に、或る思想、勢力、主義、技術等の影響を表現すべからずとするも、文學作品が必然的に、常に、時代思潮、勢力ある文化、宗敎、風習等の廣義の影響を反映すべきものなる以上は、任意の文學を、その有り得べき見地より、一個の發達的系統中に觀察するは、全文學の研究上、必要にして又毫も不合理ならざる方法なるべし。況んや文學者に團體あり、主義、傾向の黨派あること、古今東西其事

ベリツシエーの藝術分派の說と系統批評の任務

國文學中の四系統

例に乏しからざるに於てをや。ジョージ、ベリツシエーは、『近代文學運動』（一九〇八年）に藝術分派の理を述べて曰く『一派は常に組織的なり。そは藝術の領域を制限するより成立つべし。然らば一派が其製作を成し終れる時は、又次の一新派が舊式に反對して、新たに必然に置換へられ、或はそを等閑に附せし部分とせし時なり』と言へり。斯の如き文學藝術の進程中に於て、其一派、一主義、一群を系統的に研究せんとするは、正當なる見方ならん。されば玆に所謂系統研究とは、單に狹義の出典もしくは影響に就いて云ふにあらず、深く其の文學の性質を考へ、詳かに個々作品の出現を探りて、除ろに其の發展の經路を尋ね、以て國文學の本質と其史的眞相を究めんとする意に外ならず。澎湃たる時代の潮と文學界の大勢とは絕えず特殊の作品に影響するに對して、作品の偉大なる刺戟力も亦ある形體と色彩とを以て、常に時代と文學を支配し陶化するものなるは、何人も否み能はざる事實ならん。

今讀者一度び如上の立場に於て、我日本文學の領域を、縱斷的に觀察し來らば、恐らくは上古より江戸時代に至る國文學中には、凡そ四流の根本的なる系統 pedigree ありて、各特色ある固定的要素を以て一貫し且發達したりしを見るならん。四流の系統とは何ぞや、所謂固有文學系統、神道文學系統、漢文學系統、佛敎文學系統卽ち是なり。若し此等の名目の

近世文學の二主流

煩瑣にして適切ならざるを憂へば、或は前二者を總括して固有思想主想の文學となし後二者を集合して外來文化攝取の文學と爲すも可なり。實際我邦近世の文學にては、廣義の人生卽社會生活及び戀愛生活を主題としたるもの、最も重要なる系統をなし、其要素は國民の心理及び生活の複雜となれるに伴ひて、極めて錯雜し來れり。乃ち一部分は歌物語、繪物語に出で、又說話系、佛敎文學系等にも相涉りて、廣き分野を劃したるが故に、之を第五系統第六系統として立し得べきも、そは近世の國民的生活中に發達したるものなれば、茲には暫く固有文學、佛敎文學等の系統中に包轄せしめ置かん。乃ち左に今少しく上述の四流について說明を加へん。

第二節　固有思想を主としたる國文學

第一　固有文學系統

固有文學系統とは、比較的我國民に固有したりと見ゆる思想、性情、趣味を中心として、或は特殊の文學的形式を成し、或は特殊の文學的胚種を含みて成れるものにして、例せば記紀の含有したる文學的傾向の如きもの是なり。故にこの系統に屬するものには、大體に於て

固有文學系統の性質

その二小系、歌及び歌物語系と說話文學系

其作品と近世期の分化

歌謠的のものと、說話的のものとあり。前者は我民族に固有して親炙したる、五七調を基礎としたる和歌を中心とし、後者は、庶民の相集りて、快活に談語し傳聞するを好む性情に基ける口碑傳說を骨子としたるものなり。卽ち所謂歌及び歌物語系と說話文學系とは、固有文學系統の二分派にして、奈良、平安時代に入りては、記紀の文學より分流したるもの、前者は萬葉集、伊勢物語、古今集、土佐日記、源氏物語、狹衣物語、大和物語等を產み、後者は竹取物語、宇津穗物語、落窪物語、住吉物語、濱松中納言物語、宇治大納言物語等を數ふるに至れり。此系統中よりは近世に至りて、漸次社會生活の文學系統（第五系統）及び戀愛生活の文學系統（第六系統）を派生せしめ、室町時代殊に江戸時代に入りては、幾多の方向に發達するを見たり。

第二　神道文學系統

茲に所謂神道系統の文學とは、固有の思想中、特に國體思想及び敬神に伴ふ信仰、風俗、形式を中心として發達したるものにして、記紀の一部分、祝詞、宣命、古語拾遺等の中に存する文學的傾向に由來し、殊に奈良、平安時代の交に入りては、佛敎と交涉して、所謂兩部神道、山王一實神道等の隆昌を見たれば、這種の文學的色調は著しく其內容を豐富にしたり。近世に入りても、神道五部書を始め、北畠親房、吉田兼倶等の神道、垂加流、新神道などを中

神道文學系統の性質

其系統と他系文學との關係

軸としたる一種の文學及び文學的運動の一貫するを認むるを得べし。故にこの系統の文學に於ては、一面、固有文學系統との交渉甚だ密接したると共に、一面、下に掲ぐる梵漢二文學の系統とも接觸出入して、或は歌物語に、或は歴史文學に、或は民間文學に、幾多の作品と勢力とを示すを見るに至れり。それ大別すれば固有神道系、兩部神道系、及び一般神道物系の三系となすを得べし。

神道文學の三小系

第三節　外來思想を攝取したる國文學

漢文學系統の性質

第三　漢文學系統

漢文學系統は、詳かには漢字及び漢文學に影響せられたる國文學の系統にして、其由來は極めて古く且深し。先づ國字の發達が、漢字に負ふことの大なりしより始めて、一面儒教及び道教として倫理、哲學上の思想を通じて我民性と文學とに大なる影響を與へ、一面制度文物に於て奈良時代以降我上下の社會に廣き勢力を及ぼし、殊に其唐宋文學は、直接我文學界を刺戟したること淺少にあらざりき。宋以後に於ても、元と云ひ、明と云ひ、清と云ひ、其時々の文學が我國文學の形質と文學界一般とに、間接直接の交渉を有せし事は叙說する迄もなし。されば直接漢、唐、宋等の作家の手になれる外國文獻は素より、我國人の手になれるものにても、古くは日本書紀、懷風藻、經國集、菅家文草、本朝文粹等、近世に入りては、明月記、東鑑、往來文學、五山詩文集、江戸時代の大日本史、日本外史、諸家の詩文集等の如き、直接漢詩文の書、もしくは詩文學に關係せる作品を外にするも、漢字及び漢文學が國語と國文學上とに寄與したる影響は甚多く、殆んど根本的なる各種の作用を生起したれば、この系統上に於て觀察すべき國文學上の現象は、最も廣汎なりと云ふべし。されば極めて大體上にても散文系、詩賦系、及び一般化系など、其程度と種類とに數多の小系あるを知るべし。是等の文學が、其性質に於て、著しく佛教文學系統に接着したるもの、多かりしは、既に漢唐文學以來の傾向にして、我平安時代に入りては、その風一層甚だしかりき。かの和漢朗詠集、新撰朗詠集の如きは此系統の文學にして、第一系統なる和歌の趣味を混じたるものなれども、之と共に佛教文學の聲調亦著るしきが如きは卽ちその一例ならん。

直接影響の作品と間接の影響

漢文學系統の三小系

佛教文學系統との關係

第四　佛教文學系統

佛教文學系統の性質と其の發達

佛教文學系統は、佛教傳來以來佛教の信仰及び布教に伴ひ、多くは經文文學の典故に則りて、國文學と結合したる一團の文學的勢力にして、其程度は漢文學系統に於けると同じく、

佛教的要素と佛教的文學との區別

極めて遞次的に數個の分系を有し、最後に瀰然として國文學の全野に弘散したるものなり。此最後の狀態に在りては、佛教の信仰が殆んど國民的なりしに伴れて極めて、密着したる程度に於て普遍的に國文學中に熔融したれば、殆んど其系統を劃すべからざるが如き觀あり。故に佛教文學系は之を國文學上に於ける佛教的要素と佛教的文學と云ふ意に區別して解するを至當とすべし。所謂佛教的文學系統の研究に於ては、直接漢譯佛典若しくは我國人の手になれる純粹の佛典的著述の除外せらるゝは、恰も漢文學系統の國文學研究に當り、直接漢文的の作品を除外したると同じきは論なけれども、此等の佛典に次いで、直ちに之と密着し、多くは國文もて著せる宗教的文學の一流あるを認むべし。この種の物は、其目的は全く教義を說き、實用を主としたるものにして、未だ文學の領域に進入せざるものなれども、其宗派の特質に依りて、國文學上注意すべき要素を含めること多きと、其文藻の見るべきもの多き點とよりして、所謂佛教文學系統中の第一系と認むべし。弘法の三教指歸(漢文)遍性發揮性靈集(漢文)源信の往生要集(漢文)親鸞の教行信證、正信偈、歎異鈔、日蓮の立正安國論、開目抄、向阿の假名三部抄、蓮如の御文章の如きもの是なり。第二系は、佛教的意義稀薄となり、或は傳記、說話として、或は緣起、物語として、多少一般の興味を目的としたるものなり。卽ち前

直接佛典的作品と間接影響の作品

佛教文學系統の第一系

同上第二系

同上第三系

同上第四系

近世文學に於ける影響

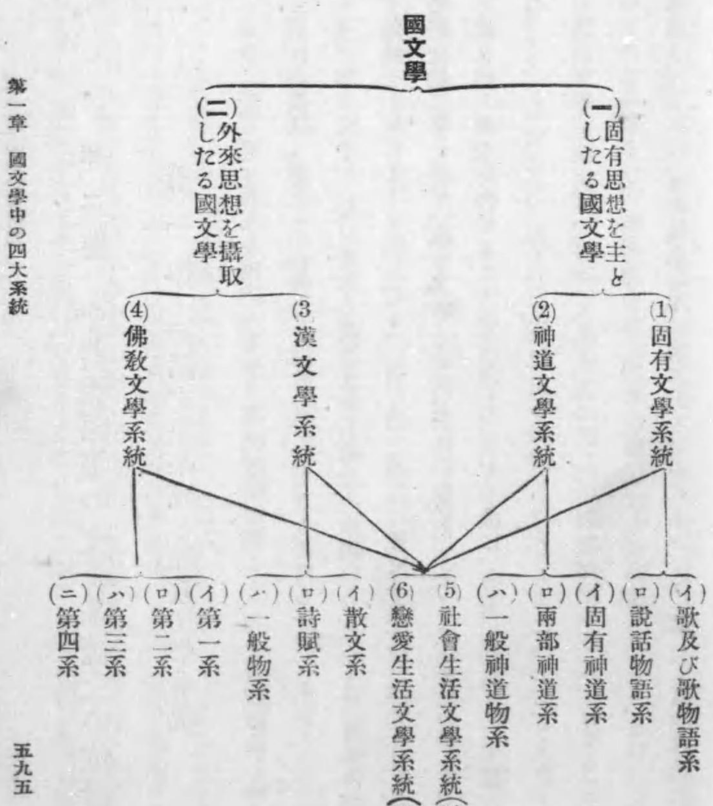
國民文學の複雜なる要素と系統

述第一系文學が、漸次一般の國民文學に接近し來れるを意味するものなり。例へば三寶繪詞、私聚百因緣集、三國傳記、拾遺古德傳の如きものを以て、此程度に於ける佛教文學系の作品なりとや云ふべき。源信の往生要集の如きは、其文學史上に於ける實際の影響より見て、又この系に入るゝも可なるべし。(次章二、三、四節參照)然るに佛教的文學系統の第三系に至りては、既に發達したる文學上の技巧を有し、その教說や、修辭や、素より佛教趣味になれるも、第二系の如く露骨にあらず、且多くは一種の音樂的要素と結合したるものなり。平家物語、謠曲、今樣の如き卽ち是なり。更に第四系としては、先にも述べしが如く一種の佛教的要素として、普ねく文學上の廣き領域に瀰漫したるものを擧げざるべからず。殊に近世期の後半に至るや、這種の佛教文學系より更に分化して、社會生活文學系統、若くは戀愛生活の文學系統を發達せしめたること少なからざれば、所謂佛教的要素は、近代の人生と密接したる文學中に於て、極めて深刻微妙なる融合を示すに至れり。

以上の四系統は、一個全體なる國民文學と稱すべきもの、中に於て、或は系線的に或は色彩的に極めて複雜錯綜して發達したるものなれば、其分劃は必ずしも明瞭なるに非ず。就中佛教文學系統に屬する第二、第三系等は、漢文學系及び說話文學系と錯交する場合甚だ多

く、或は又歌物語系と交渉したるものも少なからず。」故に是等の四系統の混和狀態を、一時期に就いて精密なる横斷面的圖式を以て示すことは作物それ自身を以てする外頗る困難なれども、國文學の歷史的發展を、系統的に觀察するに當りて、如上の四系統を歸納し且演繹せんとする試みは、其基礎的文化の素因の孰れも强大なりしに應じて、最も自然にして且便宜なる方法なりと云はざるべからず。」勿論文學研究上に於ては或る特種の目的よりして更に、一層細密に、一層文學的なる標準を立て、その系統關係を考察すること、往々必要なれども、一般に江戸時代迄の文學を、系統的に考ふるに當りては、先は大體上述の四系統若くは六系統によりて觀察するを最も可とすべし。されば今は暫く國文學中に於ける四大系統の概念の下に集に關する所要の問題を考察せん。乃ち上代より江戸時代に至る上記の諸系統を表示すれば左の如くなるべし。

上代より江戸時代に至る國文學の系統表



第二章　今昔物語集の文學系統上の位置

第一節　說話文學系統と佛教文學系統

今昔物語集の文學系統の探究

前章に於て導き來れる四流の文學の系統的觀察點より、我今昔物語集を味はんには、果して何れの系統に屬して、如何なる位置を占む可きものなるか。

先づ集の文學が、第二系なる神道文學系統上の作物にあらざるは、前編內部批評の各章にて論述せし所によりて明かなり。次に第三系なる漢文學系統に就いて見るに、是も前編一般研究第二章に於て、或は文章上より、或は語彙、用字上より、或は文藻上より、少なからざる漢文學の要素を含めることを論證したりしが故に、本系の作品として見られざるにあらねども、そは尙ほ未だ著るしき系統上の勢力を有するものにはあらざりき。更に第一系なる固有文學系統を以て見るに、或程度に於て、所謂歌物語の性質を有することは、前編各部研究の第一章及び一般研究の第三章等に縷述せしが如くなれども、これはた全般の文學的傾向より見れば、甚だ微弱なりと謂はざるべからず。之に反して其の說話系文學の性質に

說話文學系としての今昔物語集

佛教文學系統としての今昔物語集

說話的佛教文學の作品

至りては、先に第一編第二章及び第二編一般研究第三章にて述べたるが如く、非常に重大なる要素を成すものにして、そは集の文學の形體上より見るも何人も首肯する所ならん。故に今昔物語集の文學上に於ける系統的位置は、素より固有文學の系統內に限られたるものにはあらざれども、之を廣義の說話文學系に屬するものなりと斷言するも、毫も誣言にあらざるべし。更に第四系なる佛教文學系統の概念を以て見るに、同じく第一編第二章及び第二編一般研究第一章、第四章等の研究によりて、集の文學の系統的性質は、甚だしく第四系なる第二小系作品中に屬すべきものなること明かなれば、今昔物語集の文學は、又佛教文學系統中の產出なりと斷定するを得可し。是に依りて見れば、集の文學系統上の屬性は、二個の著しき傾向を併有したるものにして、其一面は說話文學として、他の一面は佛教文學として認むべき十分の資質を有するものと云ふべきなり。

この二系統の性質は、其孰れが主なる文學の本相なりやと云ふに、先に著作の動機（第一編、第二章參照）に論じたる主意によりて、後者即ち佛教文學系統の要素を中心的のものと認めざるを得ず。乃ち今昔物語集は一個の說話的佛教文學の作品なりと謂ふべき物なり。斯の如き二面の文學的性質が一の作品中に俱存する樣は、宛も我が古事記が、說話文學要素と、歌及

び歌物語文學要素とを俱有せる狀に似たるものにして、文學史上上代の二系の文學を承け、後代の二系の文學を發きたる一大貯水池の如き作用を營める點も二者、亦酷だしく相似たるなり。之を以て集中に含まれたる二系統の要素は、其由來と其傳統とに於て共に重大なる系譜關係を有するものにして、この二要素に就きて夫々その系譜上の關係を明かにするは、卽ち集の文學系統上の位置を闡明にする所以に外ならざるなり。但し系統批評に於ける系譜關係とは一作品中に於ける出典の問題とは自ら別箇なり。出典の關係は意識的にして多くは部分的なれども、文學上の所謂系統關係に至りては、意識的なることもあれば無意識的なることもあり。只その文學上の形質に至つては必ず或程度迄、全體として近接したる要素を通有するを其特徵とするものなるべし。

文學の系譜關係と出典關係との別

第二節　その上來系統

第一　說話文學系統

前にも云へるが如く、說話文學の胚種は國民の話譚を好愛して、口々傳誦したりし風習の中に釀育せられたるものなれば、斯くの如き話譚の總轄的に、また組織的に記載せられし和銅五年(一七二)の古事記は、其最も有力なる淵源たらざるを得ず。古事記の記法に先づ出自、名目、年時を揭げ、『於レ是』『故ニ』など記して事を述べたる所、一種の說話文學の形式あるを見ん。其翌年、諸國父老の口碑を錄して上らしめし風土記中にも、亦かゝる文學的系統の大なる先蹤あるを認む。此時の事續紀に、『五月甲子畿內七道諸國郡鄕名著二好字一、(中略)具錄二及土地沃瘠山川原野名號所レ由、又古老相傳舊聞異事載二千史籍一言上、』とあり。所謂名號所由と云ひ、舊聞異事と云へるは、卽ち傳說說話に屬するもの多きなり。されば常陸風土記なる、國司の解に、申二古老相傳舊聞事一、問二國郡舊事一、古老答曰、風俗諺曰、俗歌曰、など列記し、天平五年(一三九三)の出雲風土記には、稍報告的記述めけども、俗人曰、と云ひて、鄕郡寺社の緣起譚の原形、民間語原說等を載せたるを見るべく、殊に播磨風土記に至りては、其說話的要素更に大に加はれり。風土記は尙天平の頃にも後年なる醍醐帝の延長三年(八五五)にも上らしめしと云へれば、山水風土に關し、諸國俗間の話譚を輯集する風は頗る由る所あるなり。集の採錄も此意味に於ては延長の風土記に繼いで、平安京の後期に編まれたる一種の風土記なりと云ふも不可なかるべし。

古事記と風土記

風土記としての集

日本紀の形式

次いで和銅七年より元正帝の養老三年(八一三)に涉りて成れる勅撰の日本紀も、續日本紀に

浦島子傳、萬葉集中の傳說

竹取物語

比すれば叙事體と說話味と未だ全く分離せず。殊に一書日には諸家の傳說と民間語原說とを載せて、出自、系統を冒頭にしたるなど、大に說話文學たる要素を含めり。奈良時代に入りては平假名片假名の發達未だしきを以て、多くは漢文にて記され、說話味は佛敎味と相混和して、一種の傳記、緣起譚をなせるもの多かりしが、其種のものゝ世に行はれたる樣は、想見し難きにあらず。藤原仲麻呂の大職冠傳(一四一〇頃)伊豫部馬養の浦島子傳の如きもの是れなり。萬葉集は素より奈良時代に至る歌謠の集なれども、其卷十六なる有由緣歌及び諸歌の序詞、後詞中には、當時の說話の輯錄せられたるもの少なからず。是等は其形の漢文ながら後の所謂歌物語の原型なるに近きものなれども、說話の記錄を說話として見れば、一個說話文學系の產物として認められざるにあらず。

平安時代に入りては前期の中頃に平假名の竹取物語出でゝ、所謂物語の祖と呼ばれたるは、說話文學の完成を示すものなれども、完成のこの程度に到らざる同系の作品亦少なからず。先づ延曆弘仁の交に出でたる日本靈異記は、佛敎文學系統に屬せしむるとするも、嵯峨帝の親撰になれる田村麻呂傳記(一四八〇頃)、空海作と稱する玉造小町壯衰記あり。壯衰記の空海作に非るは、時代の小町以前なるにて明かなれども、其文飾の紀長谷雄作なる貧女吟と酷

平安初期の諸作

平假名物語の系統

唐物語と昔物語

似したるを見れば、少くとも延喜頃には早く行はれたるべし。(東鑑に文治の頃、小野小町一期盛衰事繪卷ありし事見えたり。)大同三年(一四六八)には忌部廣成の古語拾遺に古史譚を記し、更に都良香の富士山記(一五三二頃)、記長谷雄の白箸翁傳記、大江匡房の狐媚記、熱田神宮に成りし緣起(一五〇五)、坂上家高明の續浦島子傳(承平二、一五九二)等ありて、後期に出でたる大江匡房の遊女記、傀儡記等に連れり。別に平假名說話文學系統としては、先の竹取物語に次げる宇津穗、住吉、落窪、濱松及び大和物語の下卷等あり。又世俗譚の趣味なる一面より見れば枕草紙すら稍この系統に入るゝを得べし。唐物語は大和物語に對して命名せられたるものなるべく、素より歌物語系及び漢文學系統の作品なれども、一方に於て又說話文學系統の作たる事も明かなり。每說話の冒頭に、必ず昔何々と云へる所などは伊勢物語に似て正に昔物語とも呼ばるべきが如し。此作の出でたるは、何年にありしか、今明ならず。濱松に引ける唐國物語とは自ら別なるべし。もし漢故事和歌集の序列果して新古の順に由りしものとすれば、永久百首歌に先立てりと云ふを以て、正に今昔物語集の前頃(一七六八頃)のものにして、物語の話性も大治の頃の無名抄と一致したる點あり。けりの用法多きも今昔と似たり。然れども、一般に語法的の誤多く、侍り、すだくの誤用も、見え、時法の不整も著るし、その歌も三句切のもの及び對句的の文飾のもの多

宇治大納言物語と歴史物語

漢文片假名交物語としての集

日記、記錄、辭書の流行と說話文學

きなどより見れば或は更に百餘年を下りて鎌倉時代の承元の頃(一八六七頃)蒙求和歌などに先ちて出でしにや。建久の和歌色葉集、文永の風葉集孰れも此名を載せず。これ等の平假名說話系文學は、先に第一編のテキスト研究に於て推想せしが如くんば、隆國の宇治大納言物語(一七三五頃)に至りて、又稍古朴に還り、次で出でたる榮華物語(一七五三頃)大鏡(一七五八頃)等の歷史物語に其述作上の動機を刺激せられ、平假名より宣命に類する漢字交りの片假名文に移りて、遂に所謂語尾雙記體なる今昔物語集(一七七〇頃)は出でたるなり。集の說話文學としての創作が、出典論に云へるが如き支那印度の說話文學に直接のを採れるは云ふ迄もなきことなれども、以上の如き國文學中に於ける一脈の系統的發達の、該作品の需要と出現とに、直接間接の素地を成せるは何人も疑ふ能はざる所なるべし。尙右の文學的系統の一側面に於て、之と相竝んで類聚國史、和名類聚鈔、西宮記、北山鈔、左經記、中右記、大禪記、臺記、愚昧記、伊呂波字類鈔、江次第、達幸故實鈔など、當時續々、日記、記錄、辭書類の編輯の行はれし事も、說話系統文學の發展に與りて力ありしものならん。

第二　佛敎文學系統

奈良時代の緣起傳記文學

觀音緣記、白山緣記、過去現在因果經繪卷等

翻りて今昔物語集の、代表的文學要素たる佛敎文學系統の由來は如何にと云ふに、この系統は其發達の狀一層明確に追跡せらるゝを覺ゆるなり。先づ奈良時代に行はれたる多數の緣起傳記文學は其の濫觴と認むべきものにして、出典論に列記したるが如き、漢譯佛典又は漢土の佛敎文學が、外部的に我佛敎系文學の、直接の鼓吹者たりしが如く、是等の緣記、傳記類は、內にありて、我國民文學中に於ける佛敎文學的性質の發展に、大なる影響を與へたるものなりき。天平五年(一七三三)の德道、道明等が觀音緣記竝に雜記(三寶繪詞に依る)及び天平十年(一七三八九)の行基の隆池寺緣記を始めとして泰澄の加賀國白山緣記、孝謙帝の東大寺願文、神護景雲三年(一七六九)修榮の波羅門僧正碑文、寶龜十年(一七七九)淡海三船の鑑眞東征傳、大安寺碑文及び天平の作と云はるゝ過去現在因果經繪卷、寶龜二年の書と呼ばるゝ四天王寺太子傳(?)の如きは、集の著者の直接を目擊したる事實の有無に關せず、我が佛敎系統文學の歷史的發達に於て其の第一乃至第二小系の作品たるや明かなり。此間、相慶の傳へたる上宮聖德法王帝說は藤原京の初頃(一七三五頃)に成り、又天平十二年には智光曼陀羅(佚)、天平寶字七年には當麻曼陀羅、寶龜中には淸海の曼陀羅等作られたれば、佛說佛土に關する傳說も盛に行はれたるべく、其頃の石上宅嗣の圖書館なる芸亭(阿闍寺)には尙今日傳はらざる多數の著作を藏

靈異記の文學と今昔物語集

せしならん。

平安時代に入りては、劈頭延暦弘仁の交(一四七〇頃)藥師寺僧景戒の日本國現報善惡靈異記(漢文)あり。上中下三卷、合緣百十二條の說話を收めたり。主として奈良時代に行はれたる民間說話を例證として、以て佛法現報の恐るべきを知らしめんとしたるものなり。されば佛敎文學として、民間信仰の說話に材をとりたること、今昔物語集に最も近きものにして、疑もなく第二小系の作物なりとす」集の說話の奈良時代の話譚が多くは直接この書によれるも故なきにあらず」元興寺の護命(一四九〇頃)の法苑記(二卷)法苑林章記(三卷)は、大乘法苑義林章に出でたるものなりや、はた法苑珠林などに似よりたるものなりや、詳ならざれども、最澄の願文、四弘誓、藥師講式、六天講式、淨土記、空海の三敎指歸(三卷)遍照發揮性靈集(十卷)多數の表白願文、灌頂文、慈覺大師圓仁(一五〇頃)の談義集(三卷)の如きは、大方第一小系中の文學としても認め得べし。日本大藏經に收めたる最澄の三寶住持集(三卷殘缺)と圓仁の三寶輔行記は事書體の傳記の樣第二系中のものなれども其作に疑ありて孰れも採り難し。後者には新古今に入れる實定卿の那古の海の歌など引けり。又元興寺智光の安養賦(一卷)聖護の日本靈感錄(二卷)小野仲廣の日本國名僧傳(三寶繪詞によるか)道賢の冥途記(扶桑略記)慈惠大師良源の藥師講式、諷誦文、金剛界念

藥師講式、三敎指揮、性靈集等

日本靈感錄、觀音讃等

長谷寺緣起、圓融院受戒記等

誦賦、九品往生義(一六〇頃)、園城寺の千觀の十二緣私記(一卷)良源の觀音讃等も、此の間に發達したる第一第二小系の佛敎的文學なり。又緣記の類には、寬平二年(一五〇)の長谷寺緣起(漢文)、寬和二年(一六四)の大上法皇受戒記(片假名小書體)、治安二年(一六二)の法成寺金堂供養記(漢文)、大江匡房の石清水不斷念佛緣記(一七三〇漢文)、大江佐國の加茂社櫻會緣記(一七四五漢文)、鳥羽覺猷の勝光明院願文(一七九六)等あり。嘉保中(一七五五頃漢文)の觀世音寺資財帳と保延(一八〇一漢文)に敦光の著はせる中禪寺私記、二荒三月會緣起等とは、正に集の出でたる前後のものなり。作者不詳の文珠靈驗集、高野山心覺(一八四〇頃)の地藏(一卷)等も見えたり。圓融院御受戒記の如きは就中尤も佛敎的諧調に富みし特色あり。供養記には藤原廣業作の表白願文を見るべし。殊に永觀二年(一六四)には、惠心僧都源信の往生要集(漢文三卷)、源爲憲の三寶繪詞(片假名交三卷)年を同うして出づるあり。佛敎文學系統(第二小系)の色彩、漸く鮮明となり來りぬ。往生要集は、平安時代に於ける佛敎文學を集めて大成したるが如きものにして、その記述と聲調とは、直後に出でたる源氏物語以下の諸作に深大の影響を及ぼし、文學社會と繪畫界との佛敎的智識を涵養したりしこと幾何と云ふを知らず。

源信の往生要集

源信の直談鈔によれば先師良源の觀音讃(一六三〇頃)保胤の日本極樂往生記、十六相讃(一六四〇頃)爲憲の法華經之賦(一六四〇頃)等に則り、又唐の迦才の淨土論、道綽の安樂集に因りて著はした

るものにして、所謂厭離穢土門以下十門に分ち說き、其中或は地獄の諸相を詳述し、或は釋迦佛の三十二相八十種好、阿彌陀佛の四十二相の形容を密叙し、或は有生有滅、有樂有苦、盛者必衰、會者定離、身風前燈などの事理を說き更に廬山の白蓮花より淨土敎の發達したる事を叙したる後に迦才のあげたる往生要經、十二經、七論に代ふるに、顯密諸敎中專ら極樂を勸むるもの十餘種を擧げ示し、或は大論の組織により十地十念十信等を叙して法華と淨土往生との調和を說明し、結局九品九生の往生を勸說したるなど難敎の門を破して、易信の門を立するに敎訓念勸至らざる所なし。天台の敎風深く染りて淨土念佛の大思潮に衝動せられたる當時の人々の間に喧傳せられしもの故なきにあらず。

爲憲の三寶繪詞

三寶繪に到りては大鏡にも記されて、爲憲が尊子內親王に上らんが爲めに、自ら佛法因緣の事實を記し、別に畫工をして繪圖を添へしめしもの、叡岳要記(上卷)にも四菩薩像につきて、源爲憲三寶繪草案中在之などゝ見えたり。扶桑略記にも爲憲記として屢引用せられぬ。其本文は、上卷佛寶編は佛の行事譚にして未だ集の如く分章明かならず、繪圖の詞書の發達したる體のものなり。昔何々と云へるもあり。中卷は主として靈異記などに採り先づ其事趣を記して次に十八人の事蹟を注したり。靈異記に出でしもの十一條餘あり。但し建保の靈異記寫本に三寶繪下帖に在りと云へるは別本なるにや。下卷は所謂僧寶十二ヶ月の行事を錄し諸齋會の由來式事を說く事極めて詳なり。此書扶桑略記の引用及び中川氏の學燈に揭げし京都護國寺藏本にては漢文なれども、東寺本及び史料編纂本にては、集に酷似したる片假名小書本なり。本漢文なりしもの傳寫の間に片假名交りに訛せしと覺し。榮華物語(しづのく)に據れば此頃(一〇六六頃)道長の法華經五卷の繪卷と云へるあり。其裝ひ紺靑地に金泥もて記し綾紋の下繪あり、經文の上下に其意を畫き誦出、提婆、壽量の三品、七寶の美をつくしたれば『經とは見え給はず、さるべきもの、集など書きたらん樣に見えて、好ましうめでたうしたり』と讚歎したり。これ又三寶繪の類にして、當時上流の間に流行したる經文文學の繪卷物の趣味と合體したる趣を見るべし。源信には往生要集の外、花鳥集、新修往生傳(卷)あり。爲憲には詩文のものながら新撰本朝詞の作あり。藤原宗友の本朝新修往生傳(卷)興福寺聖海の往生集(卷)等孰れも佛敎的傳記文學の作品なり。又惠心が顏眞卿の畫讚に因りて作りしと云へる天台大師和讚を始め、來迎和讚、二十五菩薩和讚、山王和讚、通憲の智證大師和讚、恐らく平安の末頃の空也和讚、千觀の阿彌陀和讚、空也作と云へる西院河原地藏和讚など、其傳は詳かならねども此頃の佛敎文學中には和讚の發達も著しかりしなり。是等は

道長の法華經五卷繪卷

天台和讚等の勃興と佛敎的和歌今樣との關係

梵漢讃歎文學の感化に出でたりとするも、我が奈良時代より連續したる佛足石歌、日吉七社祭禮山王船謠、七猿和歌、極樂願往生歌の如き佛敎的和歌及び今樣と交互的の影響を有すること亦頗る大なりき。

慶滋の日本往生極樂記

次で寛和二年(一六四)には保胤の日本往生極樂記(一卷)出でしが、之亦迦才の淨土論及び瑞應傳に倣ひて、專ら念佛往生の傳話を錄し、菩薩、比丘、比丘尼、以下四十五人の記事を載せたり。中に就いて聖德太子、行基、無空の話などは、集の說話に採錄せられたるものなり。往生要集の記載に依れば既に圓融帝の天元中にこの著の大體は成りしものなりと言へり。永觀の前後數年間の著と覺し。又和歌系統に屬するものながら、選子內親王、寛弘九年(一六七二)の發心和歌集は十大願によりて十方淨土に往生せんの心を五十五首の和歌によみて、法華經以下九經の偈句を誦出し、天台護國院の寂然の法文百首も止觀、法華、大論、涅槃等の願文偈句を採りて、或は其意を歌ひ或は其の意を說けり。著者が當時の歌物語文學に精通せし樣と、天台の一念三千觀を力說したる點とは最も注意すべし。

發心和歌集と法文百首

鎭源の法華驗記

續いて長久二年(一〇一七)には首楞嚴院の沙門鎭源に大日本法華驗記(漢文二卷)の作あり。靈異記を祖述して都べて百二十九人の傳記を載せたり。其の說話の集に影響したるもの少からざりしは、既に前編に述べたるが如く、只集に比して空想的の荒誕味少なく、記述の體も奈良佛敎を宗派史的に排列したるなど實用の趣一層多きを認むべし。此種の文學には尙引續きて平基親の往生要集勸文、善導畫讃(一卷)、三井寺慶運の念佛三昧記(一卷)、空然の十六相觀詩、大江佐國の惠心僧都傳、心懷の安養鈔(三卷)、白河院の旨により良慶の撰せし安養鈔(六卷)、大江匡房の續本朝往生傳(一卷、一七五八頃)、孝範の惠心僧都銘(一卷)、藤原通憲の病中作と云へる極樂古調紀三百韻、源隆國の安養集(一七三五)、三善爲康の拾遺往生傳(三卷一七五九)、後拾遺往生傳(三卷)など續出したり。四天王寺行慶の和漢往生傳及び尊知の同繪卷と云へるも此頃行はれしものならん。三部經繪と云へるもありき。匡房の往生傳は慶氏の極樂記に繼ぎ、所謂藪蕘を詢ひ、朝野を訪ねて編めるものにして、上は國王大臣より下は僧侶婦女に至る迄、都廬四十二人の傳話を收め、別に雲客、管絃、文士、和歌、畫工、婦人、異寵、近衞、陰陽、有驗僧、能說師、高德、醫方、明經、武士等に就いて天下の一物者數十名を錄したり。緣記、傳記、敎說、詠歎の文學既に斯くも盛んに次を追ひて出現したれば、天永の頃ほひに到りて是等を打つて一丸としたるが如き今昔物語集が、佛敎文學の第二小系中に、炬然として出現したるも決して偶然にあらざるなり。

續本朝往生傳
極樂古調紀、安養集、拾遺往生傳、後拾遺往生傳等

第三節　その下降系統

第一　説話文學系統

下降系統とは云ふ迄もなく集以後に於ける、前記の二系統の文學の發達したる狀況を意味するものにして、是にも形質上の系統卽ち理論上同一系統の文學と認むべきものと、直接の系統的關係を有するものとあり。近世期の文學に入りては、其範圍より云ふも、其質量より云ふも、著るしく廣さと深さとを加へ來れるを以て、以上の二系統にも、痛く錯雜を生じ來りて截然之を區別し難きものあると共に、前章に述べし社會生活の文學系統（第五系統）及び戀愛生活の文學系統（第六系統）が一般文學界の主流たるに至りて、此傾向と關聯したるもの少からざるを見たり。然れども今昔物語集の主なる內容を代表したる上記の二系統の文學は、其自身としても、又集に對する直接の系譜關係に於ても、近世期に入りて依然として一種の系統的發達を遂げたるを以て、此場合には尙上來系統に於けると同樣にして、其下降系統を追跡する事を得るなり。勿論近世の廣汎複雜なる文學に對する系統觀察てふ意味は、其觀察が主として、上述の二點より出でたるものなれば、必ずしも該作品、本來の全性質に應ずるものゝみにはあらず。其場合には說話文學系統、若くは佛敎文學系統の派生、發達として觀察せば、然か觀察し得と云ふ意味に外ならず。敢へて一切の國文學中の作品を、說話及び佛敎の二要素に歸して、漫然文學上の系統論を適用せんとするものにはあらざるなり。

下降系統文學の二類

近世期文學に於ける系統的觀察の注意

先づ說話文學系統について見るに、集の後第六文化時代に入りて、史書に皇圓の扶桑略記（一八二〇頃）編まれ、歷史物語に源道親著と云へる今鏡（一八三〇頃）の出でたるは、時代の趣味の此方面に盛なりしを示せるものなり。殊に今鏡の著者が空穗、隱れ簑等の作り物語を著はせし事を以て、罪深き業と考へ、源氏に就いても六十帖などまで作り給へる文も、結局罪障の因をなすものなりと云へるは注意すべき思想なるべし。そは寶物集の源氏物語供養（四卷）、安居院聖覺の源氏供養諷誦文等に現はれし假托小說を作るを以て罪障と觀ずる思想の權輿として也認むべしと云ふに止まらず、斯かる時代の心理に因りて、一度び源氏物語の如き黃金作を出すに至りし美文學界の情勢の俄然として衰微し來りて、事實的回顧的なる歷史物語又は說話文學の一時に流行するに至りし心理的理由の一半をも看取するを得べければなり。第四文化時代より以降、平安時代の後半期に入りて、文學界の作風に著るしき變化を見るに到りしは、實に這般の宗敎的信念に歸因する思想の流行が其直接の根柢たりし物なり。

扶桑略記と今鏡

後半期の作風と文學罪障の宗敎的思想

無名抄と江談抄

宇治拾遺物語と撰集抄四季物語

平家時代には右の外、後賴の無名抄（平假字交一七九〇頃）に著るしく、今昔物語集の説話味が流入したると、匡房の話談に依りしと云ふ江談抄（一八〇〇頃漢文六卷）に公事、佛神、雜、詩、長句の五類につきて事書にて注したると九條伊通の大槐秘抄に、武士の物語など見えたる外には徵すべきものなし。盛んなりし淨海の一門も、新らしき世の流れを想ひ誤りし果ては、無殘や西海の煙波に、一門の悲劇を留めたるのみ。近世期の幕、突如として引かるれば、世は、疾や鎌倉時代に入りぬ。

茲に出でたる宇治拾遺物語（一八四五）は既に詳述したるが如く、今昔物語集の直系の作品にして、單純なる説話味文學としては寧ろ集よりも一層其性質を加へ來れり。今日のテキストには多少の疑あらんも西行の著と云へる撰集抄（九卷、平假名交、一八四三—一八五七頃）長明の四季物語（平假名交一八六七頃）等も見ゆ。前者は歌物語趣味に佛敎味を加へ、九品の淨土、八十種好に擬しなどして、四十餘年の霜を戴き壽永二年正月、讃州善通寺の方丈に記すと云へども尙後の物なるべく、後者は年中行事、神、儒、佛の要素を混ずること多けれども孰れも一種の説話系文學とすべし。但し風葉和歌集に引かれし四季物語は純粹の物語小説にて之と別作なり。光行の蒙求和歌は漢文學系統と歌物語系統との相合したる作品乍ら、又漢土の故事和譚を好める時尙に應じたるものなり。著聞集に唐繪倭繪もて和漢抄の畫かれしと云ふにも其趣を想べく、本朝書籍目錄に茂範の唐鏡（十卷）と云へるも此頃のものと見えたり。こは唐物語などゝ似て鏡物の文藻を採れるものなるべし。承久より貞應の頃（一八八二頃）にかけて成りしと見ゆる愚管鈔（片假名交七卷）は、慈鎭の作なりや否やは尙決し難きも、時代と著者の內徵上の出身とは之に叶へり。蓋し源平二家爭亂の批評に始めて、實朝死後、政權の依然として東遷せるを慨し、殊に義時の專權を見て、憤餘一個の大史論を草したるものに似たり。其の古を語り、今を語る著者の思想は、必ずしも佛法に卽したるに非ずして、屢、儒敎を交へ、殊に我尊王、敬神の固有思想の色彩著るしきを見るべし。彼の史觀と批評とに、徹頭徹尾一貫して現はれたる所謂『道理』なるものは、かゝる諸要素の凝固し、練結したる結果生ぜし大人生觀、大信念に外ならず。此點に於て、愚管鈔の説話は、集のそれに比すれば、著るしく著者の統一的思想に依りて、取捨せられたるものにして、そは卽ち説話文學が歷史物語の要素を、最も多く混和したる一例なりと云ふを得べし。同じ頃の古事談（六卷、漢文、一八八五頃）は、王道、臣節等の數項につきて、主に平安後期の説話を集めたるものなるが、前にも云へるが如く、新院の記事なども見ゆれば、後堀河帝頃の物なるべし。續古事談（片假名交）も亦、王道以下六項に分け輯めたるものなれども、

蒙求和歌と愚管抄

著者の道理と文學的性質

古事談と續古事談

記錄史譚の書

繪卷草紙の系統と吉備眞備入唐繪卷

和歌批評の系統と歌仙落書

終りに建保十年卯月二十三日記などあるは疑ふべし。建保は七年にて改元せられたると記事の點とよりして、尙數年後の物なるべし。曾我物語、義經記など云へるものも、今日のテキストは兎に角、其原形は比較的早く現はれたりと覺ゆ。敵打物語が、既に古く、時人の好んで傳誦したる所となりしのみならず、後に佛敎文學系統に述ぶるが如く、地藏靈驗記（鎌倉時代）には、早くも既に發達したる曾我兄弟の物語見え、又守覺法親王の左記の冒頭、源平爭亂の史論など記せし文治元年頃の記事にも『爰聊依有二所思一、密招二義經一、記二合戰軍旨一、彼源廷尉、匪直之勇士也、張良三略、陳平六奇、携二其藝一、得二其道一者歟、』などありて、何となく義經記、戰記物語等の出所を暗示する節あると共に、斯る物語の古く此頃より行はれたるを想はしむるなり。上來系統にも述べたるが如く、一般に玉葉、明月記、吾妻鏡、百錬鈔、類聚鈔（仲實佚）等、此期に續出したる記錄史譚の書、及び室町時代に涉りて出でし幾多の往來文學が、說話文學の發達と、相關して種々の交涉を有したるべきは明かなり。繪卷類にも例の伴大納言繪詞等に次ぎて、江談抄に出でしと覺しき吉備眞備入唐繪卷など行はれたり。鎌倉時代に小說說話を採りて繪卷とするの風盛なりしは、明月記、吾妻鏡、著聞集の記事を見るも明かなり。是亦說話文學の主要なる一傳流なるべし。又久我通光の歌仙落書、後歌仙落書

十訓抄と敎訓味

古今著聞集と神道主義

等（一九〇）の和歌批評書の中にも流入したりと見えて、今は昔などの語句多し。

建長四年の頃（一九一頃）著はせしと云ふ十訓抄（三卷、平假名交）は、名の如く佛敎的道德說法の項目十條につき、幾多の例話をあげたるものなれども、其敎訓味は集の方遙かに濃厚にして、此は寧ろ平淡なる說話に富めり。然れども宇治拾遺に比すれば流石に敎訓味多し。漢文學、佛敎、歌物語等の要素もやゝ交れり。序文として傳ふるものゝ、著るしく古今集の序に擬したる、狂言綺語の戲、却りて讚佛乘の緣なりなど云へるは、其一例なり。空物語を以て、來世の佛罰を受くるとなせる一方に、斯る思想の行はれたりしも一奇なり。越えて數年、橘成季の建長六年作（一九一頃）作と云へる古今著聞集（廿卷、平假名交）あり。こは序文にも宇縣亞相巧語之遺類と見えて、宇治大納言物語、又は宇治拾遺物語及び江談抄などの餘波の作なり。著者は琵琶詠誦の事に通じ、圖畫、丹靑の道を好める者、先づ音樂、繪畫の二道を主として之に古今の庶事、街談、巷說三十餘篇を加へて序で輯め、編述上の主義は集の著者の佛敎主義なりしに反して、これは全く敬神、固有の思想を以て主としたれば、神道系統の作中にも屬せしむるを得べし。技藝譚が神道と結合したるは、同時代に敎訓抄などの如く、佛法と結合したるものありしに對して重要なる差別點を示せり。文永の頃（一九三頃）には、本朝書籍目錄に信實

今物語、今昔物語繪卷、加陽良藤物語繪

徒然草の説話文學と太平記、吉野拾遺

の著と云へる今物語、十訓抄其他に見ゆる歌話逸事譚を記して成り、惟久の宇治拾遺物語を描きし今昔物語繪卷、後三年繪詞及び撰集抄に出でし硯破草紙繪なども現はれたり。今物語は本二十七卷なりしと云ふも今一卷のみ。今昔に出でし賀陽良藤物語繪卷も元享頃の物ならん。宇治拾遺物語の序文のかゝれたるもこの頃の事なり。又直接この系統の作と云ふにはあらざれども、源氏物語の大意を五十卷につきて詩賦に詠じ、雲隱は名のみ存せしめたる賦源氏物語詩も、正應三年(一二九〇)の作なりと云へり。永仁の交には、天狗草紙出でゝ其繪卷には五卷の物、一卷の物などありき。早太郎傳説は正和三年の事實なりと傳ふ。斯て建武、興國の頃(一三〇〇頃)には、吉田兼好の徒然草出でゝ佛教、神道、趣味、人道等の種々の見地より、批評を敍べ故事を記したる一種の説話文學として世に行はれたり。其文學上の性質は遠く枕草紙を祖とし、今昔物語集を二祖とし、方丈記の佛教的要素と、四季物語の神儒教及び年中行事要素を父母として生れたるが如きものなり。太平記の成りしも文中の頃なるべし。正平の終頃成れる吉野拾遺(一二卷、一三〇〇頃)にも其名の宇治拾遺に出でしとの傳へあり。(空阿、俳諧傳)如傀子の可笑記にも雜々拾遺と共に之を引けり。應永七年(一三〇〇)には、信濃の大塔合戰を、諏訪の社僧堯深の記したる大塔物語あり。往來物に似たる文氣なり。土佐行廣(永和頃)又

鏡破物語、漢故事和歌集、東齋隨筆

は光廣作(應永中)と云へる奈與竹物語繪卷の盛りに行はれしも當時の事なり。奈與竹物語は著聞集(卷第十一)に、後嵯峨帝の頃、三條白河少將を鳴門少將と世に呼べるは、鳴門の若女とてよき女の上る所と云へる、そこの女房との物語を記したるに由れるなり。一に鳴門中將物語とも云へり。考古畫譜に隆能筆爲家詞書のものありと記せるは信じ難きも、建長帝の白峯社に寄進したるもありと云ひ、今も金刀比羅社藏の繪卷ありと云へば、鎌倉の頃より既に行はれたりしと見ゆ。此作風葉集に鳴門中納言物語とあり、乳母草紙にも見えて、類聚名物考(五卷、七一六頁)には鳴門の少將物語、一名奈與竹と記したり。奈與竹と云ふは歌に由れるなり。後花園帝の永享七年(二〇九四)には、貞成親王、前年、明德記、堺記、椿葉記を上りたるに加へて古今著聞集を上ると見え、文安の終頃(一二一〇)には光信の鏡破物語繪卷行はれ、蒙求和歌に倣へる漢故事和歌集なども出でたり。一條兼良の東齋隨筆(平明名交)も應仁の亂前後(一二一七)のものにして、音樂、草木、鳥獸、人事、詩歌、禮節、好色、遊興など、何くれとなき故事を集めたるも、この系統中の作品なるべし。

殊に鎌倉の時よりこの方、室町時代にかけては、文學の主流たる美文學的作品にても、一面には著るしく佛教的の趣味を加へたると共に、一面には又説話中心の文學となりはてゝ、

近世期の小說說話類と繪卷の俗說味

物語は孰れも一個の脚色ある筋組を主としたるものとなれり。こは文學の美的批評より見て決して高きものにあらざれども、兎に角かゝる文學が時代に優勢なりしは、卽ち說話の趣味の、時人に喜ばれしを證するものなり。例へば苔の衣、小落窪、鉢かつぎ姫、岩淸水、秋月、岩屋、伏屋、宇治大納言(三卷)等の諸物語を見よ、皆傳說的或は世話的說話を以て其文學の中心とせざるはなかるべし。鎌倉期より引續げる繪卷の類にも、此系統のもの少からず。看聞御記の伴大納言物語、彦火々出見尊物語、言繼卿記の狐化繪等これなり。之と共に又當時に出でたる各種の語り物には後に記すが如く、佛敎文學系統の交涉最も大なれども、新古の說話が、其內容、題材となりし事は爭ひ難し。宴曲の伊勢物語、源氏物語、靈鼠譽、管絃曲、長恨歌の如き、謠曲の田村、八島、信田、船辨慶、雨月、簸、大江山等の修羅物、熊野、梅若、蘆刈、浦島、松山鏡の如き鬘物(雨月の記述は、後の雨月物語の文藻に甚相似たり。)蟬丸、安宅、望月、櫻川、隈田川、曾我諸作の如き現在物、紅葉狩、羅生門、富士山の如き五番物など又舞の詞の滿仲、信田、大職冠、入鹿、百合若大臣、硫黃ヶ島、夜討曾我以下の源平物、お伽草紙の十二段草紙、酒顚童子、富士人穴草紙、浦島太郎、一寸法師、福富草紙、橫笛草紙、附喪神、化物草紙、田村草紙、さては古淨瑠璃の諸作にも其趣味は盛んに流れ入りぬ。今昔、宇治拾遺等の傳說が謠曲に入れる事については、

語り物系文學と傳說味

江戸時代文學の說話的要素

先年久米氏も『能樂』にて今昔系統の物語流行が平家節の發生を促し、やがて謠曲にも入れるなりと論ぜしことありき。但し狂言記の文學には朝比奈、那須の與一、生捕鈴木、二千石、こんくわい、七騎落等數番を見るの外、その趣味主として現實的なる社會生活の方面に注がれたるを以て說話味に至りては、察ろ甚だ稀薄なりき。

斯くの如くに時と共に發達し來れる說話文學の系統は、室町時代より江戸時代に入るに當つては、佛敎系統文學と相結んで、他の諸系統の文學よりも、一層優越なる勢力を以て進入するを見たり。而して江戸時代の文學の主流は所謂第五、第六系統のものにして、之を從來の文學に比すれば、一層國民的となり、社會の各階級に擴布して、著るしく多方面への發達を遂げたれば、如上の說話的要素も亦隨つて幾多の方向に分派し浸潤するを見たり。

是等の文學上の經路と性質とを、細密に敍述するは素より一朝一夕の能くする所にあらず。且つ今は、我文學に於ける說話文學の大體の系統的發達を叙述するを目的とするが故に、單にその大略を述べ置くに止めざるべからず。

伊曾保物語、尤の草子、御伽婢子等

安土、桃山時代より江戸時代の初頭にかけては、文祿二年の伊曾保物語(Esopono Favlas.)の羅馬字口譯あり。Easop 物語中、七十話を抄譯したるもの、この後慶長、元和、寛永、萬治

外國傳說文學の影響
可笑記等の教訓味

等の諸版ありて之に次げり。こは南蠻人の交通、耶蘇教の傳播と共に、我國に新たに入り來れる說話文學上の一系統なるが、當時に於ける文學上、道話上の影響は、差したるものなかりしが如し。當時西國の傳道教會にては、我平家物語などをも採錄して出版したりき。又之と共に枕草紙(寛永前二卷)、棠陰比事を翻譯したる棠陰比事物語(慶安四五卷)、剪燈新話を翻案せしと云へる淺井了意の御伽婢子(寛文六十三卷)、某氏の釋迦八相物語(寛文六十卷)の如く、支那の怪譚、巷談、笑話の文學が、我說話界に流入したるもの少からざりき。古く萬葉集に多大の影響を與へたりし遊仙窟を初め、淮南子、拾異記、述異記、冥報錄、言鯖、應階錄、雜纂、幽怪錄、會眞記、列仙傳、諸嘘錄、調謔篇等此期に翻案せられたるもの恐らくは數百部に上るべし。是等は伊曾保物語の影響と同じく、直ちに我說話文學の內容に同化して長く傳承せらるゝに至りしものは甚だ稀なりしも、我國民の裡に說話文學の趣味を刺激し、其形式、思想に間接の影響を與へたりし事は、蓋し決して少からざりしなり。且江戶時代の初期は、一時の啓蒙時代に當れるものなれば、此期の假名草紙、浮世草紙の一半は、其點に於ても啓蒙的なる說話趣味を以て形成せられたるなり。從つて說話の社會生活上の教訓に應用せられたるが如きもの亦與らざるを得ず。淺井了意の本朝女鑑、孝行物語、堪忍記の如きもの、又

繪畫上の傳說
繪卷

軍談、諸國譚、
笑話類

如傀子の可笑記(五卷、寛永十三)に今は昔の物語、昔さる人の云へるは、昔ある人の云へるはなど記し出して、初に教訓の意を述べしが如き是なり。後の心學の道話の類も、說話文學としては亦この系統に屬するものならん。但山岡元隣の他が身の上などはその說話味甚だ乏し。當時又土佐、住吉家等には傳說物語を粉本とせし繪卷少からず。前にも擧げし如慶の宇治拾遺物語繪、具慶の門部府生繪卷等云ふ類是なり。

偖前期につゞける說話文學としては、軍談、讀本の類に、信長記、太閤記、三浦淨心の慶長見聞集(十卷)などあり。笑話、滑稽の話譚を集めたるものに、醒睡笑(元和九)、咄物語、私可多話、蜀山人の醒睡笑系の落咄本と手記せるきのふはけふの物語(二卷)、又竹齋物語(二卷)、當世尤の草紙(五卷)、仁勢物語(二卷)、犬つれ〳〵(二卷)等あり。御伽婢子に出たる怪談、奇聞の作には、お伽物語(五卷、萬治元)、百物語(二卷、同)、北條團水の怪談諸國物語(五卷、享保十一)、百鬼徒然袋(三冊、天明四)、百鬼夜行(三冊、安永六)、同拾遺(安永十)、古今百物語、大和怪異記、今樣二十四孝、拾遺お伽婢子、丈阿の紅皿缺皿往古噺(安永)、堀田麥水の三州奇談(九卷、加能越)などを數ふべし。釋了意の浮世物語(五卷、寛文初)なども、今は昔にて始め、心の儘ならぬ浮世こそ一寸先は闇なりと云ひ、浮世坊の生涯を述ぶるに、稍心理的に入れる筆つきなり。或人はこを伊曾保物語又は徒然草に倣へる作なりと云へり。

諸國譚としては、了意、西鶴、其磧等の諸作に系統を引ける種彦の邯鄲諸國物語に到りて、小說的の說話味大いに加はるを見る。

浮世草紙、讀本の說話味

以上の系統は、孰れも國民生活上に、斷絕すべからざる古き趣味性を根柢とするものなるが故に、元祿以後文學上の創作性顯著となれる間にありても、浮世草紙にては一代男等の好色物、永代藏等の町人物にすらその分派を認むべく、又讀本にては、其趣味一層累積的にして、近路行者の古今奇談英草紙（五卷、寬延二）、上田秋成の今古怪談雨月物語（五卷、安永三）、建部綾足の本朝水滸傳（十卷、安永二）等を始め、京傳、馬琴等の作にも、一二の說話のその脚色中に要素たることの殆んど常套の手段なりき。又古物語の文體を以て草したるものには、前記の雨月物語、綾足の西山物語（三卷、明和五）、石川雅望の飛驒匠物語（近江輕物語、しみのすみか物語、後出。）芝浦物語、村田春海の竺志船物語などあり。所謂和漢混淆文の一體をなせる新井白石の藩翰譜なども、其下段書せる注釋文は、說話中心の趣味と眞率、粗朴なる筆致とに於て、一種の說話文學と見るを得べし。折焚く柴の記は大鏡などの歷史物語に出でし點に於て又同じ趣味を含むべく、室鳩巢の駿臺雜話、松平樂翁の花月草紙などにも亦同じ文學上の性質稍備はれるを見る。

語り物、金平淨瑠璃の說話

又語り物にても、古淨瑠璃の一派なる金平淨瑠璃は、其題材多くは舞の本に出でしと云はるゝ丈け、賴光蜘蛛切、金平誕生記を初め、全く說話中心の文學にして、從つて是より出でたる近松以下の淨瑠璃、及び歌ひ物と合體したる歌舞伎芝居の脚本中にも、說話的要素の流入したるもの甚だ多し。そは單に時代物の上に於てのみならず、世話物中にも、又景事、振事の曲中にも、其例乏しからず。かくの如く今昔物語集に集注したる說話文學の傾向の、或は全體的に或は要素的に江戸時代の文學の諸方面に、分化し影響したるは甚だ多きものにて、其各說話について、夫々特殊なる發達上の觀察を試みるは、一個の趣味ある研究部門なるべし。今は其餘裕なければ、以下只今昔物語集及び宇治拾遺物語、古今著聞集等に直接關係ある文學の如何に夥しく著述せられたるかを記述して、この項を終るべし。

集に直接關係ある江戸時代の文學作品

先づ宇治大納言物語は、天明六年洛の滄浪居主人序に、貞享四年初めて世に弘められたれども、後埋もれて辛うじて尋ね出せる由見えたり。こは先に言へる如く隆國の物語に擬せしものゝ此名もて再び世に行はれたるにて、內容上よりは宇治拾遺系のものなり。又正木千幹の宇治拾遺物語標註（十卷）、北愼言の同抄（三卷）、小島之茂の同私註（三卷）等も出でたり。其他此系統の作には群書備考に寬永二十年板本と見ゆるいつを昔あり。不破拾遺（三卷寫）と云ふも江戸初期のものにして、室町時代の士俗傳說を列記したり。江戸の中期より下半期に入りては

字治大納言物語、宇治拾遺
煎茶友、狂歌
今昔物語

文學の各方面に現はれて山東京傳の今昔八丈擶（六册、文化八、九、お駒丈八物語を脚色す。）、關亭傳笑の今昔猿人眞似（二卷、文化十二、堺、衣笠東茂仇打話）、竹塚東子の今昔とのゐ物語（五卷、文化九、十一、佐々木溟人、幸雷左衛門一家の騒動合卷。）、櫻川慈悲成の今昔虛實錄（六册、文政十四、陶木家の騒動話。）、式亭三馬の日暮林清、鱗燒等太異魔昔阿露（オツユ）雜談一名地藏和讃の初まり（三册、文化十一）藤原道信の今昔寫寶袋（五册寫、明治初か）あり。墨川亭雪麿の宇治拾遺煎茶友（六册、天保五）は宇治拾遺の序文に依りしものにして、集の血の卒堵婆話の條に取りて『今は昔』にて書き出したれど、實はお駒才三話を記せるものなり。かく當時此序の話より、茶話の意に聯想せられ、一面には又落語の方面にも應用せられたり。全亭正直の狂歌今昔物語（二卷、文化十）は、石川雅望の序に今昔物語非隆國說を記し、東夷庵の序文に『今昔物語は猶宇治の茶話なるに對し、それを狂歌、狂文に點心して云々全亭ぬしの鼻少し隆國卿の樣に思はるゝは、茶臼の挽木、ひく方よりみねばなるべし』など云へり。之と同じ類には明治に入りても秋迺舍望城の今昔狂歌叢話（一卷、明治廿九）、ありて今は昔など記し始めたり。又新著聞集（十八卷、寛延二、平假名文、忠孝奇怪等十八篇の話を記す。）、犬著聞集、雪磨の合卷犬著聞傾城鑑（六卷、文政十）、八島定岡の猿著聞集（五卷、文政十一、古今著聞集、及び犬著聞集等に出づ。）、松風庵寒流の老媼茶話（寛保二）、三好想山の著聞奇集（五十卷、嘉永二、奇譚雜談など四部に分ち記す。教訓的なり。）、櫻川慈悲成の今昔緣起の白綾（二册、寛政八、羽衣漢文の後、身譚、鬼子母神などの實本。）、可笑の今昔曾我の面顔（一册、安永八）、鶴屋南北の昔同今物語（六册、文政十三）

近江縣物語、
今昔出世扇、
愚痴拾遺物語

開卷百笑、貧
著物語、古今
拾遺著聞集

渡邊綱話は合卷本なり。石川雅望の諸國今昔物語（三卷）近江縣物語（五卷、文化五）、しみのすみか物語（二卷、天保十版）も名高し。此中近江縣物語は今昔物語集の滑稽味と其世界とを受けたること最も多く、今は昔にて記し始め、賴光四天王話、滿仲話、坂上梅丸話等の中に、盜賊譚、合戰譚、戀愛譚、利生譚等を記し、結局勸善懲惡の敎を寓したり。『梅丸任所近江にて人々に語りける を其儘にかきつゞければなるべし』など記したるも、集の傳聞の體に倣ひたるなり。十返舍一九の膝栗毛は了意の東海道名所記を粉本とすと云ふも、一部の挿話の全く集に出でたる近江縣物語に採りしもの少からざるが如し。又しみのすみか物語は宇治拾遺の話譚と文體とに擬せしものなり。手柄岡持の後は昔物語（一卷、享和三）、八文字屋自笑の今昔九重櫻（五卷、寶曆十いまはむかしと訓み、桓武帝の頃の事件と當時の遊里の事とを誌せり。）、陽炎日高川（寶龜八年頃、帝位爭の話。）、往昔喩今世話善惡身持扇（三卷、享和十五）、今昔出世扇（其磯と合作物、五卷、延享二）も見ゆ。葛飾隱士馬文耕の愚痴拾遺物語（寶曆）は宇治拾遺物語に擬したる名にして序に著者新橋邊に住み、信樂なる茶店にその愚痴話を聞く體にて議論、語釋など志す。隆國茶話の傳說に依りしもの、淡洲樓焉馬の開卷百笑（一卷、文化）は一名無事志有意と云ひて今は昔などにて始めたるもあり。山德、萬羅、晉家魯石等當時の作家の手になれる落語集なり。醒睡笑などに出でたりと云ふも、隆國の茶話より宇治拾遺物語、今昔物語が聯想せられたる

によるものなる事明かなり。そは今日も落語家の間に祖述する所なり。醉雅子の著聞雜々集（五卷、寶曆二、稗小說的に世話譚を記す。平假名交、事書體なり。）、鬼卵の今昔庚申譚（五卷）、寧儉堂主人の照代著聞集（四卷、天明七）、今昔諸國話（五卷、明和元）、今昔浦島咄（三卷、明和四、靑本の中にて二女の戀の話より敵打に至る口語體。）等も此種のものにして、與東雲齋の今昔萬才の島臺（三卷）一九の今昔狐花咄（三卷）等は黃表紙物なり。三條茂佐麿の貪著物語（五卷、文化二、今は昔にて始め、中古の今昔物語に擬す）、重扇助の今昔相宿噺（上下、石井常右衞門、高尾大夫の脚本なり。）、濱松氏助の今昔二枚繪と判はりて二十三條の話あり。）双紙（文化二、孝義の讀本。）、近松の心中二枚繪草紙（寶永三、氏助の讀本、の名の出づる所なり。）双木千竹の昔唄今物語（天明元）、作者未詳の今昔妹背の腹帶（寶曆十三）、藤原川定の古今拾遺著聞集（六卷、安永二、今昔物語、古今著聞の二集により、永錄、天正の頃の物語に及びしもの。）、近世拾遺物語（七卷、平假名交り事書、百六條を記す。風土地、古事談、江談抄、大著聞集に出てたるものなり。この書分册にしたるなり、大和怪異記と云へり。）、江都著聞集（十卷、勝山、白柄事蹟など記す。）、玉池谷翁の俳諧著聞集（四卷、文政八）、手拙の俳句集、今日の昔（元祿十二）、今昔續百鬼（安永八）、今昔百鬼拾遺（安永十、付喪神繪卷等に出でし繪物語に類せるもの。）、高井蘭山の今昔見聞草紙（二卷、天保十）、黑澤翁滿の藐姑射祕言（二卷、今昔に出でしもの三、四より。）、浪速樹下翁の今昔道の栞（三卷、嘉永二、今は昔物語の序あり、心學的の教訓を主としたるもの。）、朝寢坊夢羅久、林屋正藏の今（イムハムカシ）昔物語（浮世床引用。）など甚だ多し。

Miss S.Ballard の『宇治拾遺物語について』には小論を添へて終に卷七、五色の鹿話を譯出したり。その序論に曰く

『或るものは上品、或るものは悲慘、或ものは猥雜、或ものは事實、或ものは虛構など樣々の物語を含めり。中には印度支那の物語も見えたり云々。……我等は八百年前の日本國民性を見得る點に興味を有す。殊に Arabian nights, Grimm's fairy tales, 等の外國說話との連鎖及び戀愛要素 Motive of love. がこれらの說話中に入らざる點は甚だ興味あり。歐洲人にとりては、二百の戀愛脚色なき短話集の出現するが如き事は想像しがたき所なり。日本人の心理には戀愛はある錯雜せる感情として以外、特別に人々の興味を引かざるものと見ゆ。又文中には Iliish legend. と全く同一の話（Tr, Vol. III p. 62.）あり。』（Asiatic-Society; Transactions Vol. XX. VIII.）戀愛の要素が、說話文學に中心的ならざるは、女史の云へるが如くなれども、之を以て我國民性となすは、戀愛物語の高潮に達せし平安時代の文學評としては當らざる事言ふ迄もなし。又 L.Noenlini Innawamukashinonogatari (1878.) に將門話を伊譯したる事あり。

此他にも尙目擊せざるも多かるべし。是等は孰れも今昔系統の作品にして、或は說話文學として或は說話要素として、當時の假名草紙、浮世草紙は素より、讀本、滑稽本、人情本、草雙紙、靑本、黃表紙、合卷等のあらゆる小說を初め、淨瑠璃、歌謠の語り物、謠ひ物及び脚本等凡ての文學部面に涉りて、廣大なる分布と系統とを有せしものなり。假令それが各文學の本質上に於ける作用が、敢て悉く中心的影響を及ぼせし物に非ずとするも、集の說話文學としての一面が、如何に近世の國民文學に大なる波動を與へたりしかは一目の下に瞭然たるべし。

今江戸期に於ける右の諸作の影響を見るに、其關係は凡て八種類に分化したり。卽ち(一)、

バラード女史の宇治拾遺評

近世通俗文學に及ぼせる廣汎の影響

影響關係の八種類

文學の系統的通性の等しきもの、例、近世拾遺物語、近江縣物語等、(二)、直接說話の採られしもの、例、近江縣物語、宇治拾遺煎茶の友等、(三)、文學の形式上に似たるもの、例、貪著物語、古今拾遺著聞集等、(四)、名稱を採りたるもの、例、狂歌今昔物語、貪著物語等、(五)、宇治拾遺及び茶話落語系のもの、例、不破拾遺、愚痴拾遺物語、宇治拾遺煎茶の友、開卷百笑等、(六)、古今著聞集系のもの、例、江都著聞集、犬著聞集等、(七)、狂歌系のもの、例、狂歌今昔物語、後は昔物語等是なり。文學系統上に於ては(一)、(二)を主要とすれども、前記の作品中にては、(三)、(四)に屬するもの最多かるべし。(六)の類の痛く行はれたりしは其名の冠し易かりしに因るならん。

和漢三才圖繪と近世奇跡考

又この時代に於て、寺島良安の和漢三才圖繪を初め、京傳の近世奇跡考の如き、文人作家の間に和漢洋の故實を探り、傳寄雜纂を究むる風の盛なりしは、一面に於て明清以來の考證學、我國學の如き科學的研究法の發達に基くものなれども、一面に於ては、說話文學の弘布と相關したる時代の趣味、之が陪因たりし事も否む可らず。斯くの如くに觀來れば、我近古近世の文學界に、脈々として盡きざる一連の說話文學系統の貫流するものありしは、何人も諒得ある所ならん。其發現の狀たるや、或は合し或は分れ、或は顯はれ、或は幽かに、或は時代を變じ、或は事件を換へ、或は材料を新たにし、或は場所を異にしたるも、畢竟、次々の時代と國民生活とに、最も適合したる意匠の下に、種々の說話要素の文學中に入り來れると共に、時人も亦喜んで其話譚としての點に興趣を感じて愛讀したりしは明かなり。されば近世通俗文學の發達史上に於ける今昔物語集の說話文學としての系統が、如何に重要なる位置を占むるかは殆んど人の意表に出づるものありと謂ふべし。

今昔物語集と佛敎文學系統

第二　佛敎文學系統

前節にては、集の說話的要素の文學史上に於ける系統的發展を概觀したりしが、素と集の文學上の形質は、先に論究したるが如く、主として佛敎文學たる點にあるなり。若し人あり、集の代表的文學系統は孰れに屬するかと問はゞ、之を約して、國學中の第四系統、卽ち佛敎文學系統に屬するものなりと答ふるも不可なからん。されば、集の佛敎文學要素の下降系統に於ける追跡は、其說話文學系統のそれに比して一層重大の意義を有す。何となれば、近世期中、少くとも鎌倉、室町時代の文學界に於ては、佛敎要素は實に其重力的中心を占めたるものなるのみならず、文學者は多くは僧侶たりし事實あり。且江戸時代に入りても、佛敎は飽迄、民間生活に融和して一般の弘通を見たりし結果、其文學の歸着點は常に佛敎的信念、若くは佛敎的人生觀に外ならざりしを以てなり。故に集の文學は單にその形質として

近世文學に於ける佛敎要素と集の文學

も後代の文學に一種の系統を有する事實あるのみならず、斯かる系統中の佛教文學が常に他の系統と相交渉し、若くは新たなるものを派生せしめたる點に於ても、亦幾多の緊要なる問題を含めるや明かなり。

講式文學と表白文學、保延の三部經繪

偖今昔物語集に次いで現はれたる佛教文學系統の作品には、前編にも擧げたる永觀(一七九頃)の往生十因(一卷)、往生講式あり。共に念佛往生の文學にして、著るしく音學的の要素を含み來れり。長秋記に保延元年(一一三五)早く三部經繪の圖せられし事を傳へしも亦當時の淨土思想の流行を示すものなり。講式文學即ち諷誦文學は、古く奈良時代及び平安前期より行はれしこと既に述べたる所なるが、其類は願文表白文學と共に佛教文學中の一分派をなすべきものにして、四座講式を始め、或は諸佛に或は諸寺に關して、近世に到る迄盛に行はるゝを見たり。其文詞は、和漢混淆文、對句駢儷文及び今樣其他の韻文の發達に深き關係を有するのみならず、其聲律音樂は近世期の諸文學と歌謠との發達に除くべからざる交渉を示したり。殊に和讃と今樣とが主として後世の謠ひ物に影響を及ぼせるに對して、講式の聲律の主として語り物の方面に著しき感化を及せし事を注意せざるべからず。例へば平曲と講式との關係の如し。(兼常文學士、日本の音樂等。)覺鍛(一八〇頃)の歡喜天、菩提心等の講式、葬儀諷誦文、心覺

講式音樂と平曲

本朝續文粹の佛教文學味

宗友の本朝新修往生傳、珍海の日本三寶感通集

梁塵祕抄の佛教的詠歌

(一八四)の讃集(一卷)表白集(一卷)雜要文集(三卷)要文集(一卷)など孰れもこの系統に於て第一小系の佛教文學に屬するものと目すべし。かの、藤原季綱の本朝續文粹(十四卷、八〇〇頃)の如きも此點より見來れば、殆んど純然たる一個の諷誦願文文學たるものにして、是に三分の文選文學の影響を加味したるを見るのみ。所謂佐國、明衡、敦光、敦基等當代の文人詞客はかゝる佛教文學に於ける作者の優なる者なりき。近衞天皇の仁平元年に藤原宗友の編める本朝新修往生傳同じ頃珍海の撰みし日本三寶感通集(一八〇頃)は、之に反して集に次げる緣起傳記の作物にして、第二系の文學に入るべし。此期の末葉(一八四頃)に當りて、後白河法皇の親撰に係はる梁塵祕抄(一〇卷)出でたるが、こは神樂、催馬樂、風俗、今樣、法文歌(梁塵)等、當時の歌謠を輯めたるものにして、現存せる卷一(版本に依る。)に見るも、法文歌二百十九首、三百二十五首中、二百八十餘首は、佛教的詠歌にして、和讃より今樣歌の發達すべき經路に生れたる當時の長歌、古柳等の諸體は遺憾なく傳へられたり。かく當時の歌謠界の一半が全く這種の宗教歌をもて代表せられたること、古今東西の文學界に於て頗る異數とすべきものならん。蓋し第五文化時代の終なる鳥羽崇德兩帝の頃は、現存神樂、催馬樂譜の略、成立せる時代に當りたるのみならず、上記の講式、表白文學の盛行せし樣と云ひ、第六文化時代に入りて梁塵祕抄等の著作の

平安末期の文學歌謠と佛教

梁塵祕抄口傳集の音樂歌謠と佛教

成りし事と云ひ、其他今樣、白拍子の流行せし事や、二期を通じて淨土、念佛宗の興起せし狀など綜觀すれば、所謂院政時代と平家時代とは、實に我文學界、歌謠界の最も佛教と融和的發達の頂點に達したる時期にして、新時代の文學界の大勢は此間の傾向中に既に十分豫測すべかりしなり。其趣は妙音院師長說ある嘉應元年(一一八九)の梁塵祕抄口傳集などに歷々として指すべく、佛教と音樂歌謠とは奇しき許り合體して發達したりき。(此書も廿卷中今在るのみ。されば法皇の梁塵祕抄前は群書類從に入れるのものにや。名目など稍訝かし。)されば講式文學の隆んなりし當時の時代を觀察して『平安中期以後より講式の信仰と風俗とは大に行はれ、從つて一種の特色ある文章と節調との發達を見るに至れり。源平盛衰記(卷廿三)にも金仙寺の觀音講に、義經辨慶等が闖入する事など見えたれば、當時既に所在にこの風行はれたるものと見ゆ。而して現存神樂、催馬樂の作曲せられたるは天治、大治の交に當りたれば、講式の俗の盛んなりし事も、此音樂的時代の傾向に乘じ、僧侶が文學上の技倆を以て、その信仰を民間に弘布せしめんと試みし一種の布教運動とも云ふべきものならん。我第十一世期より第十二世紀にかけては、新宗教精神の發動に伴ひて、僧侶が從來の山門退嬰の風を脫し、音樂、文章、儀式等も力めて其形式を通俗化し、茲に平民と僧侶との接觸協同を現出し、因つて以て益〻新時代の機運を促進せしめたるなり』(上田博士、言語と歌謠講義の說。)との評あるは、前述の佛教文學界の消息と時代の傾勢とを明瞭に指摘したるものなり。次いで治承三年(一一七九)平判官康賴が赦免の砌の著と云へる寶物集(七卷、片假名文)は、今昔に繼げる第三小系の文學にして、序文に嵯峨の清涼寺釋迦詣に談義をきく體に記して、大鏡の脚色を用ひ、三寶を聽き得て六道を問ふ事に始まり、道心を起し、罪業を滅し、善知識を得て、正念往生するに至る心得と例話とを注し、源信の往生要集、永觀の往生講私記などを擧げ、聖德太子以下往生人三十六人の事を記したるが、多くは今昔の說話に出でたる人々なり。爲憲の三寶繪に倣へるものならん。又『我等ハ何シニ生レケン』などの今樣も見えたり。但し後に近代作者として男女七十五人を記したるは續本朝往生傳に似たれども、その沙彌十五人中、『性照康賴入道』とあるは如何にや。自署にはあるまじう覺えたり。後人の假托ならぬ迄も、この書の現在テキストは尙信ずべからざるに似たり。泰覺の法鏡(八卷)と云へるも此頃の作なるべし。

寶物集と其說話

泰覺の法鏡

鎌倉時代に入りては、前期の終に成れる法然の淨土宗、建仁寺を剏めし榮西の禪宗相並んで興りぬ。解脫上人貞慶(建久七、一八五六歿)明惠上人高辨(建保四、一八七六歿)等の講式は、前期の講式流行に引續きて行はれたり。解脫上人の愚昧發心集(一卷)は、和臭ある駢儷體の漢文にて、人生の無常

愚味發心集爲盛發心集、一言芳談、肝心集等

月詣和歌集と佛門の歌集類

を說き、煩惱の苦を脫して往生の信を得べきを勸めたるものなるが、敬白十方法界、一切三寶、日本國中、大小神祇等と云へるが如く少からず兩部神道の思想を混じたり。爲盛發心集（漢文一卷）一言芳談（一卷）肝心集（一卷）なども多くは法然の歿頃（建暦二年、一八七二）に出でたるべし。爲盛發心集は角戸三郎爲盛發心之顚末を記せるものにして、關東弓取の强者熊谷、平山、角戸、甘糟四人と云ひ、一谷、西城戸口合戰に敦盛討取より無常を觀じて法然の弟子となると云ふなど、普通に熊谷の事蹟と云はるゝものに當れり。その終に天竺の五天往生記（天親菩薩作、羅什譯）、唐朝の寶珠往生傳、新修往生傳等を初め我朝の六家十一卷傳をあげ、善知識、出家、往生の例を示したり。五天往生記は、淨土眞宗敎典志に天親菩薩作說を僞妄としたり。天竺往生驗記（一卷）と同じものなるべく、こは傳敎の將來せし所なり。一言芳談は、問答體に記したるものにして、解脫上人の語なども引きたり。黑谷、法然上人の

西へ行く筋一つだに違はずば骨と皮とに身はならばなれ。

の詠にも見え、其他明遍、聖光、心戒、然阿などの敎旨を記しぬ。肝心集は建久元年寶地房の表白文など當時の多くの諷誦文を輯めしものなり。今樣、和讃、朗詠等と寺院の梵漢諷誦との聲樂上の交涉は、これらの書中にも窺ふを得べし。壽永元年（一八四五）、加茂重保の月詣和歌集には編徒六七十人の作者を出せり。又平安末期より此頃にかけて出でし佛門の歌集にして名のみ傳はれるものには尙、賢辰の三井集、覺審の春花集、靜緣の閑林集、證心の大原集、宗圓の明月集、慶辨の狂言集、宗延の山科集、顯昭の桑門集、多々法眼源賢の樹下集（九卷）、某の山伏集、蓮露集等甚だ多かりき。

地獄草紙と信貴山緣起

長明の方丈記と發心集

地獄草紙は信貴山緣起等と共に、この期の劈頭文治頃（一八五〇頃）に、春日光長の手に成れりと云へども所傳確かならず。されども地獄繪は此後長く畫界の一流を成して江戸時代の初に及べり。

日野の外山の麓に世を捨て、心一つの安きを計りし鴨長明の方丈記（平假名交）は建暦二年（一八七二）の作にして、佛敎文學系統の第三小系に入るべきものならん。承元二年方丈の庵を構へてより四年の間、明け暮にあはたゞしき世の遷り變りを觀じ、人と世と自然とを見過ぐして、寂びたる法の祈願に、一身の安住を求めたりし著者の消極的人生觀を窺ふに足るべし。其對句に富める句法と經偈的句調とは、哀愁枯淡の情趣を盛りて巧みに調和したる聲調を成せり。蓋し壽永、文治の急激悲慘なる時代の轉變は、前期の文明を夢みたる京畿の人心にも新時代の主人公たる武士、下民にも共に甚深の感動を與へたりければ、そこに湧出したる宗

教的人生觀は、現世的快樂主義なりし平安時人のそれと、其色調、漸く著るしく異るを見ぬ。前代に漠然として一二の人の上に現れたる厭世の情調は初めて寂びしき悲哀の想念となりて人々の胸壁を、大海の波の如くに搖りたるべし。長明發心集（片假名交八卷）は恐らくは長明以後、何人かの作なるべけれども、私聚百因緣集に、長明記處如別條云々とあるは、恐らくは發心集の事なるべし。其文藻は、稍自在なる筆致の事書體にして、集に比すれば、遙かに長句法の文章を含めるものなり。殊に寶月上人の語の條に、毎日曉には、明けぬなりの歌（後拾遺、四松法師歌）日中には今日もまたの歌（千載、赤染衛門歌）晚には山里の歌（拾遺、讀人不知歌）を誦し念ずべしと云ひ、惠心も初めは、和歌綺語などを往生の障として斥けしが、一日曉天に湖上を見渡すや、忽ち『世の中を何にたとへん朝ぼらけ』（萬葉、拾遺、滿誓歌）の詠を想ひて、聖敎と和歌二道一體の理を悟りたりと云ひて（卷六）、佛法僧侶と和歌との關係を示し、下山僧の事の條に『君ノ御爲ニハ高キ大神ハ現ハレ民ノ爲ニハ卑キ道祖神トナリ智慧ノ前ニハ本地ヲ現ハシ邪見ノ家ニハ佛法ヲ戒メ給フ云々、神ノ信仰盛ナレトモ佛法佛寺ハ衰フ衆生ハ神ニ依リテ漸ク結緣ス』（二八頁）とて、愚昧發心集よりも一層明かに神佛混淆の思想を說きたるは注意すべき事にて、近世期に入りて益、佛敎信仰が神道思想と混和したりし趣を見るなり。

神道佛敎和歌の混淆

說話文學系統に述べたる愚管抄（一八八〇、六八三）は、又少くとも第三小系の程度の佛敎文學としても認るを得べく、保元物語、平治物語及び延慶本、一方本等の發達は尙後年の事とするも、兎に角平家物語、源平盛衰記等の原形は、早くもこの頃迄に成れるならん。平家時代なる通憲入道の藏書目錄にも平家家記と言へるもの少からず有りし樣なり。八雲御抄（一八〇頃）にも平語抄（卷一、學書）とあるは、若し平家物語の平語なるにや疑はけしれども、弘安以前に一部を成せし吾妻鏡にも、平語、盛衰記の引用せられたるに加へて、佛敎文學の所謂第三小系の物語が相應に發達し得べき情勢は、前述の諸作を出したる時代に於て之を認むるに難からざるべし。承久二年（一八〇）には、蓮禪の三外往生傳、傳記文學に現はれ、翌年に安居院聖覺の唯信鈔、後世物語、大原談義なども、一種の佛敎文學系統に屬するものにして九年後なる寬喜二年に親鸞之を書寫せりと傳へたり。建久七年（一八五六）藤原定房の注せる多武峰略記には增賀等の傳話多く、北野緣起（三卷）も此系の作にして、殊に下卷には託宣往生の譚など十條を記したり。千種有房の野守鏡（上下）は發心集系の者として永仁三年（一九五五）に出でたり。著者は禪宗の信者なりしが當時の信仰界の禪念兩宗竝馳の樣なるを述べ、又天照大神を以て大日の化現なりとする本地垂迹の說を說き、更に佛法と歌道との關係を叙べ、佛敎的なる和

平家物語と源平盛衰記

北野緣起と野守鏡の思想

教訓抄と續教訓抄

東關紀行、南海流浪記、海道記

地藏菩薩靈驗記と寶叡

歌の聲律論、聲明、九條錫杖法等の利益など述べたり。かく當時は詠歌の方面のみならず、音樂聲律の技術の上にも著るしく佛敎と接近したりし結果、天福元年狛宿彌近眞撰の敎訓抄（十卷、片假名交、一八九三）の如き、一種の雜傳書を出したり。敎訓抄は歌舞口傳五卷と伶樂口傳五卷とより なり、神佛混淆の節も見ゆれども、大體に於て和歌藝術上に著しく佛敎的說明を加へたるものなり。其後元享頃（一九八五頃）に狛宿彌朝葛撰の續敎訓抄（片假名交十一册）之に續けり。古事談、著聞集等に見ゆる說話を交へ、書體は今昔に近きものなり。遙かに後の豐原統秋（二一八〇頃）の體源鈔（片假名交、廿卷）、安倍季尙（二三五〇）の樂家錄（漢文五十卷）なども、古譚を引用し佛說に附會したる點は其趣味相同じ。治安三年（一〇二九）親行の東關紀行、道範の南海流浪記（漢文）稍後れて光行の海道記等にも佛敎趣味と故事とは全卷の基調を成せり。

又鎌倉時代の前期頃には、かの今昔物語集の地藏譚の系統を集成し、心覺の地藏に序いで地藏菩薩靈驗記（上下二卷下卷佚）出でぬ。地藏信仰は平安時代に於ても甚だ盛んなりしを見たりしが、鎌倉時代以後に入りては、殊に此佛の現世の利驗を尊信する風盛となりたれば、平安時代に於ける觀音、地藏の順位は、此期に入りては少くとも對當の地位に進むを見たりき。著者三井寺上座實叡については、諸書多く記す所なし。只永田調兵衞の廣益書籍目錄（元錄五）

大濱法師曾我兄弟の亡靈を弔ふ話

卷一眞言宗の目中に『地藏靈驗記、十三卷、三井實叡、元興良辨』（六四枚）と見え、增益書籍目錄大全（正德）卷二、佛書の目中にも地藏靈驗記十三卷とあるのみ。十三卷の靈驗記は、現本とこ となるにや。尤も今昔、卷十七治安頃の話の次なる第十二の地藏譚に、正法寺の地藏昔は三井寺の塔の中にありて實叡供奉の修補せしものなりとあり、三井寺の前の上座云々ともあれば著者を云へるにや。續詞花集にも同人の詠一首ありと云へり。然らば靈驗記の時代は上りて平安末に入るべきにぞあらん。孰れにするも集よりは後の物なり。そはとまれ此靈驗記の文章は、片假名交文にて、彼人を『彼ノ仁』など云ひ、ヒをイにフをユに誤用したれども、今昔の如き奇字の使用は見えず。中比、鎭西の語、給への敬語用法も多し。大體に漢文脈味は乏しけれども、今昔に比すれば一層文語的なり。幾多の地藏驗話を記したるが、中につき、文學史上、最も注意すべき記事あり。そは三河大濱法師の傳の如く、往々他の說話に比して、數倍の長編に涉るものゝ見ゆる事なり。其修辭も脚色も思想も、著るしく文學的性質を加へたり。大濱の法師（眞如房）は、格別の智德もなく、只地藏を信じて日を暮しゐたるが、一日窓前に眠れる夢中の告に、信施の積るを恐れて巡錫せよと勸むる者あり。之に於て罪障を滅せんが爲に、先づ信濃國善光寺へと旅立ちぬ。かくて途中富士の裾野に宿りしに、身は

忽ち見知らぬ一堂に辿り着くよと覺えて、人に問へば、甲州一條、高砂河原の地藏堂なりと云へり。其夜風雨激しかりしに、忽ち血刀を提げて二人の男入來り、いざ戰はんとて出で行きぬ。堂にゐたる一人の女に宿を問ふに、我等は曾我兄弟の靈鬼なるが、父の仇討に罪を造りしが爲に修羅道に陷り、互に殺すこと日夜十二度宛なり。今は追善の功德により六度に減じたり。我は十郎愛念の絆に引かれて此堂に入りしが、追福の功德により戰を免れたり。此堂は兄弟、父孝養の忠あるにより地藏の與へ給ひしものなりと。此時目を開けば、雲霧晴れて日は尙未の頃なり。身は草野の中の小高き古塚の上、一村薄の下に伏しゐたりけり。法師は驚き立ちて、夢に見たる甲州一條の高砂河原を尋ね行くに、牛追ふ牧童ありて其地の由來を語りて搔き消す如くに失せぬ。此地は蒲無の大河、東西に流れ、中に流れ堂と呼ぶ古堂ありて、本尊は六尺三寸の地藏菩薩の木像にて座はせり。夢中の啓示もあれば莊の檀那を訪れ、幻化の事を告げて其修善を勸めなどす。かくて善光寺に詣でたる歸途再び流れ堂に立寄りて法華經を誦すれば、先の童子復現はれたり。是に御堂の由來を問ふに云々と告げて再び消失せぬ。之に於て懇ろに幻化の人々の成佛を祈りて歸來せりと云ふ話なり。

此脚色上の全體の結構を一考せば、何人も餘りに謠曲文學に近似したるに一驚せざるを

伏木曾我との類似、七五調の道行文

得ざるべし。曾我兄弟亡魂の修羅示現の物語、地藏童子の、一條河原、高砂河の流れ御堂等の故事來歷を夢告して消失すること、如來參詣の旅の次第、如來、地藏の利驗により、成佛冥福を祈ることなど、殆んど一個の修羅物謠曲を見る想あらん。就中、元淸作と云へる伏木曾我に虎御前が十郎の墓に詣でゝ亡靈より戰の模樣を聞く仕組とは最も酷似したるべし。其文辭より見るも眞如房が、如來と地藏との功德を述ぶる條など、戰記文の嚴めしき筆致に勞を聯ねたるなど、かゝる佛敎文學系統の作品が、如何に戰記文學及び謠曲文學の形式構造の發達に、密接の關係あるかを示して餘あるものなり。實にこの種のものが疑もなく、鎌倉前半期の作物なりしとせば、謠曲文學の興起は既に當時に於て、門墻一步の地に到りたるものにして、曾我兄弟復讎譚が、如何に早くより時代の佛敎趣味に由りて文學的脚色を施されしを窺ふ好資料ならん。この眞如房の話に次ぎては、末代上人が、伊豆箱根二所權現を草起し、承和二年に、伊豆溫泉湧起したれば、之を走湯權現と云ひ、熱海の焦熱地獄を鎭め、遂に日金峰上に一丈の地藏となりし話も、長篇にして、現未の二世に交通し好んで緣起、由來を說けるなど、亦幾分謠曲的の性質を帶びしものなり。此後地藏菩薩に關したる文學には、文

實昭の地藏抄

地藏緣起繪卷等の系統

親鸞の三帖和讃

日蓮の諸作と新池御書の文

明頃(二一三五頃)日嚴院實昭の諸地藏文學を抄出したる地藏抄(一卷)あり。攝受、折伏二門の靈驗を說き、山伏の行體を說明し、神佛混淆的の本迹論を以て結びたり。其國文脈に同化したる漢語、漢文の形式及び訓法は、一種の特色を有するを見る。地藏感應傳(二卷)地藏祕記(一卷)なども之に續きで出でぬ。繪卷にも此間に慶恩、光嚴帝などの地藏緣起繪卷など次々に頻りに出でたり。此風江戸時代に入りても、貞享四年(二六四三)に淨慧の地藏菩薩利生記(六卷)元祿四年に地藏利益集(五卷)あり。利益集には流暢なる國文を以て、壬生等の地藏話九條を擧げ、其他各地の靈驗譚いと多し。其他延命地藏和談鈔、十王讃嘆抄、地藏和讃諺註など續々現はれたり。

寶治二年(一九〇八)より正嘉二年(一九八)に至る間は、親鸞の三帖和讃の成りし時期と云はるゝ頃にして、淨土往生文類聚鈔(建長七、一九一五)等も出でぬ。彼の悲親述懷和讃卅三首の成れるは、正嘉二年九月廿四日の事にして親鸞正に八十六歲なりき。正嘉二年は實に後深草帝の御宇、關白兼平、將軍宗尊親王、執權連署長時、政村の時にして、日蓮の新宗を呼號してより五年後、普寧の來朝の二年前、彼の入寂の四年前の事なり。其前年には上宮太子御記も成れり。三寶繪との關係大なり。(西本願寺藏本、橋川氏の研究あり。)日蓮作のには、立正安國論(文應元、一九二〇)開目鈔(元一九三二)撰時鈔(上下、建治元、一九三五)、報恩鈔(上下、建治三、一九三七)、兄弟鈔(文永十二、一九三五)及び多數の消息文など、佛敎文學系統の第一小系中にありて有數のものなり。開目鈔、報恩鈔などは、安國論の漢文直譯的なるを脫して、或は口語を交へ、或は候體を用ゐて、自在に活機を捕へ、以て前代の平假名文と異る一種の精彩ある平假名交文をなせり。殊に新池御書に至りては理氣切烈、一種の舒情と調節とに富める好個の佛敎文學なり。蓋し近世和漢混淆文の發達史上、一大勢力を及せしものならん。

住信の私聚百因緣集と其說話及び文學

偖三帖和讃の成りし正嘉元年には、愚勸住信の私聚百因緣集(片假名交、九卷)出でゝ、寶物集以後に今昔直系の佛敎文學系統を形ちつくれり。序文によるに、住信には先に經論の衆文を聚めたる百法要文の著あり、後更に梵、漢、和の往生因緣の事傳を輯めて、以て愚夫愚婦歸信の要を示さんとて此書を著はせるものなり。然れども住信の傳諸書何等の記載なし。跋文によれば、四十八歲にして彌陀本願の敎によりしと云ひ、常陸に於て集記すと見えたり。今親鸞の廿四輩の隨一なる性信(文治三、建治元)の常陸の鹿島に生れ、下總報恩寺に住したる事あれば、或は住信は性信の誤傳ならざるかと覺ゆ。殊に親鸞の愚禿の名に對して愚勸と云へるなどもその疑を强からしむ。暫く記して學者の是訂を俟つ。其組織は今昔物語の三國分說の體に同じく、先づ卷一より卷四迄は天竺篇にして、或は釋迦成道の話、竹取物語に酷似した

書紀建國譚との關係

る善財女の話、父戀し兒戀しの石童話を脚色したるが如き話譚、男女少年の生贄を求むる黒蛇の話、貧女の一燈話、十大王本迹の事などあり。卷五、六は唐土篇にして、佛法傳來の話より初めて、孝養を以て得道善報の最上の動機としたるなど、支那佛敎の特質を示していと趣深し。卷七、卷八、卷九は、共に和朝篇にして、その建國諸譚は、國初空中有レ物形如二蘆芽一と云ひ、天照大神は伊勢大神宮なりと云ひ、世中所有衆皆此御神末也と云へるなど、殆んど書紀の神代卷の記事に符合したるも見つべし。（因みに、當時は卜部兼賢の續日本紀の出でし頃にして、大中臣定世の大須本古事記書寫の少しく前に當れり。）且著者が蘆芽の註に、此義倶舍等似二器界始一と云へるは、集の著者の佛敎純一主義と著るしく相違するものから、猶兩部習合神道の思想に傾けるなど注意すべき點を含めり。是より佛敎傳來の事を叙するに、天台の傳敎、眞言の弘法を序で、次に聖德太子の淨土宗を弘められし事を述べ、慈覺、傳敎等の記樣は中にも詳密を極めたり。但し聖德太子、行基、慈惠等の事蹟にては、明かに往生極樂記等を引用したる所あり。著者が圓頓一乘の台宗を先づ叙べたるは、今昔の著者より一層宗派的態度を示したるものにして、『日本一州多歸二圓宗一、五畿七道、併一乘盛云々、凡先德古今多、祖師諸敎不レ少、雖レ然諸師德行皆限二我宗流一ナリ難レ及二自餘一、然慈覺御相傳、大師御遺跡、自門他門、自宗他宗、更無二背事一、又經二年月一彌繁昌スル者也云々』など、記せり。但し西方を念願して臨命終に彌陀を感ずべしと云ひ、『天台等諸宗ノ高祖達、多終歸二淨土一如レ常』とて淨土敎門の信仰を鼓吹したる樣も見えたり。斯く當時の文學にては、等しく佛敎文學と云ふ間にも、野守鏡の如き禪宗を宗とするもあれば、此集の如く台宗を主とせしもありて一樣にはあらず。然れども念佛淨土の敎を併せ說けるは皆同樣にして當時の宗敎界の禪念と云ひ台念と云ひ密念と云ひて、一方日蓮宗に對せし樣を窺ふに足るなり。其の他得一大師奥州より上りて、傳敎と宗論をなす事、役行者、弘法、傳敎以下諸僧の權化の事を力說し、惠心、永觀の詠樂の事を述べ、白河院の人、唐の五祖に對して惠仁、永觀、法然を日本の三祖と呼びしと云ひ、大原龍禪寺に法然大宗論の話を叙し、最後に俗人の事の中、筑紫の聖が十二三の女兒に別るゝ石童丸話に似たる物語など記したり。集の行文は主として漢文的にして、其片假名の用法は、今昔物語集に比して、一層少く、用字法、語彙も、亦甚奇なり。例へば、

當時の佛敎文學と宗敎界の反映

『春過夏闌朝花姿今幾カアラン萬乘ノ仰ル崇稍保難、秋暮冬來夕露命無程モ四海ノ珍敬難消ナンコトヲ恐』、『白王言ニ申サク』、『少オボロケリ』、『想像オモイヤルコソ哀ナレ流石ニ岩木ヲ不結給御意ナレトモ』（イ、ヒ誤）『不友サビシキニ』、『劫數シュ』『有城アルミヤコ（或ワウシヤク）』（誤）『往昔ワウシヤク』『萬人バン』『從母親ヨリ母ニ方ノイトコ』（誤）『塵吐キトロカリハライテ』『蘇苅ハライテ』『生々世々シヤウ〳〵セ』『成身々シン〳〵（出産の事）

『遠近』『蚓蚊籠學文シタリ』『蠶』『山伏』『友』（妻に云ふ）『鞨居タリ』（井の談）『ナンド』『和尚』『故』『渦仰』『金丸』『竭焉』『牢物』『女子』『義士』『僞語』『目出』等の如し。

又今昔物語集卷十二なる增賀傳に出でし『美豆波左須』の歌を『三輪指』と記し、同卷十四なる『神奈比寺』を『神奈井寺』と記したるなど、既に發音、訓法、假名遣に相違と誤謬と發はれしものいと多し。其文飾上に於ける一種の漢文脈は、吾妻鏡の記體に酷似したり。加之、駢對華麗なる句調と、哀誦詠歎に充ちし筆致とは、寶物集又は平家物語の文章に最も近く、平語、盛衰記の文學が桑門の裡に薫釀せられて、佛敎文學より派生し來れる眞相を、極めて鮮明に反映したり。中村富平の辨疑書目には、續百因緣集（十冊）の名を擧げたれば、尙後人の稿を次げるも有りしと見ゆ。

無住の沙石集と雜談集等

當時東方に日蓮の崛起するありて、特色多き一流の文學を揮ひたりしが、濟門の無住法師一圓は、尾勢の間にありて沙石集（十卷、片假名交）、雜談集（五卷、片假名交、嘉元三、一九六五）、妻鏡（一卷、平假名交、一九三〇頃）、聖財集（三卷）、念佛諸經要集（一卷）等の著を成しぬ。沙石集は自ら求ゝ金集ゝ沙採、覔ゝ玉拾ゝ石瑩の意に因みて名けしと云ひ、其序は漢文的なれども、本文は和文脈を主とせり。事書體にして『是チ思フニ』として評語を添へたること、今昔物語集に同じきもあり。辨疑書目には新沙石集（一名三國發心集、五卷）の名を傳へたり。雜談集も事書の下に、彙類的に和漢の事例をあげ、前後に批評など加へたる所、一層說敎の目的に近ける作なり。妻鏡は、比較的、彼の初期の作にして、初の程は平假名交の長き詩賦的對句脈を以て行りたれども、終りは漢臭なき流暢の文藻を示したり。釋迦如來、聖德太子の傳を初め、因果の理を說きて、後鳥羽院隱岐行幸の事など評したり。『是卽ち愚なる心の一筋を先として、玉も藻屑も分つ方を知らず、後人の嘲を顧みず、浮べるに從つて何となき水莖のすさみ、定めなき浮草の言の葉を書集めて甲斐なかるべけれども是を身に從へて心有し人、道心者に見すべければ、名を妻鏡と云ふなるべし。』とは著者の述懷を示したる筆致の一例なり。同じ頃小川僧正、承證の三國名匠略傳（平假名交、一卷、文永十一、一九三四）は天竺五人、震旦十七人、日本三十六人の傳歷を、年次に依りて叙べしものにして、日本部は傳敎、弘法より始め、次に諸藝、醫藥の事など記したり。都率僧都の『鳥の音も死ぬる時には悲しとや』の詠以下數行は片假名交り文なるが、書寫の誤の混じたるものなるべし。又弘安の頃（一九四〇）には如信の編めりと云ふ歎異鈔、親鸞の聖敎の義を祖述したり。平假名交り條書にして、中に候體の柔和なる文脈もあれども、大體に於て議論文の新文體を成せるものなり。雜談集の出でしより四年前なる正安三年（一九六一）には覺如（宗昭）の拾遺古德傳（平假名交、九卷）有

如信の歎異鈔
覺如の拾遺古德傳

名なり。黒谷源空上人の繪詞にして、平家時代より鎌倉時代初頭にかけて、その時俗見るが如し。前編にも述べしが如く、遊君の今樣、念佛の風など尤も著しく、駢儷的の對句と濃かなる和讃的の諧調とに充ちたり。彼は又親鸞の繪傳をも著はしたり。法然傳にて名高きは德治の初(一九六六)より舜昌の法然上人行狀畫圖出でたり。後伏見上皇の勅旨に出でたれば一に勅修御傳と言ふ。四十八卷にして漢文に和文脈を交へし平假名文なり。此繪卷の類も次々に多く出でぬ。當時鎭西派の向阿(證賢)が綴れる本願鈔(三卷、建武四、一九九七)、父子相迎(二卷、曆應三、二〇〇)、西要鈔(三卷、康永二、二〇〇三)は所謂三部假名抄の目ある眞宗の法要にして、兼て一種の流麗なる佛教文學的作品なり。

法然勅修御傳と向阿の三部假名鈔

延慶(一九七〇頃)の交基忠父子の作と云へる春日權現驗記(廿卷)には、狛行光地獄見物の狀など甚詳かに描かれたり。長隆筆と言へる釋教歌仙一名詞林言葉集(一卷)は其前に出でたるべし。平語の延慶本も此時に出でたり。元享二年(一九八二)は師練が有名なる元享釋書を上りたる年なり。此書は推古朝以來七百年間に涉り、僧家傳記の金聲玉振とも云ふべきものにして、內容上法華驗記、日本往生極樂記等に出でしもの甚多けれども、其組織と筆致とは全く唐宋の高僧傳に擬して、純然たる漢文を以て記したる所、專ら歷史考證を主としたれば第一系に屬せしむべし。

春日權現驗記と詞林言葉集

平家延慶本

師練の元享釋書と今昔との關係

凝然の八宗綱要三國佛法傳通緣起(應長元、一九七一)など、同じく、國文學の方面よりは多く注意すべきものを有せず。然れども此書今昔物語集の說話殊に傳記を採れることは最も多し。其點に於て集の系統たる第二小系の作品に近し。其記載も集のものと多く一致したれども、時に卷十三、第三十六話の源兼澄を藤原とせしが如き相違も見えたり。秋田の人瀧祖寬生の釋書蒙求(三卷、延寶元、一六七三)はこの書を鈔出して蒙求的に對句の取題を工夫したるものなり。又徒然草の筆者吉田兼好(二〇〇頃)に往生傳(一卷)の著ありし事、蓮門類聚經籍錄に見えたり。最須敬重繪詞(十二卷)は乘專が文和元年(一三八〇)に往生要集など見て描けるもの、慈俊の記と云へる慕歸繪詞(十卷)も、應安元年(一三八八)存覺の奧書ありて漢文對句的の筆致は、軍記物語の文脈と甚だ相似たり。保元より曆應に至る史實を詳記せる保曆間記(三卷、片假名交)も此頃徒然草と前後して出でたるものにして、其中には平家物語に似たる佛教的史觀流れたり。次で出でたる叡岳要記(二卷、漢文、二〇〇頃)は主として叡山の供養の歷史を記したるものにして最近尊氏の名なども見えたり。當時の寺院の供養、音樂、諷誦、講式の樣など見るには、甚だ宜しきものなれども、直接文學系統の產物としては値少なし。この頃出でし經旨和歌は文和四年(一三五〇)の作にして、一に夢中和歌と名け、南禪寺の永禪の序あり、將軍尊氏、夢窓等の法華

最須敬重繪詞と慕歸繪詞、保曆間記

經旨和歌と梅松論の序

五山文學の詩文、法語、抄物

玄陳の三國傳記と其說話

經及び金剛經の意趣を詠ぜしものなり。又史書の梅松論（三卷、片假名交）は、序文の中に、大鏡の脚色を踏襲したること寶物集に似たり。先づ二月廿五日、北野の神宮寺毘沙門堂の參籠に、人々老法師より元弘亂を始めとして建武の爭亂を聞ける趣向なるが、卷末には、夢窓國師の談義を引きて尊氏兄弟を讃め、その天龍寺造營の功德を聖德太子の四十九寺、聖武帝の東大寺建立になぞらへたるなど、足利昵近の僧徒の筆巧なるべし。筆致は平淡流暢ながら佛教文學の第三小系の作などに入るべきにや。反之同じ觀應の頃、釋宗久の筆になれる都のつとなどは前期の海道記等に倣へるものなり。かくて一代の文敎は、五山緇徒の手中に委せられたれば、所謂五山文學の名に於て、夥しき詩文學、抄物、禪門法語など、茲にてのみは盛んに出でぬ。

兩朝合一の翌々年、應永の初（二〇五四）には、沙彌玄陳の三國傳記（十三卷、片假名交）成りぬ。著者については、諸書玄棟とあれども、何等見る所なし。當時玄陳なる僧あれば、恐らくは是れならん。十卷のもあれども、國書解題に素十二卷の物なりしと云へるは眞なるべし。但缺卷は四、五にあらずして卷十一などならん。倭版書籍考（元祿一五）卷四に『三國傳記、十二、應永中、義滿ノ時、沙門玄陳、倭字ニテ書ク』（枚二二）とあり。序文は又大鏡などの工夫に倣ひて天竺二、震旦、本朝の三國圓通士、清水寺に通夜して物語らんと、先づ一番の天竺の話より、始むる趣向なり。乃ち卷一は釋迦如來、八相成道の話なるが、中に和歌を入れ、又狂歌、落首など頻りにあしらへり。蒐玖波集出でゝより、卅餘年當時如何に狂歌俳歌の趣味の盛なりしかを想はしむ。又文中に和云、梵曰、漢言などゝて出典あるを示したるも多し。卷二の信濃國遁世者往生事の話は百因緣集の肥前僧妻爲魔事に同じ說話なり。卷三には豫州神母の話、嗔恚の僧大蛇となる男、道成寺の話、大江景宗の話などあり。景宗は堀川院の時の殿上人なるが、女を戀ひ、伯瀨に百日祈り籠りて之を得んとす。女の難題にろ文字を履冠に置きて戀の歌をよみ給へと云ふに、困じつゝ尙觀音に祈るに、遂に、寬治二年二月廿九日の午時、虹梁より薄樣に『轆轤引く誓の絲の兎に角に、蜘蛛手に物を思ふこの頃』と記したるを哺へたる雞落ちたれば、是を女に示したりと云ふ物語なり。女を戀ひて初瀨觀音に祈り、女の難題を佛の助により て解き、その歌がろ音の沓冠歌なりしなど、何となくお伽草紙文學中のものなるやを疑はしむ。男の大蛇となりし筋も近世の一心二河白道の淸玄話に脚色せられぬ。卷五唐惠心話は、我惠心僧都話に同じ。或はその傳話の逆流したるにはあらざるか。石山寺の瘂女の話は今昔物語に出でたり。試に其中なる『何ニトテサノミ口ナシノ、コハ誰カ科トカコタレテ、心內ニ動テ涙

三國傳記の文學的性質

御伽草紙及び近世文學との接近

外ニ顯ハレケレハ、男モハヤ心得テ、人ハ答ヘヌ眠言ヲ、マツマデ我ハ岩躑躅、云ハネバコソアレ惡シサノ、替ル心ハナケレドモ、秋モハテヌニ萱サスシテ、カレカレニ社ナリニケレ、』など云へる文飾を見よ。其七五調の聯ねと云ひ、懸詞の用法と云ひ、何ぞ室町時代のお伽草紙、又は江戸時代の淨瑠璃文、馬琴の小說草雙紙等に酷似したるや。假令素朴的なりとは云へ、斯る舒情的行文の間に、叙事を交へ叙景を加へて、道行を叙する趣に至りては、東關紀行、海道記、源平盛衰記、太平記など近世期の紀行文學と脈絡相通ずるものあるを見るべし。加之全文の哀寂なる聲調は、所謂戰記文學の示す所と極めて相近く、又男女二人の相逢ふに至る迄の事情、夫婦となりて福祿の生涯に入る事など、集になき脚色は痛く後世のお伽草紙、或は寧ろ讀本などの世界を想起せしむべし。されば三國傳記の文學は、或は修辭上に於て、或は語彙上に於て、或は說話上に於て、或は小說的構造に於て、實に豐富なる歷史的意義を含めるものにして、其の文學研究者に與ふる趣味は極めて深し。先にも屢〻云へるが如く、佛敎的系統の文學が、國文學の幾多の系流と相卽密邇の關係を有すること、玆に到つて稍明かに讀者の首肯する所ならん。又信州更級郡白介翁の話は、新長谷寺の緣起なると共に、五萬長者の話なるは長者傳說の喜ばれたる當時の文學の面影を示したり。卷六には飛行上人の事、西行法師の人麿に逢へる話などあり。人麿に逢ふ話にては、趣味色調著しく謠曲文學の世界に接近したり。播磨路の道行より、人麿の古塚の上に宿りて、亡靈と和歌を詠む條に、『望無窮水接天色看不盡、山映夕陽、谷深シテ樵夫ノ無友モ野幽ニシテ牧童ノ稀笛モ女郎花夕露ニ泣キ鹿鳴草ハ野風ニ吹レタリ……村一ト村ノカケニ尖頭ノ柴ノ戸アリ内ニ白髮タル老翁一人坐シテ夕ノ月ニ嘯ケリ……草ノ蘆草枕苔ノ衣苔筵旅寢ノ殊ニ物哀ニテ心ヲ傷シメタル折柄……山里ハ(の歌の唱和)……朝人ニ問フニ人家ナシ、松原ハ人丸ノ墓所ナリトモ云傳ヘタリトゾサレハ彼老人ハ人丸ニテチハシケルニヤ……』などあるは、如何に趣味深き修辭ならずや。或は對聯の句法を以て、或は和歌物語の修辭を應用し、或は頭韻法を用ふるなど、謠曲の詞章に似たること、地藏靈驗記の文より一層甚だし。卷七延昌の物語にては『二トセ足ラヌタラチネノ親ノ諫ノ梓弓心强サニ怨メシクテ……我古鄕ノ人ノ行末、越ノ白山知ネ共雪ヲ戴ク老カ身モ今迄爰ニ木ノ目坂上ルモ下ルモ還ル山若シヤ我子ニ近江方湖水遙ニ見渡シツ、比叡坂本ニツキニケリ』などありて、太平記東下りの道行文に似て、更に一層後世の淨瑠璃文の聯ねの修辭法に髣髴せり。又山陰中納言、攝津惣持寺建立話にては、長谷寺觀音利生と淨土往生との思想を混和せしめたり。近世期の中葉に當りても、一面地藏信仰は一般に弘布したれども、尙一面には當時の物語文學に見ゆるが如く、觀音信仰

梓弓の歌と太平記

の風、甚盛なりし樣を想ふべし。武州入間川洪水譚にては、一條革堂に來りし女、過去帳に我名を記るし、帳の裏に、

梓弓ハツルベシトハ思ハネト無人數ニカネテ入カナ

と詠みたりと云へるは、正行が如意輪堂の扉に『返らじと』の歌書きしとの太平記卷廿二の傳說に似たるのみならず、其歌の姿も痛く似通へるは怪しき事共なり。三國傳記の成れる應永は正平より四十餘年後にして、恰かも太平記の出でし頃に當りたれば、此二歌の間に何等かの關係ありと覺し。此梓弓を詠める歌吉野拾遺にも多く見えたるは、元來當時の流行句なりしならん。又卷九には比丘比丘女の童戲は、惠心が地藏法樂のため、比丘、比丘尼等云ひて、別ち取りしに因ると說き、二人の念佛者が八幡に甚深の法門を祈る話は、念佛宗義の獨り貴むべきを示せる新時代の寓話なり。新宗敎勃興につれて宗論の類が盛んに文學に入れる樣は、平語、謠曲、狂言等に著るしく見ゆる所なれども、之等の說話の上にも亦其性質を認むるを得べし。叡山の玉泉坊が鬼に成る話は稍雨月物語青頭巾の趣向に似たり。卷十二、小野小町盛衰事に就いては、近江玉造莊の少女なりと云ひ、藝州の僧幸熊丸に逢へる話は、かの牛若丸話に近きものなり。又最後に富士山の事を記し、竹取物語に出でし赫屋姫の

百因緣集と三國傳記との文學上の比較

東寺の三寶繪

蓮如の御文章寺門傳記、同補錄等

話を語り、更に三國一の山、大日如來垂迹の地なりなど云へり。こは傳說としては一個の說明說話なるが、三國傳來の佛法に結び附け、本地垂迹の所なりとの思想を以て天地交通不思議の靈域となせるは、平安時代の初期の竹取物語、富士山記等に淵源したる思想なり。殊に近世時代に入りては三國一の名山として佛法的に種々の說話を加ふること行はれたるなり。江戸時代に入りても、馬琴の富士淺間三國一夜物語等に此流の餘を止めたり。今三國傳記の文學を、前記の百因緣集のそれと較ぶる時は、記は大に文學的にして、集は經文的なり。記は漢文を骨子として對句に富める文體なれども、集は智識的、說敎的の句法を主としたるなどの相違あり。但し今昔物語集の通俗味に比すれば、記の方尙少しく佛學的に傾きたるべし。東寺の三寶繪も此頃の筆なりと見ゆ。（觀智院本、三册は此繪と別なるべし。）

かくて應永廿一年（一三〇七四）に良鎭上人の囑により、寂濟の記せる融通念佛緣起繪詞（卷三）は、永春行季、行廣等の筆にして、大原來迎院の密畫に地獄の凄絕なる描寫を收めたり。こは良鎭が當時六十餘州、巡歷說敎の資に供せしものなりと云ふ。時恰も眞宗の蓮如上人兼壽生れて、文明延德の頃（一四八九—一五〇〇）には、片假字交りの平明流暢なる正信偈大意（一卷）御文章（五帖）等の敎說文學を著はせり。御文章は文明三年彼の五十六歲の時より、明應七年八十四歲に到る廿八

年間の敎說を綴れるものにして、文明五年開板したりと云ふは素より其一部に過ぎず。親鸞の淨土類文鈔、日蓮の報恩鈔以來假名を交へし勸化敎說の文學は益々近代文章の發達を促したり。寺門傳記（九冊、第二缺）は又永享の頃（二一〇頃）成りしと見ゆ。寬平より保元に至る園城寺の僧傳なれども、尊氏の事、應永中の事なども見え、又通憲の智證大師和讚を草せし事も見えたり。志晃の寺門記補錄（廿卷）にも、成尋入宋の時、智證大師渡宋の歌なる『法の船さして行く身そもろ〳〵の神も佛も我をみそなへ』を本歌として、

白浪遠分てぞ渡る法の船指しけん人の跡を尋ねて

と詠ひし事、義光を初め源氏の武將が三井の新羅社を尊崇せしこと、觀慶の大神和讚、前記の通憲の智證の和讚、畫讚、又卅三所巡禮の事をのべて日數百五十日を要し、各願主ありとて其名を列記したるなど、佛敎に關する幾多の挿話に充ちたり。此種の作には尙文明十五年（四三）に尊通の三井續燈記（十卷）あり。平治より文明に至る間を叙して寺門傳記に繼ぎたるものなれども、文學としては幾何も見るべきなし。此前々年には狩野洞雲筆なる日光寂光寺等の釘拔念佛緣起繪卷出でゝ、其後にも類作多し。文正二年（二一七）の高野の宥範の供養文は、記法の上より今昔の系を引けるものなり。又永正三年（六六）宣秀寫なる勸修寺緣起は

釘拔念佛緣起と宥範の供養文

新內侍の著にして平假名交り體なるが中に今昔譚の流傳と思はるゝものあり。翌年光信の同繪卷も現はれぬ。此頃又地藏菩薩靈驗記（卷四、五、六）と云へる物あり。高野山寶龜院任鏤の永正九年（二一）に記せしものにして、續群書類從の同本とは稍似たれども別系の作なり。永觀の話、嘉元に失せし忍性の物語など見ゆ。此中卷四のみは良觀に就いて一卷の小說的記事を綴りて文學的なり。一に吾妻鏡と呼べり。卷五と卷六とは之に反して二三十宛の話譚を片假名交り、事書體に記し、文體稍今昔に似たる所あり。懸詞などの修辭法も見えたり。一帶に奧州話多し。前期に出でし實叡の地藏靈驗記に次げるものならん。奧書に享祿五年（二一九二）快元の記と言へる八幡愚童訓（上）も當時のものなるが、こは三韓征伐、蒙古來等の史譚を顯密神佛一體の見地より甚しく誇張的に小說化して記したり。快元は鶴岡八幡宮の社僧なり。この後江戶時代に入りても了譽の日本往生傳（二）、驪驢斯餘（室町時代。のもの歟。）、了智の繒白往生傳（元錄）、高野山往生傳、獨湛の扶桑寄歸往生傳（二）、師蠻の本朝高僧傳（七十五卷、元錄十五）、敬雄の天台霞標（二十八卷、明和八）を初め、弄幻子の三國因緣佛神感應錄（十五卷、享永七）、釋了意の法林樵談（十卷、貞享三）、泊如の東國高僧傳（四貞享）、光譽の新撰往生傳（八卷、寬政五）など、近世に到りて益〻完備したる傳紀の書出でたれども、文學史上には資料として有用なる外、多くは第一小系以上に實用の記錄とな

任鏤の地藏菩薩靈驗記

新內侍の勸修寺緣起と光信の同繪卷、八幡愚童訓

江戶時代の佛敎緣起文學

近世の完成文學に於ける佛教味
戰記文學と擬古戀愛物語

り畢てたれば、格別の注意を拂ふを要せざるべし。

茲に翻りて鎌倉時代より室町時代に渉れる完成文學の諸方面を見るに、先づ第三小系なる平家物語源平盛衰記等の戰記文學が、我佛教的系統の作品として、又佛教的系統文學と交渉して、如何なる發達を遂げたるかは略、前述したる所によりて明かならんが、更に第四小系の諸作としては、岩清水物語、初瀬物語、幻夢物語以下、多數の擬古戀愛物語も、其因緣、宿命思想を骨子とし、佛寺、佛尊の靈驗を脚色したる點に於て、著るしく佛教味を發揮したるものなり。語り物にては、宴曲の冬、山、心、優曇花、閑居釋教(宴曲集)、熊野參詣、善光寺修行(宴曲抄)、無常、法華、釋教、淨土宗(眞曲抄)、曹洞宗(拾遺集)など佛教味多く、幸若の舞の詞に、滿仲、築島などは、或は出家譚を主とし、或は本地譚を主としたるもの少からず。又謠曲文學にては、其趣味の根柢が、佛法の應報、輪廻、化生、來世の思想に因ること最も大なるを以て、殆んど凡べてが、この系統の作物なりと云ふを得れども就中、求塚、滿仲、舍利、羽衣、阿漕、善知鳥、砧、女郎花、檜垣、泰山府君、大會、一角仙人、高野物狂、護法、道成寺、誓願寺、大佛供養、飛雲、野守鏡、鵜飼、絃上、雨月、卒塔婆小町、江口、安達原、姨捨、春日龍神、葛城天狗、善界、源氏供養、上宮太子、歌占、白髭、高雄、經山寺、舞車、玉取、初瀬六代、身延更級、第六天、當麻、蟻通、愛宕

宴曲と舞の詞と謠曲

狂言記と御伽草紙等

灌頂卷、五翠殿繪卷等の繪卷の影響

空也、九世界、殺生石、西國下、祇王、墨染櫻、乙平、枕慈童、菊慈童、卒塔婆流、北山、弱法師、白路、明靜、攝待、山姥、海士、鞍馬天狗、俊寛等、末百番の伊呂波、餓鬼、華自然居士、江島童子、淨藏貴所、辛崎、墨染櫻、成經、泣鬼、湛海、鬼一、現世檜垣、現世善知鳥、御菩薩、多手利竈馬、西岸居士、朱雀門、業平、六角堂、人穴、孟宗、慈覺大師、佛櫻等、新曲の十四經、木引善光寺、現在道成寺等及寛政七年宗羅の道しるべ中の三十七曲など悉く佛教的要素の著しき物なり。

狂言記にても宗論、佛師、六地藏、笠の下、布施ない、双六僧、枕物狂、福渡、樂阿彌、八尾地藏、鐘の音など見えて、室町時代の民間歌謠集なる閑吟集に於てすら、其の戀愛生活の歌唱と竝んで、大いなる佛教無常の調あるを見出し得べし。更にお伽草紙中にても、木幡狐、佛鬼軍、物臭太郎、梵天國、毘沙門本地、貴船の本地、釋迦の本地、嚴島本地、小町草紙硯破、青葉笛物語、鴉鷺合戰など其例證少からず。此間にありて、住吉慶恩(建長、一九一五頃)に、灌頂卷、小柴垣草紙、地藏尊緣起、當麻曼荼羅緣起、春日鹿曼陀羅の作ありと傳へ、土佐光信(大永五、歿二一八五)に石山緣起、清水寺緣起、十二類卷物、福富草紙、地藏堂草紙等の作ありしと云ふが如く、鎌倉、室町時代春日、土佐、住吉諸家の作品に、往生緣起の佛教的作品多きは云ふを俟たず。かの天狗草紙は鎌倉中期の作なるべく、五翠殿繪卷は室町初頭のものならんが、古淨瑠璃の五翠殿、

近松の本朝五翠殿(正德元)の粉本なるが如く、又お伽草紙の梵天國とも稍〻似たり。筋は美容限なきけす女御が、九十九人の后に嫉まれて乾坤城に首斬られんとせしを、念佛の爲に胎中の皇子の出生迄助かりし話にして、全篇印度經典の直譯的なるを免れざりしが、それに伴ひて佛敎的說話味は甚濃かなり。

江戸啓蒙時代の佛敎文學と第一、第二小系

此の如き佛敎系統文學界の情勢を以て、世はいつしか安土桃山時代を經て江戸時代に入りぬれば、所謂啓蒙時代の文學は、其各分派を擧げて佛敎文學の色彩最も著しきを見たり。先づ此時代に於ける第一、第二小系の說話、及び往生緣起的の佛敎文學には、前に記したる外、勇大の扶桑往生傳(二卷元和)、如幻の近世往生傳(一卷)、洞空の女人往生草(一卷)、極樂物語(寬文八)、清原良業の和論語(寬文九、十卷)、鈴木正三の念佛双紙、盲安杖、叢軒露宿居士の近代見聞善惡業報因緣集(五册、天明六)、戒殺物語(寬文四)、珂然の扶桑往生全傳(三卷正德)、了意の勸化三國往生傳(六卷)、敬知の和漢辨會錄(享保一六、六卷)、地獄說(元文二漢文)、專念往生傳(六卷)、玄光の拾遺三寶感應傳(十卷延寶四)、水鏡二人比丘尼(一休說あり)、了慧の三國往生傳等を擧ぐ可く次で第三小系に屬する假名草紙には七人比丘尼(二卷、寶永十二)、清水物語(二卷、寬永十五)、爲春のあだ物語(三卷、寬永十七)、大佛物語(一卷、寬永廿一)、嚴島の本地(三卷、明暦二)、恨之介(二卷、明暦二)、地獄太平記(五卷、正德五)、角田川物語(三卷、明暦二)、一本菊(三卷)、鈴木正三の因果物語(三卷、寬文元)、

第三小系文學としての假名草紙

江戸期の繪詞文學

二人比丘尼(二卷、寬文四)、釋迦八相物語(十卷、寬文六)、三人法師(一卷)、飛田琴太の三國一大通本地(五卷天明)、壁前九年坊の君子威德富貴機(三卷、寬政十)、旅硯富士見西行、應賀の釋迦八相倭文庫(十六卷天保)などあり。又繪卷にも如慶の聖德太子傳、光起の天滿宮緣起、雪鼎の藥師寺緣起、法然上人傳等多し。其多くは臨幕の作なり。更に第四小系の文學、卽ち佛敎的要素の各種の文學に浸潤し影響したるものにては、社會生活の文學若くは戀愛生活の文學たる浮世草紙あるは無數の讀本の形質上には勿論、草雙紙、滑稽本、人情本、洒落本等に到るまで、或は濃く或は薄く或は深く或は淺く、微妙普遍の分布を示したる事言ふを須たず。是等廣大なる小說文學中に、各種の佛敎的要素の浸潤したる意義と性質とを述べんは尙他日の機に讓るべし。

第四小系文學としての浮世草紙、讀本等

同上淨瑠璃文學と脚本文學

一江戸時代に於ける國民的文藝の一大分野をなせる淨瑠璃文學及び脚本文學に於ても、說話味に於けるが如く、如上の佛敎的要素は或は地獄の形象として、或は諸佛の利生として、或は現未の佛罰として、或は庶民の人生觀として其中に表現せられたる作品甚だ多し。こは佛敎の文學上の影響が、主として宿命の一點に限られたる平安時代の歌物語文學と、稍其色彩を異にするものなれども、一般に佛敎的なる形式、信仰の當時の文學上の色調の一部分を構成したりし事は何人も否む能はざるべし。そは當時に於ける我國民生活の全般が神佛

平安時代の物語との影響比較

第四小系中の諸作品

混淆の形式の下に、少からず佛教的要素を以て彩られたる事實より見るも容易に諒解せらるゝ所ならん。淨瑠璃中延寶の土佐節、角太夫節、加賀節等に見ゆる、天親菩薩、傳教大師記、天王寺彼岸中日、四十八願記、女人往生記、大佛供養、淨藏貴所八坂塔、融通大念佛、法隆寺善光寺等の諸開帳物、佛舍利、粟島御緣起、祕密護摩、誓願寺、女人卽身成佛記、念佛往生記、五百羅漢、三世二河白道、聖德太子傳記、祇園精舍、五大力菩薩、清水寺利生物語、中將姫曼陀羅三十三間堂棟由來、日蓮上人御難記、阿彌陀坊、源恕上人記、釋迦如來誕生會、多田院開帳等、又近松巢林子の達磨の本地、釋迦如來放生會、當麻中將姫、傾城二河白道、聖德太子繪傳記、大原問答青葉笛、善光寺御堂供養、百合若大臣野守鏡、蟬丸、傾城島原蛙合戰、用明天皇職人鑑、賀古教信七墓廻、又世話物にても、曾根崎心中、心中萬年草、お夏清十郎五十年忌歌念佛、傾城反魂香、双生隈田川、冥土の飛脚、天の網島、宵庚申、女殺油地獄、博多小女郎浪枕の長者經などを初めとし、文耕堂の將門冠合戰、信州姥捨山、大佛殿萬代礎、海音の殺生石、三井寺開帳、傾城無間鐘、奥州枕物語、小野小町都年玉、出雲等の合作せし菅原傳授手習鑑、小野道風青柳硯、並木宗輔の道成寺現在蛇鱗、苅萱桑門筑紫轢、本朝檀特山、日蓮記兒硯、攝攝國長柄人柱、近松半二の奥州安達原、常陸帶夜啼石、小夜中山鐘由來、山城國畜生塚、役行者大峰櫻、福内鬼外の靈驗宮戸川、神靈矢口渡など、及び松貫四等の吉野靜人目千本、馬琴の化競丑満鏡など寶暦より化政の後半期に入りて殆んど枚擧に遑無かるべし。是等の淨瑠璃は、多くは其名目上より見るも、一見佛教的要素の影響に成れるを知るを得べきが、素より其程度は單に名目的なるのみにはあらず。否、縱令是等の諸作中の戲曲的又は文學的動機の、他の人生生活の意味、心理に因るものなりとするも、假りに其作中より全然其等の佛教的要素を脫除せしめば、必ずや文學上に於て少くとも一半の骨子と背景と情味との消失するを覺ゆる程、時代的に廣汎なる影響を有したるなり。其趣は歌舞伎芝居の脚本に於ても同樣ならん。奈河清助の傾城筑紫轢、奈河龜助の競伊勢物語、鶴屋南北の墨田川花作所染、四天王產湯玉川、櫻田治助の御攝勸進帳及び壺坂靈驗記、苅萱道心筑紫轢、小野道風青柳硯、重扇助等の國訛嫩笈摺、花雷歌清水などを始め、淨瑠璃より轉化したるもの、及び其後の新作にても多數の曲目を占めたるべし。前例に依りて江戸時代の諸作を其影響の性質に因りて分類すれば、(一)直接影響關係あるもの、例、今昔庚申譚、因果物語、聖德太子繪傳記等、(二)第一小系程度のもの、例、緇白往生傳、天台霞標等、(三)第二小系程度のもの、例、極樂物語、三國往生傳等、(四)第三小系程度のもの、例、大佛物語、七人比丘尼等、(五)第四小系程度のもの、例、今昔二枚繪

江戸時代下半期の影響

第四小系中の脚本作品

近世期下降系統の文學と累積的、融和的、普遍的影響

草紙、菅原傳授手習鑑等、(六)繪卷のもの例、聖德太子傳、藥師寺緣起等の六系に分たるべし。

要するに今昔物語集の下降系統としての佛教系文學は、近世期の國民生活が、益〻宗教的に傾きて深刻なる信仰界の運動を經過したると、文學が益〻國民的の發達を遂げて多岐に趣き、且、最近に至りて新たに優勢なる生活描寫の二系の文學を派生したるとに因りて、所謂教義傳紀を主としたる第一小系に於ても、佛教的說話を中心としたる第二小系に於ても、更に完成文學中に佛教を加味したる第三小系に於ても、將た又當時の最も優勢なる國文學の系統中に、佛教要素の薰染したる第四小系に於ても、孰れも累積的、相關的、融和的の發達を遂ぐるを見たりき。故に其影響は又普遍的なりき。實に是等の佛教文學、若くは佛教要素が、各時代の文學上に出現したる量的、質的及び形的關係は、緊密、微妙に夫々の時代に於ける我等が祖先の生活其物を、さながらに指示したるかの觀あるは、何人にとりても最も深き興味を喚起する點ならん。是に因りて、所謂佛教文學の系統が、我文學史上、甚だ重大なる位置を占むるを認むる事を得べく又今昔物語集の如き、文學上の大作品の現出も之を特殊の側に於て觀すれば常にそれ自身に於て絕大なる因緣關係を有すると共に、之を歷史的なる普遍の法則に於て觀ずる時には、かの悠久なる人文發達の大波動中の一機體として極めて普通自然の任務を有するに過ぎざるを見るべし。

國生生活の表現としての佛教文學の量的質的形的關係

作品の特殊的因緣關係と普遍的一般任務

文學と國民生活の濾過池

されば今昔物語集に表現せられたる說話、佛教の二大要素は、其後世に及ぼしたる影響に於て、彼の如き廣汎旺盛なる勢力を發揮したりしかども、翻つて之を古今を一貫して歇ざる國民生活の大潮流中より通觀すれば、その要素の存在が單に時代の文化の濾過池たるに過ぎざるを識るなり。

今昔物語集の二主要素

第四節　國文學中佛教文學の一系を論ず

集の全文學史的位置、系譜、影響と系統批評の任務

前章に於ては上代より江戸時代に至る我文學に四流の大系統あることを叙べ、續いて本章の前節迄に於て、今昔物語集の主なる要素は、前記の四者中、說話、佛教の二系統に屬するものなることを說き、且その系統の一貫したる發達を、集以前と集以後とに別ちて記述したり。是卽ち今昔物語集が我が、全文學史上に占むべき位置と系譜と其影響とを說明したるものにして、初めに所謂一個の作品に對する系統批評 Die genealogische Kritik の任務は既に終結したるものなるべし。

然るに本節にて更に一種の佛教文學に就いてて論ぜんとするは、所謂佛教文學中に極め

て重要なる一系の佛教文學ありて、そは從來國文學の佛教的性質を攻究する場合にても、多くは閑却せられたるものあればなり。然らば所謂重要なる佛教文學の一系とは如何なるものなりや。

重要なる佛教文學中の一系

抑も佛教文學系統の中に四流の小系を認むるを便とすべき事は前章に於ても既に幾度か述べたる所なり。此彙類は單に、現下の理論上の考察の便宜にのみ依れるものにあらずして、本章の第二節及び第三節の第二項等にて試みし記載中の無數の佛教系統文學を通覽するも、自ら歸納的に到達し得べき所のものならん。今是に就いて少しく論證せんに、前述の記載に於ても、特に其の點に意を用ひて說明したりしが如く、所謂佛教文學系統の諸作品は教義、宗門の書なる純粹の經典より、佛教系統以外の國文學に到る遞次的經過中の產物にして、其宗教的性質と、文學的性質とを含有する程度に於て、所謂四系の佛教的國文學の成立を見たるなり。試に前者卽ち宗教的性質をR、後者卽ち文學的性質をLにて表はす時は、各小系の遞次的關係は次の如くなるべし。

佛教的國文學の遞次的關係表

第一小系　$R^1 \wedge L^1$
第二小系　$R^2 \wedge L^2$
第三小系　$R^3 \wedge L^3$
第四小系　無教義の文學　$R^4 \vee L^4$
$R^5 (O)$　L^5

右の中、從來佛教文學の攻究を試みし者の間に於ても、佛教家は主として經典に就きて其文學趣味を宣揚するの義に解するを常として、稀に第一小系の文學を談ずる事ありしのみ。國文家は之に反して、僅かに第三小系の文學に注目し、稀に第一小系の文學を語るも、其論ずる所、未だ國文學の全質と多く相關するに到らざる憾あるを常としたりき。是れ他なし、其の系統と影響との觀察に周匝を缺きしが爲に、佛教と云ふが如き精神的要素の文學に於ける發現を考察するに當つて常に大なる間隙を有したればなり。少くとも從來國文學の方面よりしたる研究と經典の方面よりしたる觀察とが、二者相助の聯絡を缺きたるは、職として之が中間項たる第二小系文學の閑却せられたるに由るものとすべし。今や本節に於て佛教文學系統中最も重要なる一系と云へるは、實に這第二小系佛教文學を意味せしに外ならざりき。第二小系の佛教文學系統の如何なるものなりやは、前記の表中にも明かなるが如く、之を教義宗門の書たる第一小系の作品に比すれば、其佛教的要素は、稍稀薄なるか、若くは直接の說教を目的とせざるものなり。然れどもそを一層文學的に又美的に表現せられたる第三小系の文學に比すれば、猶常に著しく宗教的傾向を帶ぶるものなり。又文學上の美的性質に到りては、第三小系の文學たる平家物語等に比して、稍簡粗蕪雜の傾きあるを免れ

從來研究の通弊

國文學の研究と第二小系文學の重要

第二小系文學の性質

ざれども、之を第一小系の諸作に比すれば、亦較〻進歩したる脚色上の工夫を有し、少くとも其述作の動機に於て、若干の文學的性質を含めるものなり。（淨土眞宗教典志等に此種のものを純宗門書中に記さゞるは、其文學的著述なるが為以てなるも如し。）

故に其文學としての全體の色調たるや、或は往生譚或は緣起譚或は傳記譚或は一般に佛尊佛法の靈驗譚などを內容として、歸信が人生生活に於て最も調和的、美的なる安住を得る所以なるを溫和に又通俗的に勸說し、因果宿世の人生觀を以て人事と運命とを觀ぜんとする創作的態度を以て一貫したるものたり。此類の文學作品の形式は、多くは片假名交りの和漢混淆文にして、一方に於て又著しく漢文學の影響を含める文體なり。第一小系中にありて、尤も第二小系に近き表白、願文、諷誦、講式の文學と、第三小系中なる和讃の類とが、第二小系の文學に對して常に密接なる關係を有するは、既に述べるたるが如し。今試みに我文學史上にかくの如き佛敎文學系統を設定せんが爲めに、奈良時代より江戶時代の初頭に至る間にて、先に第二節及び前項中に記載したる、佛敎的著作の發展的群より、上述の形質を有する主要なるものに就いて序列すれば、卽ち左の如き傳流の一道派々として時代の文學と交涉したるを見るならん。

第二小系の佛敎文學作品表

	觀音緣起
奈良時代	日本國現報善惡靈異記
(1454)……平安時代……	日本靈威錄
	三寶繪詞
	日本往生極樂記
	往生要集
	安養集
	續本朝往生傳
	後拾遺往生傳
	扶桑往生傳
	今昔物語集
	本朝新修往生傳
	寶物集
(1845)……鎌倉時代……	發心集
	後世物語
	地藏靈驗記
	私聚百因緣集
	雜談集、沙石集
(1994)京都時代……	拾遺古德傳
	三國傳記
	地藏菩薩靈驗記
(2263)江戶時代……	極樂物語
	勸化三國往生傳
	三國往生傳

平安、鎌倉、室町三時代と第二小系文學

乃ち第二小系文學の歷史的發達は、主として平安、鎌倉、室町の三時代に於てせり。此時期に於て這種の文學は佛敎の文學化する轉機となりて益〻發達し、佛敎要素は是等の文學を通して他の廣大なる一般文學上の作品中に瀰漫したるなり。但し佛敎要素の第三、第四小系文學中に浸潤するは、必ずしも常に第二小系の文學を通ずるものとは斷言し難し。所謂經典の弘布、流通より直接に來るものもあれども、佛敎的信仰が文學的の趣味に染潤せられて、特殊の佛敎文學的形式を組織的に得來るには、常に第二小系文學の釀育を被らざるを得ざりしなり。此點に於て第二小系文學の出現は、各時代に於ける一般的宗敎心のバロメー

第二小系佛敎文學の二重の意義

ター にして、兼て又佛教文學の傾向を豫知すべきバロメーターたりしものなり。佛教的の思想、情味、聲調及び種々の技巧、形式は、先づ一度び茲に鑄出せられて、あらゆる國文學の上に流布し行けば、そこに更に次の時代の第三小系文學乃至第四小系文學を成し、斯くして又此期に生れたる第二小系文學は新たなる佛教味を文學上に傳播する事に努めたるなり。

第二小系文學と、第三乃至第四小系文學とが、個々相關聯して因となり、果となり、絶えず一脈の佛教的要素を發揮したる樣は、譬へば因陀羅の珠の光の千萬無量數相反射し相映輝して止まざるも、之を大觀すれば恒に瑩然たる一個靈妙の大光明體たるが如き觀あるべし。

因陀羅網の比喩と時代的相違

光明體の色調を異にするは卽ち佛教の時代的相違を示す所以なり。是れ佛法の教は古くして千古に變らねども、時代と人との變遷を免れざれば、同じく第二小系の佛教文學と云ふも、漸次に其面目と趣味とを異にする事、猶恰も春風駘蕩一千年夫の古柳を吹いて歇まざるに、年々の緣絮は其色新たなるが如きものあるなり。

是を要するに佛教系統の文學中にて第二小系文學を認めつゝそを特別なる注意の下に究むるの要あるは、單り此小系に屬する國文學の發達を知り得る點に於てのみならず、實に佛教要素が第三、第四小系文學等の國文學上の廣大なる部面に活躍して影響を及ぼすに至れる經過と性質とを明かならしむるに當つても、先づ以つて缺くべからざる研究の部面なりと謂はざるべからず。

結語と研究の希望

各系統の一層精密なる限定、經典に出でたる佛教要素が第一小系より第四小系に渉りて分布、發達したる程度、關係、及び第二小系文學が國文學上に於ける佛教的影響の轉轍器として有する諸關係の細査等に到りては更に別に稿を更めて述ぶる機あるべし。

今昔物語集の新研究 終

今昔物語集の新研究索引

ア

アンカン……一一、五九
アイステル……一四
アーノルド……四
アナロジー……二六七、二七七、二八三
アナトール、フラシス……五
アンデルゼン……一五八
アレゴリー……四〇二
アラビヤン、ナイト……一五八、六二七
アリヤン思想……一七一、一七七、三七〇、四三〇
アイヌ話……三七八
R……六
阿輸迦王(阿育)……三五九、四九〇
阿育王経……一三七
阿彌陀和鑽……四四四、五一七、六〇七
阿含経……一九〇
阿彌陀経……四〇六、四一〇、四四四、四九〇
修羅……四六〇
阿渴陀藥……一七一、四〇八
阿難……四〇四、四〇六
阿雨夜の品定……二九二
銅の湯……二五二、四七〇
近江縣物語……一三七、六二〇、六二五
飛鳥時代……二三二、四二五
愛宕護山……二七七、四二五、四九四
朝倉物語……一九一、四七〇、五六九
朝題目夕念佛……三八
朝月物語……二三五
赤染衛門……八四、一一七
上絞主……三九六、五三〇
熱田明神……九五
敦光……一九一、三二〇、五六九
敦忠……六〇五、六三〇
敦行……三三六、五〇二
敦隆……五六五
粟津宮……三四一
東家……四九九
吾妻鏡……二六四
綱……三九八、五九一、六一四、六四六、六五七
朝忠……三四四
朝倉物語……三三六、五〇二、二八九、三二六、三九八

新井白石……六二二
在上……五一四
預法師……五〇六
あだ物語……六〇六
草刈話……三四一、三八七
奥州後三年記……四八八
奥州合戰繪……三九八、四八八
海部峯……四三八
海人刈藻……一一二、三二六
安齋叢書……三九
安養抄……六〇九
安養集……八八、九〇、一〇六〇九、六六九
安養尼……九〇、四三二、四九三
安義橋の鬼……二二〇、三八四
安達原……三九五
安達原鬼婆話……三八三
安積山物語……三八七
安積沼……五三四、五六七
安息園……四〇六
然……四一八
坂……三四〇
房……六三七
足……六二二
笠……五四四、五六五
話……三九三
戰……三九六、三九九
伊呂波字類抄……六〇二
伊曾保物語……六一九
休……六六〇
一條院……四一七
一條大路……二一九
一般研究……一九
一兎萬兎話……三七二
一欒手半……二七七
一角仙人……三七三、三九三
一九……六二五
一言芳談……六三四
一心二河白道……六五一
稲荷祭……三一五、四七七
石清水物語……六五八
石清水……二〇〇、四五四、四七〇、四七一
石清水不斷念佛緣起……四一六、六〇五
石清水祠官系圖……二〇四
石童丸話……三八五、三九七、六四四、六四五
石山寺……四二五、四四九
石山緣起……六五九
石川雅望……六二二、六二四
岩屋草紙……三二九、六一八
岩打つ波……三八一
院政時代……六二、六三、五七六、六三二、四八七、五四一
院源……四九九
市女笠……五四五、五六四
今は昔物語……六二六、六二六
今様……二〇五、五一九、五九三、六三〇
今……六四、三三五
今物語……六一六
今昔……二一九、三四〇、四三七
因果應報……一二四、一八三、四五七、五五七
因果物語……六六〇、六六三
因度羅……四〇二
因陀羅網……六七〇
犬人婚姻譚……三七七
犬著聞集……六二四、六二八
犬姫……三七七
犬頭糸……五〇四
犬山……一九一、二六九、四七〇、五六八
狗……三七七、三八二、四八三
狗神傳說……六二三
異國……四〇
異國的……二五九
異國識……二五五
異國熊……二五五
異國雲……四〇
異國大社……四七七、四八一
異國出雲……二〇五、五一九
異國宥範……六五六
異國井澤長秀……三七、四〇、四二、五四、五六
異國……三六二、三六
異國和泉式部……二一九、三四〇、三九四、四八八
異國池の尾……三一六、五〇九
異國益……五〇二
異國印南野……二四六
異國……四一三
異國威儀手印……四九六
異國出雲國造神賀詞……五一〇、五九九
異國出雲風土記……六二七
異國五卷の繪卷……五六二
異國的……六一四
異國嫌昔阿露雜談……六六〇
嚴島の本地……一八五
異常性……六
異時的……二五九
有……二五五
猪熊……四〇、四二、五四、五六
井澤長秀……

ウ

ウパニシャッド……二二八
ヴント……二四
ヴインデルバント……二四
右記……二二六、二三〇
右近馬場……三一七、三二七
右近少將……三二九
生土……二六八、四七六
浮世物語……六二一
浮世草紙……六二〇、六二七
歌物語……一〇三、一一五、一七五、一七七、二〇一、二四七、二六〇、二八二、二九七、三一八、三三一、三三七、三五五、三八六、四八七、五三六、五八九、五九六
宴の松原……五〇六
轉寢物語……三二九
産土神……四七六
運命小說……五二四
兎と月……三六九
姫……三九五
鶯……二三五、三二〇
雨月物語……三八五
宇治大納言物語……四一、七一、七三、八三、九六、一〇三、一〇七、一一〇、一一三、一一五、一二九、一七四、五八九、六〇二、六一八、六二三
宇治十帖……二八八、二九八、五〇三
宇治多院……四四〇
宇佐間答……四二五
宇佐八幡……四七六
宇治子……四二五
打出太刀……二四七、二六九、三〇四、五四四
宇治拾遺煎茶友……六二四、六二八
宇治拾遺物語考……五一、七四
宇治拾遺物語繪卷……七九、三九九
宇治物語……八〇、八一
宇治の川波……一一二
宇治殿……一一四、五三二、五四九

打臥御子……四八三
牛若丸話……六五四
上田氏說……六三三
上田秋成……二三五、三二〇
雲林院……二〇一、四二五
雲淨……三〇五
謠曲……二九五、三六〇、三九三、三九五、四二三、四八四、五八三、六一八、六四〇、六四一、六五二、六五八

エ（ヱ）

空穗物語……九七、二六二、三三〇、三四一、三六五、三八〇、四六二、五一一、五八九、六一一
A……六
N……六
X……六
江戸時代（德川）……一五、三六、六〇、二二五、二六五、三二九、三六六、三九九、四六六、五八九、六一九、六二九、六六〇、六六三、六六九
采女話……三八七
氏寺……五四六
魚住津……五七〇
恨之介……六六〇
孟蘭盆會……四五六
浦島話……三六四、三七二、三七六、三七七、三九七
浦島子傳……六〇〇
榮華物語……六四、六五、七八、一二五、二〇〇、三三八、三九四、四八七、六〇二
榮爵買……五〇七
宴曲（集）……三〇三、三三六、三九六、四二三、六一八、六五六
宴松原……五六〇
永承期……六一、一一二
永觀……一一七、六五七
永興……四四三
永久百首……六〇一
惠心……出源信
惠海……四一〇
惠明……四一〇
叡岳要記……六〇六、六四九
厭世思想……四六六、五二九
厭世文學……三一一
閻魔王（廳）……一九四、二一八

圓融院……五〇八、六〇五
圓推的時代關係……三四六
圓周的樹枝狀分布……三五三
圓月……二三〇
圓珍……出智證
圓仁……出慈覺
繪馬……四八二
繪物語……一七六、二六〇
二九七、三一二
五三六、六六四
繪圖傳說……四五〇、五一五
緣起傳記物語……四八六、六〇三
一二五、二〇〇
三三八、三九四
四八七
淮南子……六九、一三七
六二〇
延源……五一四
延昌……四二〇、六五二
延好……四九七
延年……五一六、五一九
延喜期……六一、二〇〇
延喜寺……四九八
延暦寺……四一七、四二二
役優婆塞(小角)……四八四
尾崎雅嘉……三九、七二
一五八
温古堂本……三七、四二
押小路家本……三七、三八、四一
大鐘傳說……三七七
大鏡……六四、六五、九五
一一六、一二五
一二八、一二九
オ(ヲ)
應賀……六六一
應報譚……一六二、一七五
御伽物語……三五八
御伽草紙……二三五、三〇三
三六六、三九七
六一八、六五一
六五九
大齋院……三〇二、五一六
五一九
大神和讃……六五六
大神高市麿……五〇〇
岡本保孝(況齋)……一三四、二七七
岡本寺……五二〇
正親太夫……五三八
大江山……二二〇、四三八
大江山繪……二七〇、五一五
大江山孝養譚……一六五、一七三
二一四
大濱法師……六三九
大塔物語……六一六
大峯……四二三
大原集……六三五
大原宮……二五五
大年神……三七七
大垣羅城……五六四、五六五
大原談義……六三七
大山神社……四七七
大山田與清本(高田)……三九、五六、六九
一五六、二七六
カ
カンタベリーテールス……一八二、二三五
小野宮(實資)……五〇七
小山田與清本(高田)……三九、五六、六九
一五六、二七六
三四八
海音……六六二
海賊……一七七、五〇二
海道……二九〇、三三〇
海道記……三九四、六三八
三八二、五三〇
五八九
江談……五〇七
江談抄……六、一〇七
一五三、三三八
三四四、三九八
六一二
江都著聞集……六二八
興世王……二四五
折焚柴の記……六二二
鬼殿……五〇六、五〇八
鳴呼……二二〇、四三八
嫗捨山……六三九
嫗捨傳說……一七七、三八八
三八九
康和……四二一
康平……一一四
康和期……六一、二三一
校訂學……一六
校定……三〇、三六
三七、四六
巧盜譚……三七〇
高師本……三七、四二
高等批評……一九
高野山……四二五、四二八
四七七
高野春秋……三三九
高辨……六三三
高譚……一七〇
降魔……一〇六
覺鑁……六三〇
覺獻(鳥羽僧正)……八六、一〇六
五一五、六〇五
覺如……六四七

覺超……四九九
覺緣……四九九
覺審……六三五
神崎遊女……五一九
神樂歌……三二三
假設的共同本文……三二九、八二
假名草紙……二三五、六二〇　六二七
假名三部抄……出三部假名抄
鏡破物語……三七一、三九四　三九九、六一七
鏡物……二五一、四八七
鏡明神……四八四
函數的關係……六、二六
鎌倉時代……三三、三六、四　四、四五、四七　五五、六五　八　三、一二、一　二四、一七五　二〇三、二三〇　二三八、二四五
鎌足……五〇一
賀陽院水閣歌合……五三二
賀陽良藤物語……三九九、六一六
加茂若宮……四八一、四八三
加茂祭……四七七　五一〇
加茂眞淵……五七六
唐物語……三九四　六〇一
唐國物語……六〇一
唐鏡……六一三
雅言集覽……二六一
才……六〇九、六〇八
語……一七〇、四〇五
り物……二三五、三〇三　三九五、六二七　四〇六、五二九
迦葉……六五八
迦毘羅城……三三三、四〇二
庚申講……四八四
片假名文學……二四七
片假字小書文……四四、四五、二　七四、六六八
片假名……三二七、三七九　三九六、三九八
篤氏說……二二九
狩谷棭齋……一三四、一四八　四九一
間接引用……二三七
蟹滿多寺……二七四
各部研究……一九、一五一
河原院……三三九　五〇三　五〇九
川成……一九七
革堂(上人)……五〇七
門部府生繪卷……三九九、六〇五
敵討物語……三七〇、三八〇　六一〇
倶……五八九
倶……六四四
倶……三八三
兼良……六一七
兼盛……六二二
兼宗……三四三、六一四
歌仙落首……六六二
歌舞伎……二六二、六一一
隱れ蓑(物語)……三七一、四六〇
纈纈域……三九七
苅萱發心和讃……六一八
看聞御記……五三、一六六
合戰譚……一七五、五四四
鑑……四一六
鑑眞東征傳……六〇三
冠山……三八八
葛城山……四二二、四七八
可笑記……六一六、六二〇
漢書……一〇二、一三六　一四七、一五三
漢故事和歌集……六〇一、六一七
漢文的國文……二四一、二四五　二八六
閑林集……六三五
閑吟集……六五九
邯鄲諸國物語……六二二
肝心集……六三四
開卷百笑……六二五
開目鈔……五九二、六四二
向原寺……五九二、六四八
向阿(證賢)……四九一
春日明神(社)……四七八
春日權現驗記……五六六、六四八
珂倶婆……四〇三
珂然……六六〇
珂値……一九
交互的關係……三一一
交錯性……一五二、一五六
交下學集……二六五
戒律宗……二七七
戒殺物語……四一六
上出雲寺……四二〇
祭……四八三
風……五七二
金……六三五
賣……五七二
岡……六五九
景宗……六一一
幸……七五、一〇四　一〇五
幸田氏說……三八九
考古畫譜……三九四、三九九　六一七
樂家錄……六三八
遼……五六六
方……五六六
崎……五一九
神……五一九
キリスト……六九
ギュウヨー……一〇
きのふはけふの物語……六二一
技藝譚……五四、一六六　一九七
歸納的研究法……五二三
記載文學史……一五
義清……五一五
義……六一四
經記……六一四
請……二六二

紀傳學生……二二七、五〇三
舊譯……一九〇、一九二
舊本今昔物語訓……二七六
の弓鳥化身譚……一七七、三八五
求心的地方關係……五八
巨巖說話……三七二
巨木說話……出大木傳說
巨人傳說……三八六
僞本……三五
擬古文學……三九八、六五八
貴族文化中心時代……六一、五四二
貴族文學……四一五、五二七
恐怖時代……五二九
祇園……四九八、四九九
祇園精舍……二一一、四二八
四九二
祇陀林寺……五〇九
凝然……六四九
京傳……六二四、六二八
京童部……二七〇、五三五
京都時代……四五、三九九
極殿……三〇七
備譯……五〇三
備眞備繪卷……三九八、六一四
吉祥天……一七四、四五〇
吉備眞備……五七
吉備眞備……六六九
久離勘當……一六〇、一六八
公任……七〇、三三六
公忠……三三五
清原氏……二二七、五〇三
清廉……三一六、五四一
清行……五〇一、五七〇
清瀧……四二五
清水物語……六六〇
清水寺……四四九、四一四
清水園……四九四、四九九
清水寺……四九四、四九九
四九四、五六四
六五一、六五九
其頃……六二二
北慎言……六二三
北野緣起……六三七
近世的變化……二六一、二七九
三三〇、三六〇
經律異相……一三五
近世的文化萌芽時代……六一
近世跡考……六二八
近古時代……二六〇、三三一
近代見聞善惡因緣集……六六〇
禽獸……一六〇、一六八
一七一、一七八
脚本文學……一九三、六六一
六六三
鬼神新論……四四〇
金葉集……六四、三四〇
金峯山……一九一、四二三
四二五
金平淨瑠璃……六二二
金餅說話……三七六
經文批評……一九〇
經文文學の形式……一二一、一三三
一七二、一七四
二三五、三二一
六〇七
經旨和歌……六四九
經師……三二〇、四四五
木村正辭……一三四
玉花集……一〇九
玉葉……九七
玉葉集……三三三、三三七
行基……一四九、三三三
三七七、四一五
四一八、四二八
四九七、六〇七
行圓……五〇七
行慶……六〇九
棄老國……一三六、三八九
三九三
鏡花……七
基督教……三七〇
狂歌今昔物語……六二四、六二六
六二八
狂言記……三六〇、五二一
六一九、六五九
狂言集……六三五
グリム……一五八、六二七
クラウショー……一七
クラシ、ズム……六五、一九九
二〇三、二四四
義……一七
文……二三七
文……五一〇
文學……一七六、二一四
下し……四一八、四二八
寓話……四九七、六〇七
三六九
道……二六二
外部批評……一九、二二、三
九二
外部徵證……六六、七八
外國的(異國的)要素……二四一
外來文化攝取の文學……五八八、五九五
科學主義……一八七
科學分類法……二一、二四
袋……七
花……三〇三、三三六
花山院……五一四
花月草紙……六二二
菅家萬葉……三四一、五九一
菅公……三四一、三四四
四五五、四八四
快……六五七
元……五三二
皇后宮春秋歌合……一一七、六一一
皇圓……五二、一六六
皇室歷代記……一七九
愚管抄……八〇、八二、三
八一、六一三
六三七
愚痴拾遺物語……六二五
愚昧發心集……六三三
具慶……三九九、六二一
具體的觀念……一、二三五、五
八六
具體的情意……一
元興寺……三一五、三七二
四一七、四二四
四二八、四八二

五〇〇
元享釋書……一三四、三九九、六六八
元祿文學……三一九
願文……二八六、六三〇
群書一覽……七二、一一一、一五八
空也……二一三、四二〇、四五〇、六〇七
空念……六〇九
空海……二一六、三七二、四一五、四一七
空想要素……五二四、五二五、四六七、六〇〇
觀現上人……一八六、二一六、五三二、五七二
觀音靈驗一……一六四、一七四、三二七、四四九
觀音經……四四七、四四九、六〇五
觀世音寺……四九四
觀世音寺資財帳……二七八、六〇五
觀音緣起……六〇三、六六九
朝……四一八、四九九
忠……四三二、五一二、五一七、五二一
國……五〇四
香……五〇四
經……三一八、五〇一
勸化三國往生傳……六六〇、六六九
勸修寺緣起……六五六
勸修寺文書……一三八、五〇二
勸修寺……五〇二
勸學院……四九八、五〇三
鞍馬山(寺)……四二四、四五〇、四七八、五一二
釘拔念佛緣起……六五六
苦行仙……四二三
熊澤了介……四四〇
熊野……四二二、四四七、四七八、四八一
熊野詣……四二三
鳩摩羅焰……四〇九
幻夢物語……六五八
瓦礫雜考……八〇
軍記物語……一九〇、二四六、二八二、二八六、五八三

拘拏羅太子……一四二
久米寺……三七三、四二八、四九三
久米禪師……三七三
久米仙人……三七三、四二八、四三八、四九三
久米氏說……三九、二六四、六一九
黑川氏說……三九、一〇六、一二二
郡司……三五八、三六二、五〇〇、五〇五
種合……三一七、五一〇、五四〇
倶含宗……二一二、四一七
百濟佛敎……四一六
書題詠……三三六
荒唐味……三一一
光前寺……三七八
光明后……四一八
光嚴院……三九九、六四二
公事根源……四九二
歡樂時代……五二九
久米禪師……三七三
化石說話……三七三
化生說話……三七三、四二八
化生譚……一六九、一七八
國經……五六〇
系統批評……二〇、五八五、五九八、六六五
系譜的關係……五八五、五九八、六一〇
檢非違使……一八六、四六〇、四九五
袈裟御前話……三八六
愚經……一三五、二五〇
慶……三九八
戒……六〇四
知……六六〇
雄……六五七
月詣和歌集……一〇四
月上女經……三八九
現實性……三二七、四九〇、五二六、五八六
形式句……一八二、二三四
稽古館本……三九、四六
狹義……一七
啓蒙運動(時代)……六五、一八七、六六〇

現在時……二八二
現代作品……六、八
玄海……四七四
玄慧……二三〇、四八九
玄光……六六〇
玄非……一九〇、四〇二
玄陳（棟）……六五〇
玄洞放言……三七三
原據共有……三二、八三
原載……三八九
源氏物語……三六、六二、七、〇九七、一二五
一五七、二〇一
二三六、二三九
二四一、二六一
二八七、二八八
三〇七、三二七
三二九、三三〇
三八二、四三三
四五七、五二四
五二六、五三七
五八三、五八九
六〇九、六一一
源氏物語供養……六一一
源信……六五、八八、一
一七、二一三
慶長見聞集……二三九、四一九
四二一、四三二
四六一、四九三
五一二、五一四
五一七、五九三
六〇九、六〇五
六五一
四二〇、六四八
九八、二四七
二六七、三九四
三九五、六三二
六五八
二九〇、三一四
四七七
源太夫……二四四、五〇三
源空……四五、五二四
源平盛衰記……六三五
源兼……出蓮如
源兼好……二〇七、二四六
六一六、六四九
源兼賢……六三五
源兼運……六〇九
源兼命……五三二
源兼恩……三九九、六四二
六五九
顯昭……六三五
顯賢……三九五、六二五
顯壽……出蓮如
顯好……二〇七、二四六
顯辨……六三五
慶運……六〇九
慶命……六二一
慶恩……五三二
慶……六五九
教圓……五一八
教驢嘶……六五七
教訓抄……一〇五、六三八
教訓の要素……二〇八
教童指歸抄……二二六
教化文學……五八一
教華嚴經……一六二、四〇八
四一〇、四四四
教華嚴宗……四一七、四四四
遣唐使……二四四、五〇三
缺字……四七
經過點……二四五
言海……二六七
劇的美……三一一
乾坤城……六六〇
國學……一五、四四〇
國文學系統表……五九五
國語の保守性……二七三
國名風土記……三九四
國歌大觀……三三一
國書解題……六五〇
國史大系本……三八、四四
國民文學……一七、二六二
二九六、四一五
五九三、六二七
國民性……一七三、一七四
一八五、一九二
二〇〇、二四四
三〇一、三一四
極樂往生譚……三二〇、三六〇
極樂寺……四二〇、四四一
極樂願往生歌……五四三、五五五
極樂物語……五五七
極樂往生記……五二〇、五七六
國民的音樂……四九五、五〇〇
國司……五〇五、五一二
五四〇
五萬長者……六五二
五孔子……一七三、一九五
五鴻門の會……一四七、三一〇
五口碑傳承……三三、三五五
三八九、四八九
古代日本の文學語……二七三
古代の心……一九九
古語拾遺……五八九、六〇一
古代文學……六
古今六帖……三四一
古今妖魅考……四四〇
古今和歌集……一三八、一九二
三三二、三三五
三三九、三八七
五八九
古今著聞集……七四、一五三
三三二、三七四
三九八、五八三
六一五

古今拾遺著聞集……六六二
古事談……七六、一〇五
一一一、一五三
五〇四、五一九
古事記……二四二、二七五
三〇〇、三〇一
三二〇、三三〇
三七九、四二七
五九七、五九九
古典期……二〇五
古典的壞頽……二〇五、二六一
古淨瑠璃……三七九、六二二
六五九
誤膠率……三一、三七
小柴垣草紙……六五九
小屋寺……四三六
小世繼物語……四一、七三、一一一
小松寺……四五九
小町傳說……三六七、六〇〇
六五四
一七五、二二二
滑稽……四五二
滑稽味……三一三、三二一
穀斷上人……二八六、六三〇
三二一、四二三
御文章……五九二、六五五
六六八
弘仁貞觀期……一〇九
後鳥羽天皇……六一、二〇〇
後拾遺集……六四、一一五
後拾遺往生傳……一一七、六〇九
一三八、三三二
三三七、三三九
三四二
後冷泉天皇……六六九
後一條天皇……八七
後白河法皇……六三一
後堀河天皇……一一一、六一三
後三條上皇……二七五
後三年繪詞……六一六
後撰和歌集……三三九、三四一
後世物語……六三七、六六九
滑稽譚……五四、一六六
碁……五〇四
琴……六一一
衡……五六一
茂……三八〇、三八四
五〇四、五四四
維……四七八、四九六
維……五四三
維……五〇四
維……三〇三、五六三
諸……六一二
諸……一七六、三七〇
諸……言繼鄉記……六一八
伊……言靈思想……三六七
伊……語尾雙記體……二七五、六〇二
伊……語學的單位……二四八
伊……法……一九〇、四八四
巧盜說話……
言繼鄉記……
言靈思想……
語尾雙記體……
語學的單位……
法……
護命……六〇四
護苦の衣……六一八
今昔庚申譚……六二六、六六三
今昔諸國話……六二六
今昔浦島咄……六二六
今昔狐夜咄……六二六
今昔萬歲の島臺……六二六
今昔二枚繪草紙……六二六、六六三
今昔相宿噺……六二六
今昔妹背の腹帶……六二六
今昔續百鬼……六二六
今昔百鬼拾遺……六二六
今昔見聞草紙……六二六
今昔道の栞……六二六
今昔百話新譯……三九、四六
今昔の物語關係書目表……一三一
固有思想主想の文學……五八八、五九五
胡國……五九六
胡蝶曲……五一一
誇張的……三三三、五一六
誇張的……三〇九
湖沼傳說……三七九
嚴久……四九九
今昔庚申譚……
今昔諸國話……
今昔浦島咄……
今昔狐夜咄……
今昔萬歲の島臺……
今昔二枚繪草紙……
今昔相宿噺……
今昔妹背の腹帶……
今昔續百鬼……
今昔百鬼拾遺……
今昔見聞草紙……
今昔道の栞……
今昔百話新譯……
今昔の物語關係書目表……
固有思想主想の文學……
胡國……
胡蝶曲……
誇張的……
湖沼傳說……
嚴久……

サ

サロメ物語……三六九
狹衣物語……六四、一一二
二六二、三三九
三八八、五八九
狹穗姬……五〇一
更級日記……六四、三四一
三八七、三八九
讃岐典侍日記……六四
齊明天智期……四九二
雜々拾遺……六一六
雜談集……八一、六四六
六六九
雜寶藏經……一三六、三八九
雜纂文學……五八三
曹植……三六六
莊子……一三七、一四三
一七三、一九八
里見八犬傳……九八

尋地列……五五七　定家……三三九　三十三所巡禮……六五六
在唐送集錄……四一八、四四一　定基……一一七、二八九　三修禪師……四六二、五一四
散珠的修辭……二九三　三二二、三九六　三要素……五二八
散文……一、九一　三九八、四八三　三寶住持集……六〇四
侍……五三一　定……五〇六　三寶繪詞……六五、一三五
濟信……二四七　定文……一八五、三二〇　一四四、二七四
佐藤氏說……四七、五一、七　三四一、五一一　二八六、三三二
一、一一一、一　五三三　三七五、三九九
二九、一五二　定文……出平中　四二九、四九一
六七　定任……五四四　五九三、六〇五
西院河原原地藏和讃……四五一、六〇七　貞盛……一八九、四九六　六六九
西宮記……六〇二　五〇四、五一一　三寶繪卷……三九九、六五五
西鶴……一八三、二、七　貞道……五一、五四七　三寶感應要略……一三五、一八三
三一九、六二二　榊原印本……三七、四三　三論宗……四一六
西行……一一一、六一二　山王船謠……四八三　三教指歸……二二六、五九二
六二二　六〇八　六〇四
西域記……一三四、一四二　山王一實神道……四七六、五八九　三千大世界……二五〇
一九〇、二四八　三部經繪……六〇九、六三〇　三代實錄……二七五、四四五
三七三、三九三　三部假名鈔……五九一、六四　三外往生傳……六三七、六六〇
四〇六　三部的方法……二〇、二〇〇　六六三、六六九
房……三六七　三韓佛教……四一〇、四九一
三國往生傳……六六〇　最須敬重繪詞……六四九　詩學……七
三國傳記……三九二、三九三　澄……出傳教　詩歌故事譚……三三二
三九四、四〇　作者部類……一〇九　志賀寺……三六六、四二八
四四九、五〇〇　方……三三七　四九三
六五〇、六五二　資……五〇七　晃……六五六
六五五、六六九　觀……四六九　信貴山緣起繪卷……一〇五、三七四
三國名匠略傳……六四六　罪惡神……四八一　三九八
三帖和讃……六四二　沙汰文……五一〇　信田……四二四、六三五
三十二相……三五九、四一一　算道……四八四　信施……二六九
六〇六　蟋蟀……四一七　朱雀門……三二五
三記的方法……二〇　催馬樂……五三二　十禪師……四八四
三條院……五〇八　坂迎へ……五一〇　十訓抄……一一一、二〇九
猿丸……二六九　六一五
猿神……三七八　シ　十二部經……四〇〇
猿樂……二七〇　ジャックと豆蔓話……三六七、三七五　色葉字類抄……二七六
猿著聞樂……六二四　ジャータカ……一五七、一六〇　色葉和歌集……一〇四、一〇九
論……五三八　一七一、三五九　一一一、三七六
桑門集……六三五　三六七、三六九　六〇二
左傳……一九〇　シニルマン……五　詞林采葉抄……三九四
記……六一四　シュッペ……一四　詞林言葉集……六四八
最勝會……四九二　詩歌……一　詞花集……六四、一一五

三三六
詞華文學……三九七
拾遺抄……三三七
拾遺集……六四、一三八
三三二、三三四
三三六、三四五
三八五
拾遺三寶感應傳……六六〇
拾遺往生傳……六六、一一七
一三七、二〇九
六〇九
拾遺古德傳……五一九、五九三
六四七、六六九
集説話の國名表……三四七、三五〇
集説話の時代的地方的關係……
五八三、三四七
五三三
集説話の樹枝狀分布圖……三五三
時代的翻案……三三、三五、六
七、三九〇
屍體化生譚……三七二、三八三
慈慧……出頁源
慈覺……一四四、三七一
四一七、四四一
四四八、四六〇
四七七、六〇四
所司……五一二
慈鎭……六一三
私聚百因緣集……三九二、六四三
六五一、六五五
六六九
上東門院……九四、一一四
上宮太子御記……四九二、六〇三
六四二
書寫山……三九六、四二五
四七二
淨密……四二〇
淨教……二二九、四一八
四二一 四四四
六二三、六四四
淨土類文鈔……六四二、六五六
淨源……四九七
淨藏……一一七、二二〇
三四一、四三二
四八〇、五〇一
淨瑠璃文學……六六一、六六二
淨居天……四〇三
聖德太子……九九、二一一
二二六、三三二
三九六、四一五
四一八、四三〇
四四一、四六七
六四四
聖德太子傳……五二〇、六六一
六六四
聖武期(帝)……一七四、二二九
三五二、三六二
四一五、四二四
聖覺……六一一、六三七
聖護……六〇四
諸惡莫作偈……二九四、四〇七
諸行無常……二九六
諸國今昔物語……六二五

成尋(善惠)……八八、六五六
成實宗……四一七
純文學……一八〇
繁樹……二一〇
儒教……二〇六、二二二
二二四、二三一
四四〇
儒教の傳播者……二二二、二二五
悉達太子……二一四
寺院の樹枝狀分布圖……四二七
寺院の國名表……四二五
寺塔緣起譚……一六三、一七八
二一二、四二三
寺物横領譚(佛物)……四三六、四七〇
寺門傳記……八一、一一二
六五六
初見の戀……三二八
初版批評……三四
出家譚……一五九、二一〇
二八九、三二八
今集……三三四、三三五
續日本紀……一三五
六五四
續詞花集……六三九
昌住……二七六
靜賢……三九八
寫實主義……二九一、三九八
五二四
寫經功德譚……一六一
社會的階級性……五七八
社會的周圍……六、九、四五〇
五二五
社會的要素……六、七、八
社會生活の文學系統(第五系統)……
五八八、五八九
五九五、六一〇
忍音物語……一一一
眞言宗……二一三、四一五
四一七
眞如房……六四一
眞濟……四一八
宗教的性質……六六六
宗論……三九六、六四五
親鸞……四二〇、四三八
五九二、六四二
六四八
新社會……一〇、五七九
新古今和歌集……三三五
新撰姓氏錄……四八二
新撰字鏡……二六二、二七六
新池御書……六四三
新撰朗詠集……六五、一一五
三四三
新內侍……六五七
新譯……一九〇、一九二
新曲(謠曲)……六五九
新日本の文學語……二七三、五一四
五七七
神曲……四一二、四五九
神武記……三八七
神道……九九、二二四
二三一、三九〇
四四〇、四四六

宿報譚……五四、二一一　四七五、四七九　五八九
性信……六四三
性空……三八六、三九六　四二九、四七二　五一四、五一六　五六六
神話時代……三七八
神社の國名表……四七九
神社の樹技狀分布圖……四八〇
人身供牲譚……一六七、一九一　三〇四、三七八
人身難受……二九六
人文說話……三八二、三九〇
人生智……五七二
捨老國……三六九、三八九
沙石集……三九三、六四六　六六九
修榮……六〇三
修圓……四一七
修多羅供……一四四、二六九　四三六、四九四
宿命觀……一八四、二〇一　二一一、三二三
釋迦八相物語……四三三、六五一
釋日本紀……六一九
釋書豪求……六四四
釋迦八相成道譚……一五九、一七〇　三五八、四〇一
生祥……二二二
生經……一三六
生進……二二二
生證……六四七
生心……六三五
生專……六四九
生乘……五七一
生實物交換……一八一
生實用的要素……二七八
生實用主義……四一三
生實在性……六三八、六五七
生實叡……六四二
生實昭……三七四
生森林說話……三六七、三七五　三八六
生呪誼說話……三八六
狩獵文學……六〇三
自筆本……三四、三六
自然の國文……二四一
自然說話……三七四、三八六
自然派主義……二二二、三〇〇
自笑……六二五
自清範……四九九
自清尋……三一一
樹下集……六三五
樹提伽長者……三〇二
樹神……四〇三、四八一　四八二
樹師……四八四
識分……四〇五、四一八
識城……一四七
識史的表現……五七七
識史籍集覽本……三八、四四
識史記……一〇二、一三六　一五三
識練……六四八
識蠻……六五七
神話……三七八
神社……四七九
神師……四〇五、四一八
神史……三二五、五二四　五八一
神史籍……二二三、二二六
神書……五三六
神經……三六九
神震旦部說話……一四三、一五七　一七一、一七二
神一……四、二四〇
神春……二六二
神花……二六一、二七四
神集……六三五
神述……六二〇
神異……五九四
神記……六二〇
神方……三一五
神震旦佛法譚……三六〇、四〇七　四一三、四四四
神保……六三四
神詳……三三八
神密……三〇三
神性……三〇三
神原……三六六
神譚……三六六
神論……三七〇
神潛……三七〇
神夫……三七〇
神錢……四一二
神紙……六〇九
神懷……六〇九
神寫……二八八、二九二　五八一
神叙……三七五、四〇〇
神事……四〇〇、四〇二
神文……四〇〇、四〇二
神物……三六八
神食……二八八
神心……四〇二
神心理小說……二八八
神心理描寫……五〇五
神白……三四〇
神白川……三〇八、三四〇
神白拍子……三四一、五一九
神白河院……六〇九、六四五
神須彌山……四〇二
神四……五九四
神四小系文學……五九五
神四系傳寫族……四六
神始皇帝……四〇七、四九〇
神酒泉說話……三八六
神心……三三八
神心覺……三三八
神心學……六二一
神心懷……六〇九
神心理描寫……五〇五
神白……三四〇
神白川……三〇八、三四〇
神白拍子……三四一、五一九
神白河院……六〇九、六四五
神須彌山……四〇二
神心理小說……二八八
神食物譚……三六八

所司……四九八、五一二
しみのすか物語……六二五
細白住生傳……六、七、六六三
茂經……三一六
現破物語……三九九、六一六
駿臺雜話……六二二
水界說商……四九六、五六四
銀露……三二六
末葉番……六五九
末百綱……六三〇
ス
スペンサー……一〇、二六、五
九
崇神紀……三八七
隨筆文學……五八三
宿世……一八三
佐國……八八、六〇九
六三〇
菅原傳授手習鑑……六六三
鈴鹿山……四三八、五〇八
五七二
鈴木本……三八、四四、五
六
現破の話……三三四、三八六
三九六
草紙……三九六、三九八
季
季
季
季
季
諏訪
角田川物語
純友
住吉明神
住吉物語
セ
セム思想
センツベリー
セイニョウボー
靜的……一一
性格描寫……一九一、二九八
世尊寺……四二五、五〇六
五一四
世界文學派……一二、二〇、五
八一
世界的擴布……三六二、三六七
三七〇
世俗譚……一一八、一五二
四六八
世俗字類抄……二七六
世話物……六六二
世話譚……三五五
世話物語……三二三、三二六
三五五、六二三
尙古趣味……六六、一七三
一九七、一九八
二〇四
少說的戀愛譚……一五六、一六九
二三四、三二七
小說的構造……三二二、三二九
晴明……四八四
清少納言……二〇七
清和帝……五〇七
清玄話……六五一
清助……六六三
扇助……六六三
關寺……三九四、四二五
四八七、五二九
關山……五四八、五七二
雪鼎……六六一
醒睡笑……五三二
說話團……一五五
說話の分布……三四八、三五〇
五七一
說話物語……二六〇、五九五
說語文學……一二一、一八三
二四七、三〇九
三一一、三四五
三六七、四〇〇
五七三、五八一
晴說話……五八九、五九五
少納言……五九七、五九八
清和帝……六一一、六一四
清玄話……六二七
清助……六六三
扇助……六六三
關寺……三六九、三八三
三八五
雪山……五八〇
鼎……五一七、六〇五
醒睡笑……六〇七
說話團……四六六、四九四
說話の分布……二六二
五七一
說話物語……六二〇
說語文學……三一六
生命の水……五八〇
千觀……五一七、六〇五
千日講……四六六、四九四
施陀羅……二六二
剪燈新話……六二〇
珍……三一六
宗……四一六、六三三
六三七、六四五
一九七、五一九
三六七、四〇〇
五七三、五八一
說話……一三三、一七五
說語……一六〇、一七〇
泉橋寺……四二八
成形傳說……三九八
全文學史……六六五
焦點的印象……一
消息文……二三九
戰記文……一九〇、二四七
六四一、六五二
六五八
聖書……三六九、四〇五
善導……四一八、五一七
善光寺……三九六、四〇九
四一〇
善無畏……四〇九、四九一
善界……三九五
善財女(經)……三八九、六四四
漸層法……三一七
宣命書……二七五、五八九
選子……六〇八
撰集抄……一〇四、三九六

三九八、六一二　續群書類從……一一二　漱石……七
撰集百緣經……一三六、一七七　續詞歌集……六三九　宗羅……六五八
仙鄕說話……三七六、三七八　曾我物語……一九一、三九四　宗久……六五〇
三八六　增賀……四二一　宗輔……六六一
仙人形……四二一　宗體……一三九
ソ　蘇生譚……一六二、一六五　素朴性……三〇〇
綜合研究……一七九、一八〇　蘇武……三七一　俗解……一二五三、一二七三
五一四　僧都殿……五〇六　三八八
宋……三五三　僧祇律……一九〇　存覺……六四九
宋學……一三〇　僧兪……四一〇、四九一　崇福寺……四五四、四九三
續狂言記……三九四　僧智……四一二
續古事談……三七六、六一三　僧兵……四三六、四九九
續門葉和歌集……五三三　尊者……五六八　ダンテ……四一一、四五九
續教訓抄……一〇五、二六五　尊叡……五一二　タンホイゼル……三七六
六三八　尊知……六〇九　大安寺……一三七、一五〇
續本朝往生傳……六六、一一六　尊卑分脈……一〇九、五〇八　四二四、四三六
二〇九、三三三　袖ぬらす……一一二、三二六　四八二、四九二
六〇九、六三三　染殿后……三一九、三二〇
六六九　五〇〇　大日本史……九八、五九一
續百因緣集……六四五　卒塔婆血附く話……三六九　大日本法華驗記……出法華驗記

大日定印……四一七　三九三、六一六　第四小系文學……五九五、六五〇
大學本……三七、四三、四四、四五　六五三　六五八、六六一
大學衆……一九九、五四一　太宰春臺……一八一、三三九　六六三、六六九
大衆……四九八、四九九　第一(二)次溯源的研究……五八　六七〇、六七一
大人文學……五八一　第一小系文學……五九二、五九五　第五文化時代……六一、六六、三
太山府君……一九〇、一九四　六〇四、六四三　四八、三五二
四一一　六六〇、六六三　四一九、四三六
大佛物語……六六〇、六六三　第二小系文學……五九二、五五九　四四二、四八七
大木傳說(巨木)……二四八、三七二　五九七、六〇三　四八九、四九九
大寶令……二六五　六〇四、六〇五　五二七、五七五
大職冠……五一、三九五　六六〇、六六三　五八一、六三一
四九八、五〇一　第六天……四〇四
六〇〇　六六七、六六八　多羅人……五一一
太子傳補闕記……三三二　六六九、六七〇　多武峯略記……三三三、六三七
大般若波羅密多經……一六二、一六四　六七一　盜賊譚……一六八、三七三
四一一、四四四　第三小系文學……五九五、六三三　三八五
四四五　六三五、六三七　對象の性質……二二、二七、四
大　饗……五〇五、五一五　六五八、六六〇　四六
太閤記……六二一　瀧氏殿……五〇二
太平記……九八、三七二　六六三、六六七　瀧說……一〇六
六六八、六六九　瀧口……三一五、三一九
六七〇、六七一

道命……四九九、五〇〇
道登……一一一
道照……四一六、四一七
道理……二五八、六一三
道教……一七三、一九四
一九五、二〇六
道公……四八一
道祖神……四〇三、四八一
四八二
道慈……四九二
道成寺譚……三七五、四二五
四六八、六五一
道範……六三八
道德主義……一八五、一九三
道德的教訓……二一三、二一七
四九九、五〇〇
武則……四七七
篁……一三八、三三九
三六一、五〇〇
齊名……六
隆鏡……三二〇、四一〇
四三三
隆國……四四三
隆家……五四、七二、八
三、八五、八七
九一、一〇七
隆經……二九一
隆俊……八六
隆能……六一七
隆忠……二四、六二五
六二四、六二五
隆房……三三六
隆兼……一〇七、五一一
隆平……五〇〇
隆密……二一三、四一八
隆禪……四二一
隆磨……三〇五、四〇五
二二一、二二四
二二八、二三一
高……
高木氏……
高木氏說……三七六
高助……五一二
高憲……六五、二八一
三三八、六〇五
六〇六、六三三
爲……
爲盛發心集……六三四
爲春……六六〇
爲元……二二〇、三二一
五三九
爲康……六六、一一六
六〇九
手番……五一〇
忠理……一九九
忠房……三三六
忠文……一〇七、五一一
忠兼……五五八
忠平……五〇〇
台密……二一三、四一八
台禪……四二一
台磨……三〇五、四〇五
達……四〇九、四二〇
橘氏……一〇一、四二九
立山……三七六、四二二
四七八
孝標の女……二九〇
醍醐帝……三七三、五一〇
檀林皇后……四二九
直幹申文繪詞……四八一
鷹狩……五一一、五六九

チ

チョーサー……一八二
千包……四九七
千枝惟久……六八、七八
三九八
智光……三三三、四一八
五一五、六〇三
智證……四一八、四二一
四四八、四九四
智證大師和讃……六〇七、六五六
竹齊物語……六二一
竹林七賢……一九四
竹火爐……五六四
地藏靈驗譚……一六四、三二七
三六四、三九九
達磨宗系圖……四二〇
四九一
丹鶴叢書……三七、四二、四
四、三三七
陶淵明……一九四
竹芝話……三八七
竹取傳說……一七七、三八九
三九四
竹取物語……二四二、三〇〇
三六五、三六六
四八四、五八九
六〇〇、六四三
六五四
竹取翁……二四三、三七三
三八九、三九五
玉光る女……二五一
寶の山……三一八
帝釋天……三六九、四〇二
四四三
玉祖大明神……四七八
玉勝間……四二三
玉造小町壯衰記……三六七、六〇〇
陀羅尼……一四八、四一〇
四四四
澄覺……六〇三
泰……六三三
榮陰比事……六二〇
榮陰比事物語……六二〇
種彥……六二二
體源鈔……一〇五、六三八
歎異鈔……五九二、六四七
鷹……四九六、六〇〇
田中印本……三七、四七
唐……二六四

地蔵縁起繪巻……三九八、六四二　四五〇
地蔵霊験記……一一七、一四九　六五九
長秋歌……二九五
長明……五一九、六一二
地神……一八九、四〇二
記……一一七、六三〇　四八三
地蔵菩薩霊験記……六五七、六六九
地蔵抄……四五三、六四二
地蔵講……四五五、五〇九
地方的讃案……三三、三五、六七
地方的關係……三四五、三四七
地理的分類……一一九
地名傳説……二七四、三八二
地獄譚……一六一、一七二　三六一、三九九
地獄草紙……三九八、六三五　四一一
中間項……三一三
中正子……三七八、三九七
中右記……四六四、四七〇
中山高野神……四二三、四三三
中務……一六五、二一五　四六四
忠犬説話……四六四、四七〇
畜生受身譚……六二二
竺志船物語……四五二、五三二
兒物語……五三三
長者傳説……三七五、六五二
長持佛堂……五六三
長持經仙……四二三、四三三
長直心應報譚……一六五、二一五
長直接引用……二三八
長源……六〇八
長海……六六
長西……二五八、二六四　三二七、三五三
長松巣林子……一九二、五五八　六五九、六六二
長貞……六三八
長貞觀……一八五
長貞觀期……二〇〇
長貞慶……六三三
長沈鐘説話……三八八
長秋……四五二、五三二
長者……二三六
長親……四九七
長房……五八九
長行……六三八
長文……二三七
長惠……五〇一、五二〇
長朝……四九七
長定……四一五
長定流文學……一七、一八五
長定人……一八五
長定人觀……六三八
長定人眞……一九二、五五八
長定人近……六六二
長定人近松巣林子……一九二、五五八
長定人貞……二〇〇
長定人貞慶……六三三
長定人沈鐘説話……三八八
柱……一九一、一九三
木信仰……四八二
木傳説……三六七、三九七
木傳説……四四七、四八三　五七九
珍海……六三一
住信……六四三
千包……四九七
註釋學……一三一
治助……六六三
侍童……五三〇
勅修御傳……六四八
壺坂寺……三三八、三七七
壺屋……五二一、五三一　五六四
ツアラツストラ……一八二
露の宿……一一二
對句駢驪體……二九三、二九七　六三〇
對句文學……二九七
津輕家卷子本……三八、四五、九　一
鬪雞御田……三七一
通俗小説……一七二、五八一　六二九
通俗主義……一九一、一九三
付喪神……四四七、四八三　五七九
付喪神傳説……一七六、三八四　三九六
付喪神物語……三九九、四四七
付貫之……三三八
低級批評……一九
低級批評……六四六
低級批評……二〇七
超越的批評……三一九
典藥頭……八八、一一七
朝野群載……四三〇、四七八
天王寺……四九二
天人の五衰……二六一、四〇二
天狗草紙……三九六、三九九　四九九、六一六　六五九
天狗譚……一六五、三二〇　三七〇、三九六　四二四、四六一
テーン……九、五九
デカメロン……二三五
ディルセー……一一
テキスト研究……二一、二八、三〇、三四、五七　一〇三、一一三　一三一、三九二　六〇二

天然說話……三九〇
天竺往生驗記……一三六、六三四
天竺佛法譚……一四〇、一五九、一七一、二四〇、二六一、二六四
天滿宮緣起……六六一、三五八、四〇一、四〇五、四一二、四一三
天魔破旬……二九五
天神……二七〇
天縛……二七一
天曆期……二〇〇
天慶期……四二一
天台宗……一九五、二一三、四一五、四一七
天台霞標……六五七、六六三
天台大師和讃……六〇七
天智天皇……一七五、四九二
天地開闢譚……三九一
天德內裡歌合……五三二
寺島宗意……三九
寺島良安……六二八
土佐僧……三八七
土佐日記……一七七、三三八、五八九
土俗的……五六二
登昭……五七九
藤氏列傳譚……一〇〇、一二八、一六六、一七五
同時的……六、三五五
同朋……二六二
同音異義……二七四、三八八
洞雲……六五八
賢……八三
平……四八四
貞……七五、一〇九
賴……三九二、六一二
東關紀行……六三八
東齋隨筆……一〇五、六一七
東大寺……三七二、四一七
ド、カンセー……一七
動的……八、一〇、二二、三
土佐僧……五一四
士佐日記……一七七、三三八、五八九
亭子院……四九七
田樂……五一八
轉法輪譚……一五九、一七〇、二一〇、三五八
傳教……四一七、四二一、四七七、六〇四
傳教將來目錄……四四八
傳說學……三五四、三六五
傳說の移轉……一四六
傳法會……四五五
傳寫族……三二、五六
傳寫の傳寫……三一、三六
傳記的書籍解題法……八
トン
東京敎……四一八
東部寺……四五四
鳥邊野……二九一、五〇一
鳥羽天皇……一一六
鳥羽僧正……出覺鈍
鳥羽繪……五一五
時平……一二六、三一八、三九六、五〇一
時朝……三九六
時親……四八四
敏行……三三三
利延……五〇八
利仁……三〇七、四九三、五〇五、五四三、五六八
豐津寺……四二五
豐國法師……四九一
德道……四九八、六〇三
友則……一三八、二五三
取替へばや……一一二、三二六
燈臺鬼話……六五七
獨照……六五七
獨湛……六五七
獨語……三三九、一八〇
章成……五七三
綱……三四七
葛……六三八
禰……五〇八
刀……四四五、四六八
兜率天……四〇二、四一〇
忉利天……四四五、四六八
內閣文庫本……三八、四五
內部批評……一二、三九二
內部徵證……七四、七八、一二六
內容の記號的區分……一一九
內在的批評……一四、二〇七
長屋王……二八二、五〇〇
長澤柿園(伴雄)……三七、四二
長宿直……五〇七
夏目氏說……一
夏飼……三〇一
南海流浪記……六三八
南葵文庫本……三七、四二
南都六宗……二一二、四一五、四一七
難題說話……三六六、三六九
那天宮……一四九
鳴門中將物語……六一七
業成平……三二七、五〇七
中原季……六一五
中原氏……二二七

仲光……三九五
仲麿……一三八、三三八、三九八、五〇三、六〇〇
奈良坂……四三八、五七二
奈良時代……二一五、二三一、三四七、四一七
日本霊異記攷證……一四八、四九一
日本霊異記説話分布表及び圖…三五四、四三五、四五四、四六八、四八一、五二〇、六〇〇、六〇三、六〇四、六六九
日本往生傳……六五七
日本霊感錄……一三七、六〇四、六六九
日本三寶感通集……六一一
日本書紀……一三八、二四二、二七五、四五八、五九一、五九九、六四四
日本極樂往生記……六〇五、六〇八、六六九
日本佛教……二二二、二二六、四四二、四四七
日本的漢文……二四三
日本的文化……二四四、三五二、三五四
日本第一……二五三、三六一、四四〇
日藏……三一〇、三五六、四八八、六〇〇
日記物語……二六〇、六〇四、六六九
日光山……三八四、四二五、五〇五
日摩尼……一四八、四八四
日蓮……四一九、四四三、四五〇、五九二、六四二
二元思想……一七二
二人比丘尼……六六一
二千度詣……一八六、二一五、四四九、四八四
二中歷……四九七、五〇四
二十四孝譚……三七〇
二十五菩薩和讃……六〇七
仁王經……一九〇、四四四、六六九
仁和寺……一〇四、二四七、三六八
仁德紀……三七二

ニ

ニーチエ……一八二
ニーベルンゲンリード……三七五
日本極樂往生記……六六九
日本霊異記……四八、一三四、一四四、一四五、一七四、二〇九

任鏤……一一七、六五七
仁慶……一一八
人間化……一七六
人情小說……三二八、五六六、六六一
入唐求法書目錄……四四一
入唐新求聖教目錄……四一八
丹塗矢話……三八六、三八七
丹生明神……四四七、四七八
尼乾子……四〇三
尼蓮禪河……四〇三
如意珠……三七六、四八四
如意輪觀音……四四八
如傀子……六一六
如法寺……一八九
如法經……四四四
如信……六四七
如幻……六六〇
如慶……三九九、六二一、六六一
西市藏……五一〇
西慶……一一八
似繪……三九九
能書事蹟……五七六
能實……三九九、六一五
信規……一八五、二〇二
惟……三四〇、三四二
陳忠……二二二、三一七
後は昔物語……六二五、六二八
宣長說……二〇一、四二三
野々口隆正……二七五
野守鏡……六三七、六四四
祝詞……四八一、五八九

ノ

ノンセンス……三一七
ノアの洪水譚……三六九
ノーケンチニ……六二七
ノートルダム……五五〇
ノートルダム因……三〇八、三三九
ノートルダム能……三四〇、四二九

ハ

バイブル……出基督教
ハント……四
バラルド……六二六
バンチャタントラ……一四一、三五九
方廣經……一六四
方法的研究……一五、一六、二七
方丈記……一〇四、五二八、六一六、六三五
跋提長者……三六七

藩翰譜……六二二
發展的群……六六八
寶物集……七四、七八、三三六、四四〇
長谷雄……六〇〇
長谷寺……四九八、五二一
長谷寺緣起……三三四、三七二、六〇五
法樂……二七〇
法鏡……六三三
法隆寺法談筆記……二四八
法隆寺……四二四
法相宗……二一三、四〇九、四一六、四一七
法成寺……一八七、四五五
法文百首……二七八、五七〇
法華經功德譚……二、一三四、一三六
法華驗記……四二四、四五三
法苑珠林……一三四、一四一、一四七、六〇四
法華靈驗影張……六〇八
法顯……一四五、一六二、一六三、一七二
法然上人行狀畫圖……六四八、六六一、六四八
法王帝說……三三三
法談文學……二四八、五〇六、五一二
冒險譚……一七七
破戒說話……三〇七、三七三、三七七
報恩譚……一六〇
報恩鈔……六四二、六五六
箸の話……三八七
白氏文集……二一九、二九三
白山緣起……四二二、四七八、六〇三
白鳥……七
白鳥化生譚……三四二、三八六
八幡神……四四七、四七七
八幡愚童訓……六五七
八犬傳伏姫物語……三七七
八郎鰐……三七九
八曼陀羅……四八四
八香印……四八四
憚りの關……三三七
花の道遙……二五一
花咲爺話……三六七
俳諧歌……三三五、三四一
放生譚……四三七、四七四
放出……五二一
灰地獄……四七二
初瀨物語……六五八
半二……六六二
伴大納言繪詞……七六、一〇五、三九八、三九九
伴直方……三九、六八、一三四
伴信友……四二
萩野氏說……一二六
馬文耕……六二五
馬琴……三七三、三九七、六六二
坂東……三四九、三五二
晴明……四八四
鉢かつぎ姫物語……三六八
梅松論……六五〇
梅毒……五一二
繪……二七〇、五一五
般若寺……四九九
般若心經……二八七
化物怪譚……三七二、三八三、三九七
婆羅門(敎)……二九四、四〇二、四〇五、四〇七
婆羅門僧正……三三三、四二二
婆羅門正碑文……六〇三
橋姫傳說……三八四
橋柱說話……三九五
袴垂……三八〇、五四〇
濱松中納言物語……三八八、三八九、五八九、六〇一
早太郎傳說……八〇、三七八、三九七、六一六
播磨風土記……三六八、五九九

ヒ

ヒルン……五八六
美的法則……一
美的國文……二八七
美文學……一三、二六、一八〇、二〇八、二二五、三一四、二七一、三二二、三八〇、五二四、五二七、五七九、五八一、六一一、六一七
美學的批評法……一三、一五
美意識……二
比良山……四二一
比較說話學……一四六、二三五、三九一
比較文學史……一一、二〇、一三二、二四五、三九一
比叡(山)……一〇〇、一三九、三五二、三六一
批評的賞鑑……五九六
批評文學史……一五

膝栗毛……三一七、六二五
飛彈匠……一九七、五二一
飛彈匠物語……五〇二、五二〇　六二二
飛鉢說話……三六九、三七四　四二三
百物語……六二一
百萬遍……四八四
百鬼夜行……三七三、四四七　四五八、五三一　六二一
百錬鈔……八八
平假名物語……一三〇、二四七　二六〇、二六一
平田篤胤……四四〇　四六一
平田氏說……三八〇
人麿……三三九、六五二
人麿勸文……三四二　三七七、三七八
人柱傳說……三八三
人沼傳說……五四〇、五七二
人買……一九七、五三二
人雅……五六一
人繼……三七二
人有……四八四、五〇三
人嗣……四九七、五一五
人高……六〇五
人業……六〇一
人成……三八八、五九九
人記……六一八
人見尊物語……四七七
人神社……五七一
人湖……四四五
人琵琶……一六五、一七四
人琵琶湖……四〇九、四一一
人琵慮舍那佛（大日如來）……一六五、一七四
人琵沙門天……四〇九、四一一
人琵沙門本地……三六六
人琵沙門佛……三五九
人辟支佛……五六七
人悲田院……
人屏風歌……三三六
人貧女の一燈話……六四四

フ

ファリズム……四八二
フォルクス、エチモロギー……二五三　二七三
フレデリック、ロリエー……一一
ファウスト……四五九
文學的變形……三九六
文學的內容形式……一　一三〇、一三三、一三六　三九〇、五八二　五九八、六六八　六六九
文學形體……三九三、三九七　五八〇、五九七
文學の定義……一
文學社會……二一三、六〇五
文學の賞鑑……二
文學瑣談……三一三、三四四
文學批評……二
文の形相……二八二
文學觀……六七、一八〇　二九九
文耕堂……六六二
文挾……五六三
文學論……一、二一、九　二七
文史……二四五、二四七
文章……五七六
文學音樂時代……二七三
文學語……二七三
文學科學……三九三
文學上の傳說……
文學的素材……六五九
文學的歸納法……四、一一
文學的性質……六六六、六六七
文學研究の範圍……一七
文學の分折法……五
文學通史……一六
文學史方法論……九
文學史の定義……八
文學史的綜合法……一三
文學實意論……一八〇
文學時……三四三、五四三
文普賢……
文遍……
文性……一二、二〇、五　二三
文獻傳承……三五五、三九〇　四八九
文獻學的……一六
文獻學雜……
文獻學性……
文化史的方法……一五、六一
文復現……二〇五
文復……二八二
文藤岡氏說……一八、三九　五二、一一二　一一四
文藤井貞幹……三九
文藤原行定……三九
文船親王……五〇〇
文船岡山……五〇八、五六八
文船謠……六〇八
文富士山……三九五　四二二　四七八、六一六
文富士人穴草紙……三九七、六一八
文扶桑寄歸往生傳……六五七
文扶桑略記……一一七、一四四　二七五、三三六　三九九、六〇七
文扶桑往生傳……六六〇、六六九
文屋物語……三二九、六一八
文伏木曾我……六四一
文伏武帝……二四三
文冬嗣……六二、一二七

武士道……三八一、五〇四　一八四　五四三　五四七　五五一、五五二　五五五
武士團……四一一、五四二　五五三、五五五　五五九、五七六
岐神……四八一
風土記……二七四、三〇〇　三七二、五九九
風葉集……一一一、六〇二　六一二
諷刺……二二一、三一八　一五三、四七五
佛法譚……一一八、三五六　一四五
佛祖統記……一三四、一三五
佛教傳來譚……一六一、四一一
佛足石體……三三二、三三四　六〇八
佛教主義……一八一、一八三
佛國記……二〇九、二一〇
佛教的教訓……四四〇、五九二
佛教的要素……四八一　五九三　六二九　六五九　六六一　六六七、六六九　六七〇
佛教的文學……二〇九、二四七　二八二、二八五　四〇一、四四〇　五三三、五九一　五九二、五九三　五九七、六一一　六二九、六四一　六五八、六六六　六六八
佛教的國師……四五四、五二〇　四七八　五三六
ペンファイ……二四一、三五九
ペリッシエー……五、五八七
ヘーゲル……三四
ベーコン……一八八　四三九　四七五
平安前期……一七、六一、九　七、一八九、二　二二、三二二　三八〇、三八八　三八八、四一九　四三五、四五四　五二〇　五三四　六〇〇、六三〇　六六九
平安後期……六、六一、六三　一四三、一五三　一七五、二〇三　二六五、二七九　二八三、三八一　三八九、四一一　四三二、四四二
平民文學……三九八　六一一、六六九
平家物語……二四七、二六七　二七六、二九六　三〇八、三九四　四六八、六三七　六四五、六五八
平治物語……六三七
平他字類抄……二七六
平中……出定文
表出法……二四〇、二四八　二四九
表白……二八六、六三〇
表集……六三一
漂流奇譚……二七六
便化的漢文……二八六
辨慶……五〇三
壁前九年坊……六六一
邊地……二七〇
遍……三一二、三三九
遍照發揮性靈集……五四二、五九一　六一一、六六九
ホ
ボルヅドルフ……一〇、五九
ポスネット……一一
ホーマー詩……三三
ポストゲート……三〇、三二、三　三、四〇
本事經……一三六、一八二　四〇〇
本文的批評法……三〇、三二、三　六、四六、四九
本朝新修往生傳……六三一、六六九
本朝書籍目錄……五〇、七四、七　八、六一五
本朝神仙傳……六五、一一六
本朝世俗譚……五五、一六六　一七五
本朝佛法譚……五五、一六三　一八四、二四〇　二九六、四一三　四一四、四一五　四四四、四一三
本朝文粹……六五、五九一
本朝續文粹……六三〇
本生譚……一六〇、一六四　一六五、一七一　一七四、三五九

三六〇、三六九
四〇〇、四〇六
本地物……一七四、三九五
四三二
本地垂迹說……四三二、四四六
六三七、六五五
本院侍從……一八五、五三三
翻案……一四五、四一三
翻譯說……一四五
翻譯名義集……二七七、四〇八
梵王(天)……四〇二
梵天國……六六〇
慕歸繪詞……六四九

マ

マハバラタ……三六九
マッカロック……一五五、三六七
五八〇
埋金說話……三六七
政所屋……二六七
枕草紙……三〇、六二、七
〇、一一二、二
〇七、三二三
三八八、三九三
四三三、四四〇
五二〇、五二八
六〇一、六一九
枕雙紙……四二一
待獵……一九一、四七〇
五六八
松山鏡話……三七一、三九四
三九七
松本氏說……四〇六
松平樂翁……六二二
眞福田丸……三三三、四三一
末田地……四〇七
雅通……五〇八
雅明……三四一
匡衡……六、三四〇
匡房……一一六、四一六
五一八、五四四
六〇一、六〇九
將門……四九六、五五七
將門記……四八八
將門誅害日記……四八八
正木千幹……六二三
枚擧歸納的……一一〇
舞の本(詞)……三〇三、三九五
四二八、六一八
六五八
繼子譚……一六七、二一八
三七〇、三八一
三八二、三九七
萬葉五卷鈔……三四二
萬葉集……二四三、二六五
二七八、三二九
三三四、三四二
三七三、三七七
三八七、三八九
四二二、四九五
五六六、五七一
五八九、六〇〇

萬葉古集……三四二
萬能池……三七九
摩耶夫人……一九〇、四〇五
摩騰……四〇八
摩訶止觀……四四四
曼陀羅……四〇四、四〇九
四一〇、四一八
四四四、六〇三
六五九

ミ

ミリユー說……九
眉間玉話……三六八
壬生寺……四五二
身代說話……三七七、三八六
未知自變數……二六
岑雄……三三五
御杖……三三三
三守……五〇〇
三船……六〇三
三つ物……五一八
三輪式神婚說話……三八七、三九一
三輪義方本……三九
三井續燈記……六五六
三井寺……二七四、四七八
六三九
三井集……六三四
三河に咲ける……三二六
三上氏說……二六四
道しるべ……六五九
道行文……六五二、六五三
道眞……菅公
道長……九一、一二七
三三七、四二〇
四五五、五一二
五二〇、五三二
道範……三一五
道信……三三八
道親……六一一
明練……四五二
明尊……五四九
明豪……四九九
滿仲……三〇三、三九五
四七〇、四九六
五五四、六二五
光起……六六一
光行……六一二、六三〇
光長……一〇六、三九九
六三五
光信……八〇、三九四
六一七、六五六
六五七、六五九
光康……三九九
民族心理學……一二、四六七
民間信仰……二二四、四一一
四四二、四五三
四八〇、六〇四
民間傳說……一三八、二七四
三一一、三七九
三八七、三九二
三九七、六〇四

民間語原說……一九九
通光……六一四
通憲……六〇九、六五六
峯入……四二三、四七八
水鏡二人比丘尼……六六〇
都のつと……六五〇
雅び……二〇一
密敎……四一八、四四六
彌勒……五二〇
ム
無限財寶譚……三六八、三七五
無限地獄……二五〇、二六三
無名抄……三四二、三九二、三九四、六一一
無名草紙……三八一
無住……六四六
無空……六〇八
無迎講……四六六
室町時代……六五、一七四、二二九、三三〇
室鳩巢……六二二、二五八、二六四、三六六、三八二
奥……三五二
村岡五郎……五一一
メ
メンシユリヒカイト……二九二
明月記……三九八、五九一
明月集……六三五
明倫堂書目……三九
明經道……二二七
明法博士……二二七
冥報記……一三五、一四七、六二〇
冥途記……六〇四
妙樂寺……五一二
妙見講……四八四
乳母……五三〇
乳母草紙……六一七
盟約說話……三六六
モ
モーチヴ……三七二、三六六
モールトン……一一、一九
求……一三七、一四二
蒙求……六一二
蒙求和歌……六〇二
日擊……三五、三七
日代……三一六、五一〇
以言……六
文珠……三六九、四〇四、四〇七、四四五、四五五
模倣改作運動……二〇三、二〇五
文德實錄……二六四、四二三、五四四、二二七
文章道……二二七
文選……一五四、六三〇
文字關……二七八、五七〇
師長……六三一
師家……二九一
師……三七三、三七五
師……三七九
元……一一七
元良親王……三四〇
基……六〇二
基……三五、三七
基……二〇一
戾橋傳說……三六一
守……四〇七、四四五
尤の草紙……二〇一
物の哀れ……四八三
物の怪……三六九
桃太郎……二〇三、二〇五
ヤ
陽成院……五〇二、五〇八
夜光の玉……一八七、一九四
山越彌陀……五一四
山科……六三五
山伏……四二一、六四二
保尹……四九七、五五八
保時……一一七
保輔……三三七
保憲……四八四
安永……二一二
安王……三四〇
賴經……六二一、二二六
賴國……三六九、三九三
賴蓮……一八九、二二二
養老……六四八
養光……五一四
藥師寺……三六一
藥師寺緣記……六六一、六六四
藥師如來……四四五
藥師講式……六〇四
楊貴妃……二一九
山上憶良……五五八
山陰中納言話……三七六、三八二、五〇二、六五三
山科……六三五
山科集……六四二

山伏集……六三五
山岡浚明……三七、三九、四一、七二、七三
山岡元隣……六二一
山階集……六三六
山階寺……一一四、三五六、四一七、四二四、四五四、四九三、四九八
大和物語……一三八、一七六、一七七、三四〇、三四一、三八三、三八七、三八九、六〇一
矢走……二七六
吉野拾遺……六一六、六五四
吉野時代(南北朝)……一七七、三九四、三九九
横山由清……三九
横川……四二八
横座……三〇五
横孝……三二八、三四三、四七四
横家……九三、一一六、四八九
横清……五三二
横門……四九六、五〇二
横相……一一七、一二六、四九三、五〇〇、五三一
香房……六〇一
香業……六六〇
香文……一九七
香信……三〇六、五〇四、五四七、五四九
香通……八五、九二、一二八
香時……九三、五一一
香頼……四九二
香義……三三六、五一四
香光……二四三、四六六
香老荘主義……一九三、一九五、二〇六
香政……三七二
香迎和讃……五一七、五〇七
香落蹲舞……五一七
香隆……四一七
香隆池寺縁記……六〇三
香理智主義……一八六、一九一、二〇六、四四四
香理想世界……四六六、四七五
香理想時代……二〇〇
香立身譚……三二七
香立正安國論……五九二、六四二
香両部神道……四七六、五八九、六三四、六四四
香霊山……三三三、四〇六
香梁塵秘抄……三三四、六三一
香梁塵秘抄口傳集……六三二
香量的質的形的關係……六六四
香流泉啄木……一九七、六〇四、六〇五
香輪廻説……四六三、四六六
香懐……三五六
香白……三三九
香類聚和名鈔……六五、六〇二
香類聚的分類……一二五、一五五
香頼義……三一二、四八八
香頼光……二四三、四六六、五〇四、五一七
香頼政……三七二
香頼世紀(宇治大納言)……七七、一一一、二七〇
香世紀の翁……二一〇
香夜半の寝覚……一一二、三二六
香讀み本……二三五、五八三、六二一、六二七
香リテレチユーアリツケルト……一
香豫州神母……四一〇、六五一
香能宣……五〇八
香好忠……五〇八
香ラムプレヒト……一五
香ラングロア……三三
香ラフオンテーン……一五八
香龍門寺……四九三

一五九
類聚國史……一三八、四五五　六〇二
類聚名物考……四一、七二、六一七
盧至長者……三六八
レ
レウイゾーン……四
レーマン……七
靈岸寺……五〇九
靈異記……出日本靈異記
靈蒭……五〇一
歷史的科學……一二、二四　二五
歷史的辭典……二六一
歷史的分類……一二〇
歷史的表現……五七七　五八〇
歷史物語……一二一、二六〇　四八六、四八七　四九九、五一三　五六一、六一一
歷史哲學……一四
歷史院……五〇七
冷泉院譚……一五六、一六九　四七三、五三八　六二七
戀愛譚……戀愛生活の文學系統（第六系統）　五八八　五八九　五九五　六一〇
蓮照……三七五
蓮禪……六三七
蓮如……五九二、六五五
蓮圓……五五九
蓮露集……六三五
蓮門類聚經籍錄……六四九
蓮意……六一九、六五七
了譽……六五七
了智……六五七
了慧……六六〇
ロ
ロリエー……一一
ロバート、エス、アーノルド……八
ロマンティシズム……二〇三、二〇五
六衛府……三二一、五〇九
六條院……二九〇、三〇七
六波羅……二五八、四九四
六波羅密寺……四九七
六宮姫君……三二三、三三四　五六七
六時懺法……四八四、五一七
六地藏……四五一
六道……五一四
六角堂……五〇七
六十卷今昔物語……四一
鹿母夫人……三七一
露骨的……三一九
露宿居士……六六〇
ワ
和漢往生傳……二三九、六〇九　六三〇
和漢混淆文……二四五、五八三　六一二、六四三　六六八
和漢三才圖會……六七、六二八
和漢朗詠集……六五、一三八　二九三、三四三
和漢抄物……二三〇、六一二
和學辯……六八
和版書籍考……三九　六五〇
和歌論……一八〇
和歌傳說……三三一、三四二
和讃……五一九、六三〇　六三一、六六八
和論……六六〇
倭寇……一七七
往生要集……六五、一三七
往生傳……四二一、四六一　五九二、五九三　六〇五、六三三
往生十因……一一七、六三〇
往生極樂記……一三五、二〇九　二九五、三三二
往來文學……二八六、五九一　六一四
王昭君……一五二、一五五　一五九、三六二
王藤觀音……一九四、三九四
王璹……二一二、四九九
王鰐……四一二
話……三七九

今昔物語集の新研究索引　終

大正十二年三月七日印刷
大正十二年三月十日發行

【定價金五圓】

今昔物語集の新研究

著者　坂井衡平

發行者　東京市神田區鍛冶町五番地　伊藤小四郎

印刷者　東京市牛込區榎町七番地　竹内喜太郎

印刷所　東京市牛込區榎町七番地　日清印刷株式會社

發行所　東京市神田區今川橋大通　誠之堂書店
電話神田九百四十九番
振替東京四七七二番

検印

329
323

終